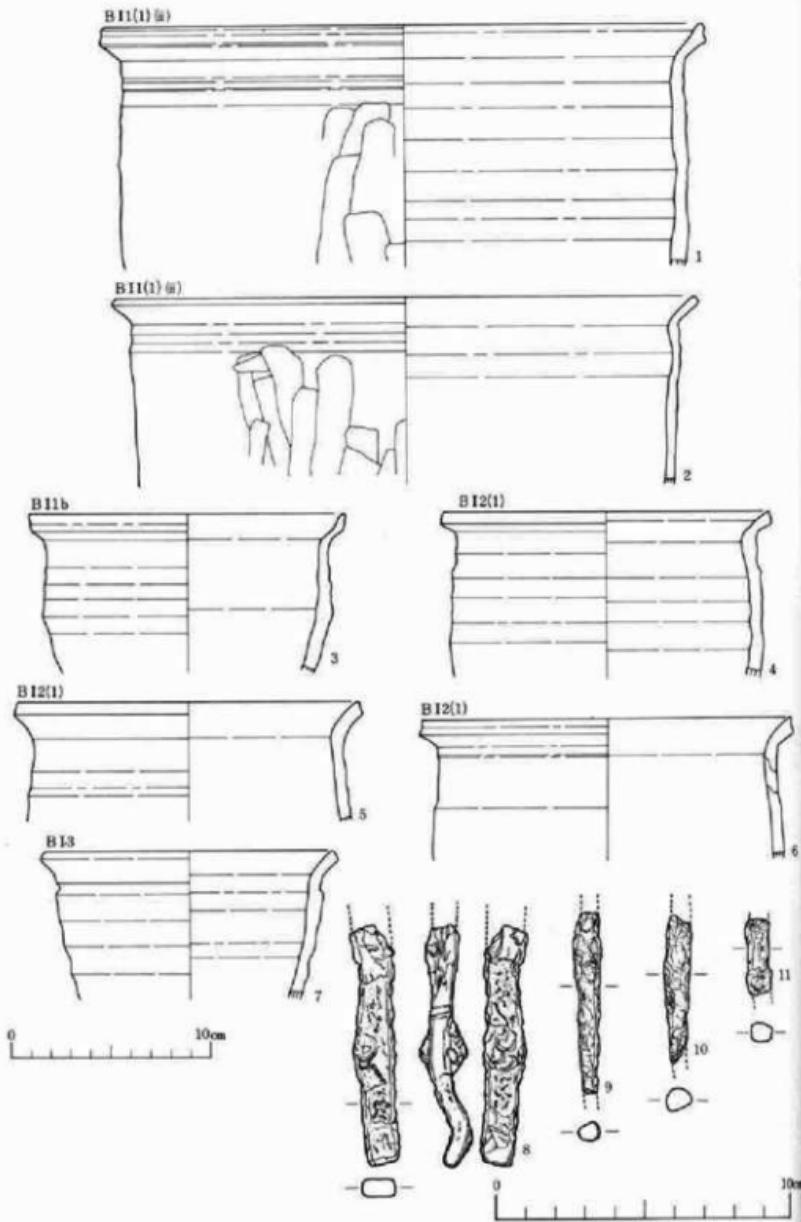


第72図 第20号住居跡 出土遺物 (1)



第73図 第20号住居跡 出土遺物（2）

体部が大きく開いて外傾するもの（13・14）と器高が普通で底径が小さく、体部が直線的に外傾するもの（11・12）とに分けられる。

高台付环形土器（第72図） 高台付环は、B I類（ロクロ使用で還元炎焼成）に属するものとB III類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に属するものとに類別される。

《高台付环B I類》（第72図5・10） 高台部が長く外傾し、底部周縁をロクロ調整したもの（B I 2③類）と高台部が長く外傾し、底部に菊花状のヘラ刻みを施して周縁をロクロ調整したもの（B I 2①類）とに分かれる。

B I 2③類の高台付环（5）は、环部の形態が器高の高い塊形を呈し、体部から口縁部までかなり丸味をもって立ちあがるものである。内外両面にヘラミガキを施し、黒色処理を加えている。

B I 2①類の高台付环（10）は、环部が体部より口縁部まで大きく開いて外傾するものである。

變形土器 瓢はB I類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に属するものに限られる。

《變形B I類》（第72図2～4、第73図1・2、4～6） B I類の瓢は器形の大小と最大径の位置によって細分され、口縁部に最大径をもつ大形のもの（B I 1(1)類）と体部に最大径をもつ大形のもの（B I 1(2)類）、および口縁部に最大径をもつ小形のもの（B I 2(1)類）とがある。

B I 1(1)類の瓢（第72図2・3、第73図1・2）は、体部がゆるく脹むもの（第72図2）とはとんど脹まず直線的に底部へと移行するもの（第72図3、第73図1・2）とがある。口縁部は、短くゆるく外反し口唇部を上下に弱く挽き出すもの（第72図2）、短く強く外反し口唇部を強く上方へ挽き出すもの（第72図3）、極端に短く外反し口唇部は単純に丸めてあるもの（第73図2）、極端に短く外反し口唇部を上方へ弱く挽き出すもの（第73図1）などに分けられる。器面調整は共通しており、体部下半外面にヘラケズリを施すほかはロクロナデで整えている。

B I 1(2)類の瓢（第72図4）は、口縁部が極端に短くゆるく外反するもので、体部の中央附近に最大径をもつ。体部下面外面にヘラケズリが施されており、体部内面にはロクロナデの前段階の調整である刷毛目痕が観察される。

B I 2(1)類の瓢（第73図4～6）は器形が共通している。口縁部は短くゆるく外反し、体部はゆるく脹むもので、中央付近に最部最大径をもつ。全面ロクロナデで調整している。

壺形土器 B II類（ロクロ使用で還元炎焼成）に属するものが破片で出土している。肩部で大きく張り出するもので、広口壺の破片と思われる。図示不能である。

鉢形土器（第73図3・7） B I類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に属するものである。3は口縁部が短く外反し、口唇部は上方へ強く挽き出している。体部は上半付近でやや脹むものである。7は口縁部が極端に短く直立ぎみに外反するもので、体部は直線的に底部へと移行する。体部最大径は上端付近にもつ。いずれも全面ロクロ調整である。

鉄製品（第73図8～11）8は細長い板状のものである。平のみ等の木工具の基部とも考えら

れるがはっきりしない。現存長で16.1cm、幅2.2cm、厚さ1.1cm土を計る。9~11は角針と思われる。いずれも細長い角棒で、現存長はそれぞれ12.2cm・10.0cm・5.1cmを計測する。

第21号 (F D50) 住居跡

【遺構確認面】 当地区は桑の木等による耕作がかなりの深さまで及んでいる。したがって、IIa層の上部もかなり擾乱を受けており、遺構は耕作土を除去して確認されている。

【保存状況】 木根等による擾乱を随所にうけており、保存状況はあまり良くない。全体のプランは確認可能である。

【重複関係】 当住居と重複する遺構は検出されていない。

【平面形・長軸方向】 南北方向に若干長いが正方形を意図したものであろう。長軸方向はN-22°30' - Wである。

【規模】 南北長で4.74m・4.55m、東西長が4.40m・4.22mとなり、床面積は約19.20 m²である。

【堆積土】 住居内堆積土は次下の2層に分けられる。

第1層：褐色のシルト層である。住居の上部全面を覆う。かたくしまっており、焼土粒・木炭粒を少量含む。

第2層：褐色のシルト層である。壁際を中心に床面上に分布する。第1層に比べてやわらかく、やや粘性もある。焼土粒・木炭粒を少量含む。

第1層、第2層とも住居廃絶後に自然的營力によって堆積したものと思われる。

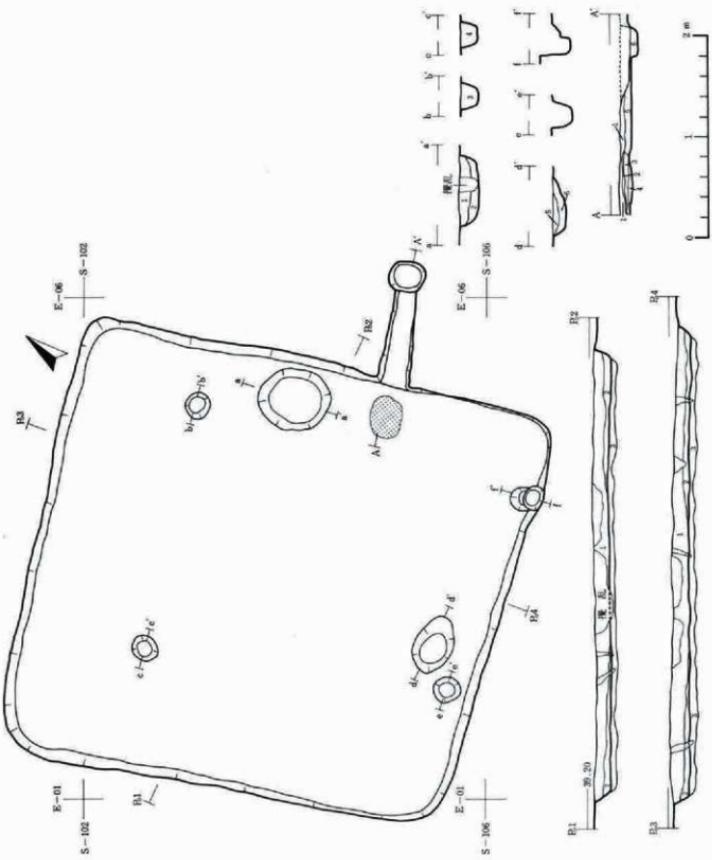
【壁】 地山を壁としている。床面からの立ち上がり角度は緩やかである。遺存状況は不良でほとんど消滅する個所もみられる。現存する壁高は東壁で2~21cm、西壁が11~23cm、南壁4~18cm、北壁18~21cmとなり、かなりのばらつきがある。

【床】 床面はほぼ完全に遺存しており、ほとんど凸凹はみられない。とくに叩き締めた痕跡はみられず、比較的やわらかい。床面上よりは大小6個のビットが検出されている。

最後に床面を掘り下げたところ、3~10cmの厚さをもつにぶい黄褐色土が検出された。掘り方の埋土と思われる。

【柱穴】 柱穴と考えられるものにはP₂、P₃、P₄、P₆の4個のビットがあり、大きさ、深さともほぼ一定している。深さは20cm内外であり比較的浅い。これらのビットを結んだ線はほぼ整った長方形を呈する。配置位置は住居の方形プランからやや南西方向に寄っており、うち2本は南壁に接近している。

【カマド】 東壁やや南寄りに付設されている。煙道部から煙出部にかけて部分的に削平されているほか、袖部はほとんど遺存していない。主軸方向はE-28°30'-Nである。



番号	層	土性	土色	特	特	特	他
第 1 層	1	褐色	(BY R 6/6)	シ	ロ	ト	地土鉢・木鉢を少箇含む
第 2 層	2	"	(BY R 4/4)	#			
黒り方砂土	3	にこい黄褐色	(BY R 4/3)	#			地山塊・褐色土質の混合土
カマツ	Y	Y					柱間内細粒土粒2層と同じ
	2	にこい黄褐色(BY R 4/3)	シ	ロ	ト	地土鉢が少く含まれる	
	3	褐色	(BY R 6/6)	#			柱一塊の地土を多量に含む
P 1	1	褐色	(BY R 4/4)	シ	ロ	ト	水深部
P 2	2	"	(BY R 4/4)	#			地土鉢・木鉢をかなり含む
P 3	3	褐色	(BY R 4/4)	#			
P 4	4	"	()	#			
P 5	5	褐色	(BY R 4/4)	#			上部に木鉢を多く含む
	6	"	()	#			
P 1	1	褐色	(BY R 4/4)	シ	ロ	ト	細粒でない
P 2	2	"	(BY R 4/4)	#			地土鉢・木鉢を少箇含む
P 3	3	褐色	(BY R 4/4)	#			
P 4	4	"	()	#			
P 5	5	褐色	(BY R 4/4)	#			
	6	"	()	#			細粒を多く含む

燃焼部底面は床面とほぼ水平になっている。火床部と思われる焼土面が41×31cmの範囲で確認されている。支脚と思われるものは発見されていない。袖部は完全に崩壊している。

煙道部は燃焼部奥壁に作られており、入口は燃焼部底面より2cmほど低くなっている。長さは約94cmあり、底面はほぼ水平に移行して煙出部と接続している。煙出部には直径約36cmのピットが掘られており、煙道端との比高は約6cmになっている。

燃焼部底面下の掘り方の有無はカマドの掘り下げを行なっておらず、不明である。

(貯蔵穴状ピット) 貯蔵穴の可能性をもつものにP₁がある。カマドの左脇に位置しており、大きさは76×61cmで、深さは18cmとなる。埋土は2層に分けられる。上層は褐色のシルト層で混入物はみられない。下層は褐色のシルト層でややねばりがある。焼土粒・木炭粒を少量含む。

(出土遺物) 当住居跡の出土遺物には土器と鉄製品とがあり、土器は壺・高台付壺・甕・壺の器種に分けられる。遺物は住居の南東隅付近から出土したものが多い。

环形土器 (第75図) 环には、B I類(ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理)とB II類(ロクロ使用で還元炎焼成)、およびB III類(ロクロ使用で酸化炎焼成)とがある。

〈环B I類〉 (第75図1~3) B I類の环には、底部を回転糸切りで切り離した後、再調整を加えないもの(B Ia類)と再調整を施すもの(B Ib類)とがある。

B Ia類の环(3)は破片をも含め、1点しか出土していない。器高が普通で底径が小さく、体部がややふくらみをもって外傾するものである。

B Ib類の环(1~2)は、体部下端より底部全面に手持ちヘラケズリを施すもの(H₁手法)である。体部がやや丸味をもって外傾するもの(2)と、器高が高くて底径が大きく、体部がやや丸味をもって立ちあがるもの(1)とに分けられる。

〈环B II類〉 **〈环B III類〉** いずれも回転糸切り無調整のもので、図示不能の細片である。

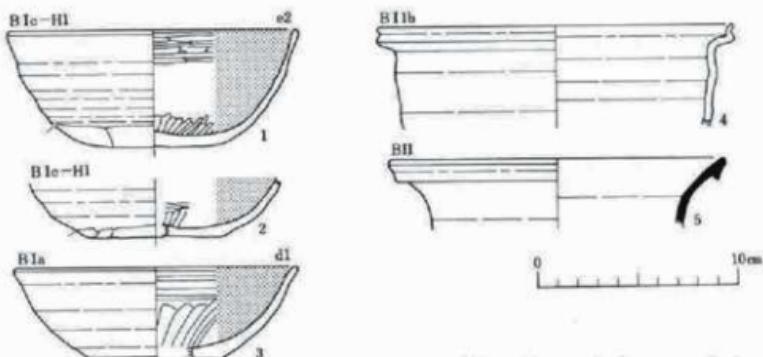
高台付环形土器 B I類(ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理)のものが破片で出土している。高台部は長く外傾し、底部に菊花状のヘラ刻みを施して周縁をロクロ調整したもの(B I 2①類)である。环部の形態は全く不明である。

甕形土器 B I類(ロクロ使用で酸化炎焼成)に属するものが少量出土している。器形の大小によって二分されるがいずれも体部の少片のため図示不能である。

壺形土器 (第75図5) B II類(ロクロ使用で還元炎焼成)に属するものである。口縁部の細片のため全体の器形は不明である。一応広口壺として分類した。

鉢形土器 (第75図4) B I類(ロクロ使用で酸化炎焼成)に類別される。口縁部は短く強く外反し、口唇部は上方へ強く挽き出している。体部はほとんど限らず上端付近に体部最大径をもつ。全面ロクロナデで整えている。

鉄製品 (第75図6~8) いずれも細長い角棒状のもので、釘と思われる。6には頭部も残



第75図 第21号住居跡 出土遺物

存する。長さの現存計測値はそれぞれ、8.9cm・6.3cm・4.5cmになる。

第22号(F22-1) 住居跡

(造構確認面) 造構は IIa 層上面より確認した。当地区では耕作によって IIa 層も部分的に擾乱を受けており、造構はこの耕作土(Ia層)を除去して検出されている。

(保存状況) 検出に際して壁を若干削平しているが全体的にはほぼ原形をとどめており、保存状況は比較的良好である。

(重複関係) 当住居と重複する造構は検出されていない。

(平面形・長軸方向) 南北方向にやや長い長方形を呈する。長軸方向は N-1°-W である。

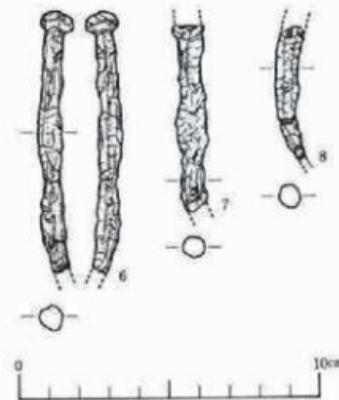
(規模) 長軸(南北)長で 5.74m・5.59m、短軸(東西)長が 5.44m・5.26m となり、床面積は約 29.40m² である。

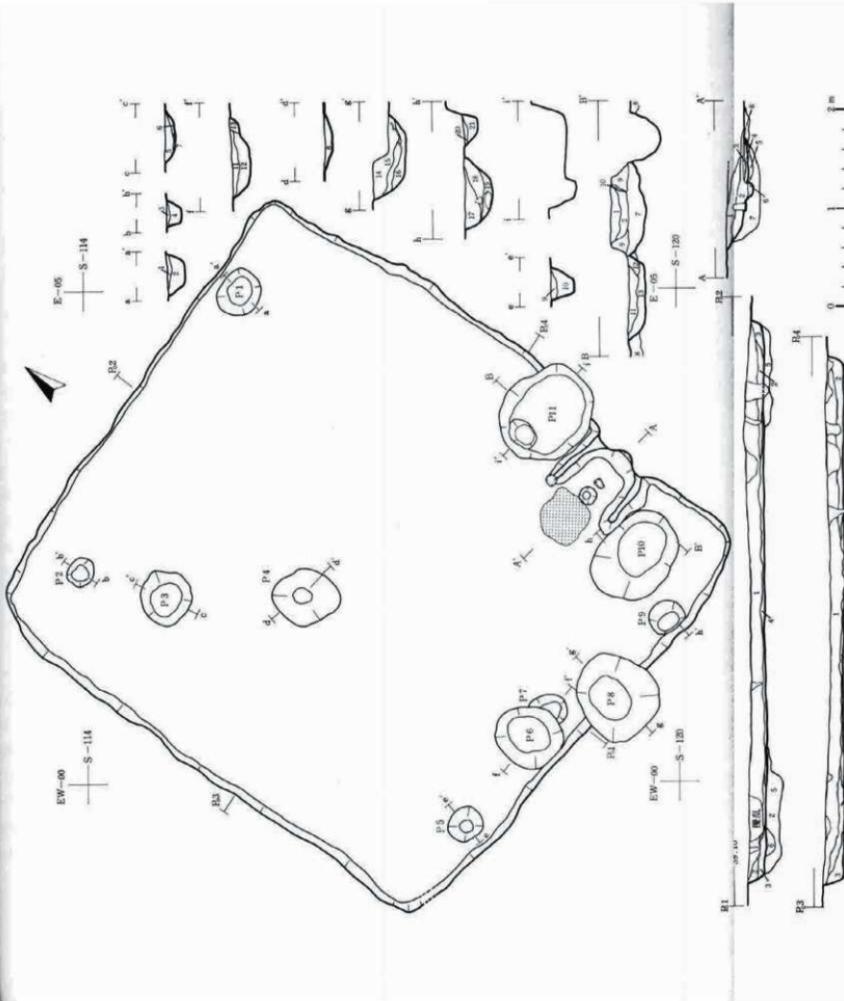
(堆積土) 造構内堆積土は基本的には以下の 3 層に大別される。

第 1 層：にぶい黄褐色のシルト層である。最も厚い層で住居のはば全面に分布する。少量の焼土粒・木炭粒を含む。

第 2 層：にぶい黄褐色のシルト層である。壁際を中心に分布する。第 1 層に比べてあらい堆積でややささげしている。少量の焼土粒・木炭粒を含む。

第 3 層：褐色のシルト層である。床面上に薄く堆積する。他の層に比べてやや粘性が強く、かなりの焼土粒・木炭粒を含む。





種	名	類	形態	土	性	の	地	の	地		
										特徴	地土
第 1 種	1. 鮎	魚類	1. にいわく魚類(10Y 5/5)	シ	ト	地土上、水質を含む合計	P 1	1. にいわく魚類(10Y 5/5)	シ	ト	適度の水質をもつ
	2. 鯉	魚類	2. 鮎色(10Y 5/2)	シ	ト	地土上、水質を含む合計	P 2	2. 鮎色(10Y 5/4)	シ	ト	適度の水質をもつ
	3. 鯉	魚類	3. 鮎色(10Y 5/4)	シ	ト	地土上、水質を含む合計	P 3	3. 鮎色(10Y 5/3)	シ	ト	適度の水質をもつ
第 2 種	4. 鯉	魚類	4. 鮎色(10Y 5/4)	シ	ト	地土上、水質を含む合計	P 4	4. 鮎色(10Y 5/4)	シ	ト	木質を含む
第 3 種	5. 鯉	魚類	5. 鮎色(10Y 5/5)	シ	ト	地土上、水質を含む合計	P 5	5. 鮎色(10Y 5/5)	シ	ト	木質を含む
第 4 種	6. 鯉	魚類	6. 鮎色(10Y 5/5)	シ	ト	地土上、水質を含む合計	P 6	6. 鮎色(10Y 5/5)	シ	ト	木質を含む
♂	♂	♂	1. にいわく魚類(10Y 5/5)	シ	ト	地土上を含む合計	P 4	7. 鮎色(10Y 5/5)	シ	ト	多量の水質をもつ
	2. 鯉	魚類	2. 鮎色(10Y 5/2)	シ	ト	やや少なからざる	P 5	8. 鮎色(10Y 5/3)	シ	ト	少量の水質をもつ
	3. 鯉	魚類	3. 鮎色(5 Y 7/0)	シ	ト	今や少なからざる	P 6	9. 鮎色(10Y 5/4)	シ	ト	少量の水質をもつ
	4. 鯉	魚類	4. 鮎色(10Y 5/6)	シ	ト	今や少なからざる	P 7	10. 鮎色(10Y 5/5)	シ	ト	少量の水質をもつ
	5. 鯉	魚類	5. 鮎色(10Y 5/7)	シ	ト	今や少なからざる	P 8	11. 鮎色(10Y 5/5)	シ	ト	少量の水質をもつ
	6. 鯉	魚類	6. 鮎色(10Y 5/7)	シ	ト	熱帯魚としている	P 9	12. 鮎色(10Y 5/5)	シ	ト	少量の水質をもつ
	7. 鯉	魚類	7. 鮎色(10Y 5/5)	シ	ト	熱帯魚としている	P 10	13. 鮎色(10Y 5/5)	シ	ト	少量の水質をもつ
	8. 鯉	魚類	8. 鮎色(10Y 5/5)	シ	ト	熱帯魚としている	P 11	14. 鮎色(10Y 5/5)	シ	ト	少量の水質をもつ
P 10	10. 鯉	魚類	10. 鮎色(10Y 5/4)	シ	ト	地土上、水質を含む	P 12	15. 鮎色(10Y 5/5)	シ	ト	地土をもつやや少なからざる
P 11	11. 鯉	魚類	11. 鮎色(10Y 5/5)	シ	ト	地土上、水質を含む	P 13	16. 鮎色(10Y 5/5)	シ	ト	地土をもつやや少なからざる
	12. 鯉	魚類	12. 鮎色(10Y 5/5)	シ	ト	地土上、水質を含む	P 14	17. 鮎色(10Y 5/5)	シ	ト	地土をもつやや少なからざる
	13. 鯉	魚類	13. 鮎色(10Y 5/5)	シ	ト	地土上、水質を含む	P 15	18. 鮎色(10Y 5/5)	シ	ト	地土をもつやや少なからざる

第1層、第2層とも自然的營力による堆積層である。第3層は住居が営まれた過程で形成された生活層と想定される。

〔壁〕 地山を壁としている。床面より急角度で立ち上がる。上面は若干削平されているが、現存する壁高は東壁で12~19cm、西壁が17~21cm、南壁12~17cm、北壁12~21cmとなっている。

〔床〕 床面はほぼ平坦な面をなしている。壁際を除き比較的かたくなっている。床面上からは大小あわせて11個のビットが検出されている。

なお、床面下には掘り方があり、壁に沿って約90~140cmの幅で掘り込まれている。深さは5~19cmとなり、にぶい黄褐色土が塊状に充填する。壁沿いを除いては地山をそのまま床面としている。

〔柱穴〕 床面上から検出された11個のビットのうち柱穴とすることのできるものにはP₁、P₂、P₃、P₄がある。これらは深さが16~21cmと浅く、大きさは若干のばらつきがみられるが、4個を結んだ配置形はほぼ整った長方形(台形)を呈する。配置位置は北壁・南壁に近接しており、P₁、P₂は壁に接している。

〔カマド〕 東壁南寄りの部分に付設されている。主軸方向はE-8°-Sである。

燃焼部は床面とほぼ水平になっており、段差はもない。焚口付近に51×47cmの範囲で火床部と思われる厚さ2~4cmの固い焼土面をもつ。焼土面の奥には深さ8cmの小ビットを持ち、さらに奥には支脚に使用したと思われる石が立っている。露出部分の高さは11cmになる。袖は地山のシルト質土を素材としており、芯材として利用したと思われる石が内部より数個発見されている。

煙道部、煙出部は地山面上からは検出されていない。おそらく急角度で立ちあがる構造をもつものであろう。

なお、燃焼部底面下より掘り方が検出されている。これは床面下の掘り方とは理土が異なっており、カマド燃焼部に限定された掘り方と想定される。

〔貯藏穴状ビット〕 貯藏穴と思われるものにはP₁₀とP₁₁がある。P₁₁はカマド右脇に位置し、大きさは100×73cmで深さは32cmとなる。理土は3層に分けられる。上層は緻密なにぶい黄褐色のシルト層で、少量の焼土粒・木炭粒を含む。中層はばさばさしたにぶい黄褐色土層で、袖・天井部の崩壊土と思われる。下層は褐色の砂質シルトで、かなりの焼土粒・木炭粒を含む。P₁₀はカマド左脇に位置し、約4分半が東壁外に出ている。大きさは108×89cmで深さは20cmである。理土は3層に分けられ、P₁₀とはほぼ共通した堆積状況を示している。

〔その他のビット〕 南壁と交差してP₈が検出されている。これが当住居に伴うものであるかは確証に欠ける。当住居の構築以前に掘り込まれたビットとなる可能性もある。

〔出土遺物〕 当住居跡の出土遺物には土器と土錐があり、土器は环・高台付环・甕・壺の器種に分けられる。遺物はカマドの周囲より出土するものが多い。

环形土器 (第77図～第78図～第79図) 环には、B I類 (ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理)、とB II類 (ロクロ使用で還元炎焼成)、およびB III類 (ロクロ使用で酸化炎焼成) がある。

〈环B I類〉 (第77図4～12) B I類の环には、底部を回転糸切りで切り離し、再調整を加えないもの (B Ia類) と再調整を施すもの (B Ic類) がある。

B Ic類の环 (4・5) は体部下端より底部全面に手持ちヘラケズリを施すもの (H手法) である。器高が普通で底径が小さく、体部が直線的に外傾するもの (4) と器高が普通で底径が大きく、ややふくらみをもって外傾するもの (5) がある。

B Ia類の环 (6～10) は、形態上の特徴によっていくつかに分けられる。いずれも器高は普通のもので、底径が大きく体部が直線的に外傾するもの (7)、底径が小さく体部がやや丸味をもって外傾するもの (8～9)、底径が小さく体部が直線的に外傾するもの (10) などがある。

〈环B II類〉 (第79図7・8) 回転糸切り無調整のもの (B IIa類) に限られる。8は底径が小さく、体部が直線的に外傾するものである。

〈环B III類〉 (第78図6～13、第79図4～6) 回転糸切り無調整のものである。形態上特徴によっていくつかに細分される。器高が低くて底径の大きなものには、体部がややふくらみをもって外傾するもの (第78図6・7) と体部がやや丸味をもって外傾するもの (8) がある。器高が普通で底径の大きなものには、体部が直線的に外傾するもの (9) と体部がややふくらみをもって立ちあがるもの (10・11) がある。また、器高が低くて底径が小さく、体部がやや丸味をもって外傾するもの (第78図12・13、第79図5・6) と器高が普通で底径が小さく、体部がやや丸味をもって外傾するもの (第79図4) がある。

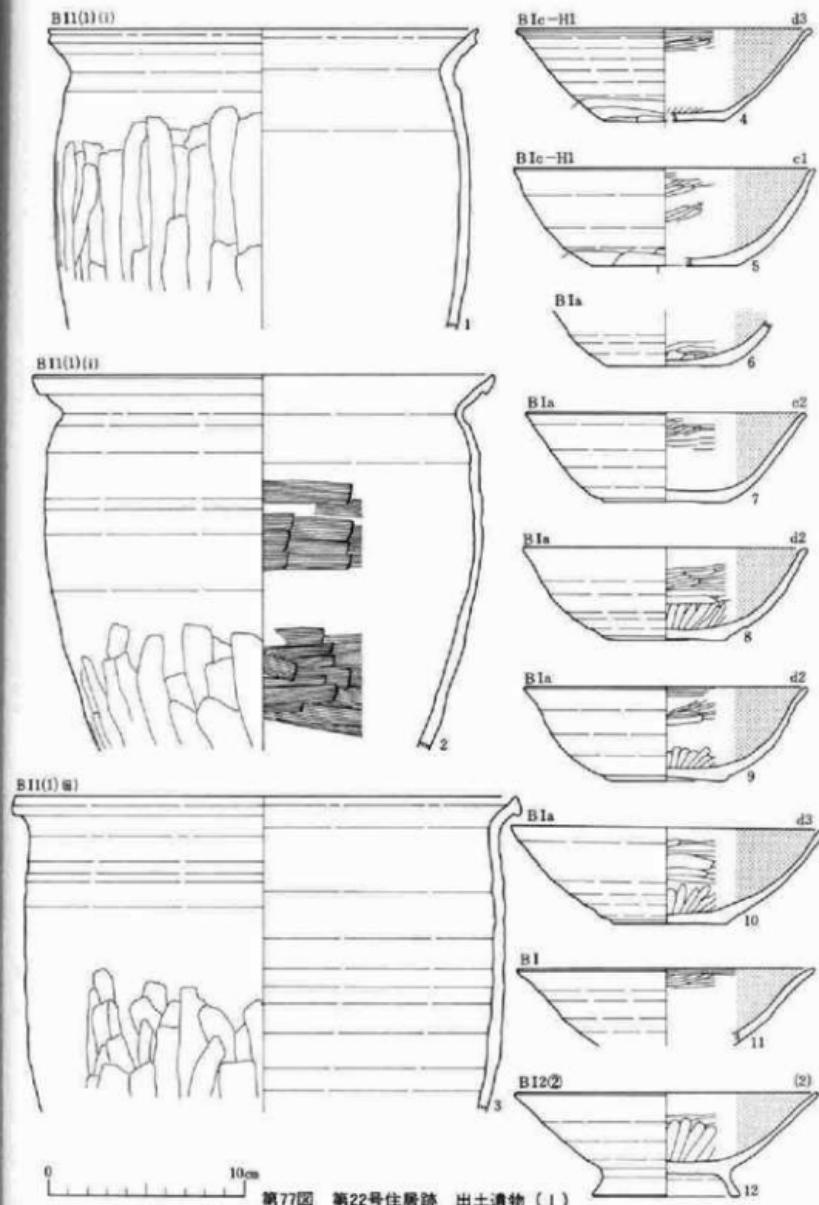
高台付环形土器 (第77図) 高台付环形土器には、B I類 (ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理) に属すものとB III類 (ロクロ使用で酸化炎焼成) に属すものがある。

〈高台付环B I類〉 (第77図12) 高台部が長く外傾し、底部はナデを施して周縁をロクロ調整したもの (B I 2②類) である。环部の形態は器高が低くて底径が小さくなり、体部は大きく開いて外傾する。ほかに、破片のなかには高台が長く外傾し、底部に菊花状のヘラ割みを施して周縁をロクロ調整するものも出土している。なお、第77図11は高台付环の环部と思われる。

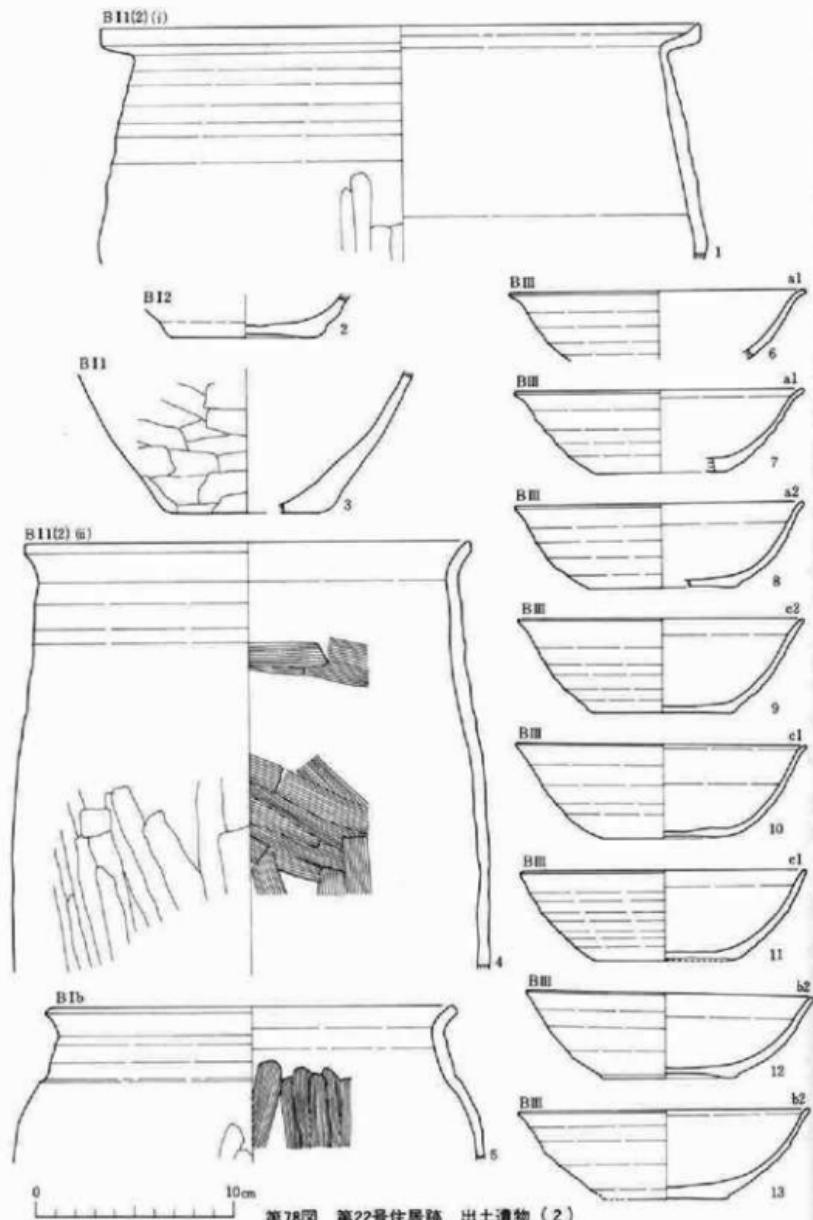
〈高台付环B III類〉 図示不能の細片で少量出土している。高台部が長く外傾し、底部周縁をロクロ調整するもの (B III 2③類) である。

甕形土器 (第77図・第78図・第79図) 甕には、B I類 (ロクロ使用で酸化炎焼成) に属すものとB II類 (ロクロ使用で還元炎焼成) に属すものがある。

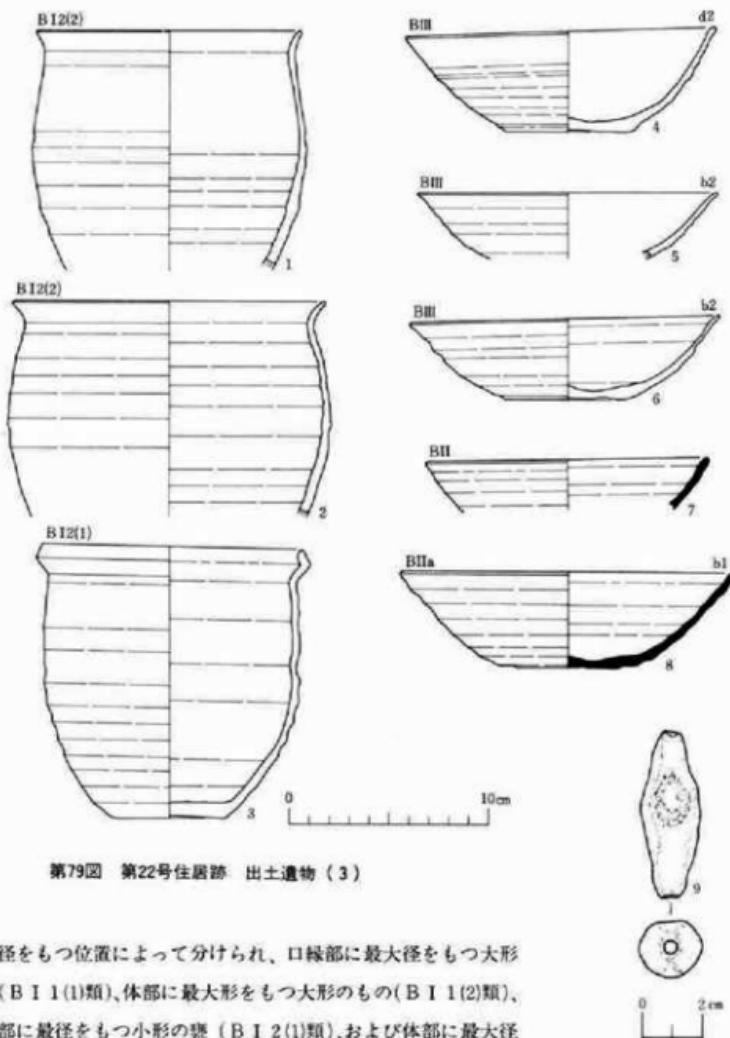
〈甕B I類〉 (第77図1～3、第78図1～4、第79図1～3) B I類の甕は、器形の大小と



第77図 第22号住居跡 出土遺物 (1)



第78図 第22号住居跡 出土遺物 (2)



第79図 第22号住居跡 出土遺物（3）

最大径をもつ位置によって分けられ、口縁部に最大径をもつ大形の甕(B I 1(1)類)、体部に最大形をもつ大形のもの(B I 1(2)類)、口縁部に最大径をもつ小形の甕(B I 2(1)類)、および体部に最大径をもつ小形のもの(B I 2(2)類)などに細分される。

B I 1(1)類の甕(第77図1～3)は、体部が脹むもの(1・2)と体部が直線的なもの(3)とに分けられる。1は口縁部が短く外反し、口唇部は上方外側へ挽き出している。体部はゆるく脹み中央付近に体部最大径をもつ。2は口縁部が短く外反し、口唇部は下方内側へ挽き出し

ている。体部は肩部から大きく脹らみ、上端付近に体部最大径をもつ。3は口縁部が極端に短く外反し、口唇部は上下に弱く挽き出している。体部はほぼ直線的に底部へと移行する。器面調整は体部下反外面にヘラケズリが施され、2は体部内面にヘラナデが施されている。

B I 1(2)類の甕（第78図1・4）は、それぞれの器形がかなり異なっており、1は口縁部が短く強く外反し、口唇部は上方へ挽き出している。体部は大きく脹み中央付近に最大径をもつものと思われる。4は口縁部が短くゆるく外反し、体部は下脹れ気味にゆるく張り出す。器面調整は体部下半外面には双方ともヘラケズリが施され、4の体部内面にはヘラナデが施される。

B I 2(1)類の甕（第79図3）は、口縁部が短く外反し、口唇部は上方内側へ強く挽き出るものである。体部はほとんど脹まず中央付近に体部最大径をもつ。全面ロクロ調整である。

B I 2(2)類の甕（第79図1・2）はともに器形が近似している。口縁部が短くゆるく外反し、体部がかなり脹るもので、中央付近に最大径をもつ。全面ロクロナデで調整している。1は、第18号（E J 50）住居跡出土の破片との接合資料である。

なお、第78図2・3は甕の底部片である。2は小形のもの（B I 2類）で3は大形のもの（B 11類）に類別される。3は体部下半より底部にかけて外面にヘラケズリが施されている。

〈甕B II類〉 図示不能の細片で小量出土している。器形には大小がみられる。

壺形土器（第78図5） B I類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に属するもので、頸部は内傾ぎみに立ちあがり、口縁部は極端に短く外反する。体部は肩部付近で大きく張り出している。器面調整は体部外面にヘラケズリ、体部内面にヘラナデを施している。

土錘（第79図9） 中央で脹む管状のものである。計測値は、長さが5.7cm、最大復径2.0cmになり、径約0.4cmの貫通孔が入る。

第23号（G F 50）住居跡

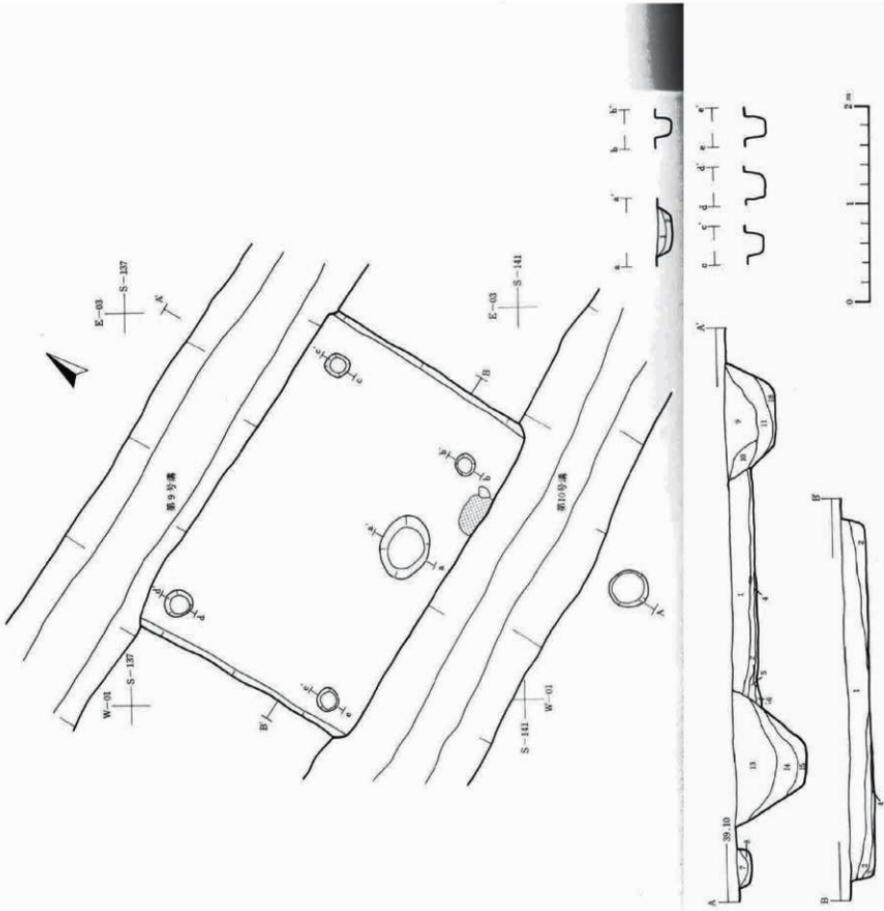
〔造構確認面〕 造構はIIa層のにぶい黄褐色土層上面より確認している。なお、確認面の上層は耕作土になっている。

〔保存状況〕 造構相互の重複により、かなりの削損をうけている。保存状況は不良である。

〔重複関係〕 第9号溝・第10号溝と重複関係にある。当住居の北壁が第9号溝によって切れ、南壁が第10号溝によって切られている。南壁・北壁ともまったく遺存しない。当住居は第9号溝・第10号溝よりも旧い。溝相互の新旧関係は不明である。

〔平面形・長軸方向〕 北壁、南壁を欠くため断定はできないが、平面形は東西に長い長方形を呈するものと推定される。長軸方向はN—103°30'—Wである。

〔規模〕 長軸（東西）長で3.73m・3.60m、短軸（南北）長は不明である。床面積は残存値で8.75m²である。



層番	地質	土	地	土	地	土	地	土	地	土	地	土	地	土	地	土	地	土	地	土
第 1 層	1 にじやく黒褐色(10YR 5/3) シルト	地主・水成粘土を少量含む	10 にじやく黒褐色(10YR 5/3) シルト	地主・水成粘土を少量含む	11 にじやく黒褐色(10YR 5/3) シルト	地主・水成粘土を少量含む	12 にじやく黒褐色(10YR 5/3) シルト	地主・水成粘土を少量含む	13 にじやく黒褐色(10YR 5/3) シルト	地主・水成粘土を少量含む	14 にじやく黒褐色(10YR 5/3) シルト	地主・水成粘土を少量含む	15 にじやく黒褐色(10YR 5/3) シルト	地主・水成粘土を少量含む	16 にじやく黒褐色(10YR 5/3) シルト	地主・水成粘土を少量含む	17 にじやく黒褐色(10YR 5/3) シルト	地主・水成粘土を少量含む	18 にじやく黒褐色(10YR 5/3) シルト	地主・水成粘土を少量含む
第 2 層	2 売	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
第 3 层	3 売	"	(10YR 5/4)	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
第 4 层	4 売	"	(10YR 6/4)	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
第 10号井																				
第 11号井																				
第 9号井																				

図602 図 確23号井断面

(堆積土) 住居内堆積土は以下の3層に分けられる。

第1層：にふい黄褐色のシルト層である。住居の上部全面に厚く堆積する。緻密でかなりかたい。少量の木炭粒・焼土粒を含む。

第2層：にふい黄褐色のシルト層である。住居中央に薄く、壁際に厚く堆積する。第1層に比べてやや疎で粘性も若干強い。木炭粒・焼土粒をかなり含む。

第3層：褐色のシルト層である。床面直上に薄く堆積し、分布範囲は限定される。少量の木炭粒・焼土粒のほか細砂を混入する。

第1層、第2層は住居廃絶後に自然的な営力によって堆積したものである。第3層は住居が営まれる過程で堆積した生活層と考えられる。

(壁) 地山を壁としている。現存する壁は東壁と西壁に限られる。床面より急角度で立ち上がる。壁高は東壁で19~21cm、西壁が21~24cmとなる。

(床) 南西部で若干低くなっているがほぼ平坦な面をなしている。とくに叩き締めた痕跡はみられず比較的やわらかい。床面上からは5個のビットが検出されている。

最後に床面を部分的に掘り下げたか掘り方等は検出されていない。地山をそのまま床としている。

(柱穴) 柱穴にはP₁、P₂、P₃、P₄の4個のビットがあてられる。これらは大きさ、深さとも齊一性が認められ、その配置形は整った長方形を呈する。埋土はどれもが褐色のシルト質土の單一層であり、混入物はみられない。

(カマド) 南壁東寄りの部分に構築されている。第10号溝によって破壊されており、燃焼部の一部と煙出部のみが遺存する。主軸方向はS-10°-Eである。

燃焼部は床面より若干掘り凹められている。火床部と思われるかたい焼土面が部分的に検出されている。焼土面の厚さは4~5cmで大きさは(22.5)×53cmになっている。

煙出部には40×38cmのビットが掘り込まれており、検出面よりの深さは15cmとなる。煙道部は検出されていない。

(貯蔵穴状ビット) 貯蔵穴と思われるものにはカマド右脇に位置するP₁がある。大きさは23×21cmで深さは17cmである。埋土は2層に分けられる。上層はにふい黄褐色のシルト層で、混入物はみられない。下層は褐色の粘土質シルト層で灰・焼土・木炭をかなり混入する。

(出土遺物) 当住居跡の出土遺物には、土器・鉄製品・土錐などがある。土器は壺・高台付壺裏の各器種がある。カマドの周囲より集中して出土している。

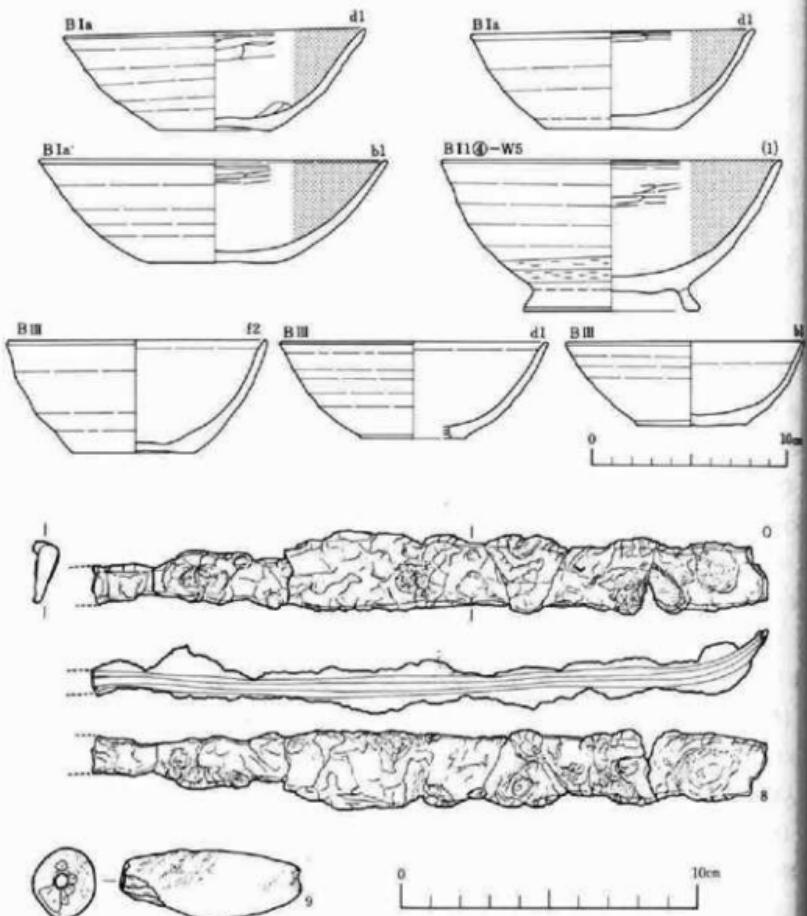
壺形土器 (第81図) 壺には、B I類 (ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理) とB II類 (ロクロ使用で還元炎焼成)、およびB III類 (ロクロ使用で酸化炎焼成) とがある。

《壺B I類》 (第81図1~3) B I類の壺はすべて回転糸切り無調整のもの (B Ia類) であ

る。器高が普通で底径が小さく、体部がややふくらみをもって外傾するもの(1・2)と器高が低くて底径が小さく、体部がややふくらみをもって外傾するもの(3)とがある。

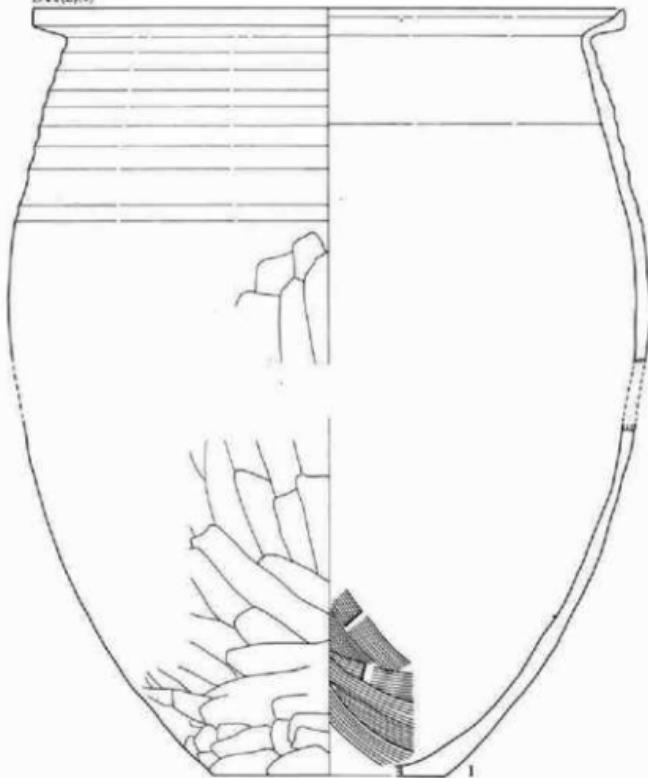
〈環B II類〉 図示不能の細片で少量出土している。回転糸切り無調整のものに限られる。

〈環B III類〉 (第81図5~7) 回転糸切り無調整のものである。器高が高くて体部がやや丸味をもって外傾するもの(5)、器高が普通で体部がややふくらみをもって外傾するもの(6)、



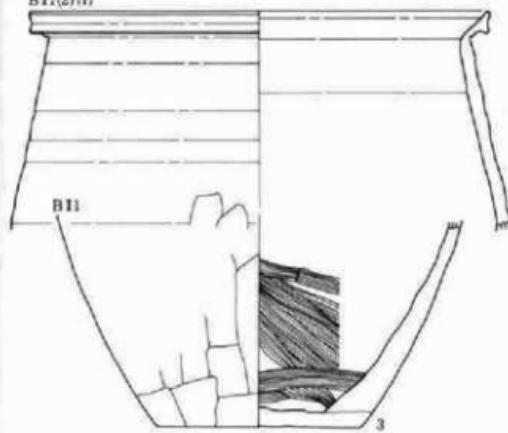
第81図 第23号住居跡 出土遺物(1)

BII(2)(i)



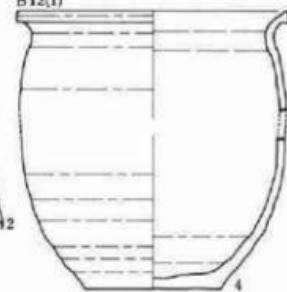
1

BII(2)(ii)



3

BII(1)



10cm

0

第82図 第23号住居跡 出土遺物 (2)

器高が低くて体部がややふくらみをもって外傾するもの(7)とに細分される。

高台付环形土器 (第81図4) B I類 (ロクロ使用で酸化炎焼成) に属すものが1点出土している。高台部は短く外傾し、底部は全面をロクロ調整したもの (B I 1④類) である。环部は、体部下端に回転ヘラケズリを施しており (底部は不明)、器高が高くて底径が大きく、体部がややふくらみをもって立ちあがるものである。

變形土器 (第82図) 瓢には、B I類 (ロクロ使用で酸化炎焼成) に属すものとB II類 (ロクロ使用で還元炎焼成) に属すものがある。

〈變B I類〉 (第82図1~4) B I類の瓢は、口縁部に最大径をもつ大形のもの (B I 1(1)類) と口縁部に最大径をもつ小形のもの (B I 2(1)類)、および体部に最大径をもつ大形のもの (B I 1(2)類) とに分けられる。B I 1(1)類の瓢は図示不能の細片である。

B I 1(2)類の瓢 (1~3) は2点出土している。1は口縁部が短く強く外反し、口唇部は上方へ弱く挽き出すものである。体部は大きく張り、中央付近に最大径をもつ。2は口縁部が強く外反し、口唇部は上下に挽き出すものである。頭部には鋭いくびれがみられ、体部の形態は1と共通する。なお、3は2の底部片と思われる。器面調整はともに、体部下半外面にヘラケズリ、体部下半内面にヘラナデが施されている。

B I 2(1)類の瓢 (4) は口縁部が短く外反し、口唇部は下方へ弱く挽き出している。体部はゆるく張り、中央付近に体部最大径をもつ。全面ロクロナデで整えている。

〈變B II類〉 図化不能の小片で少量出土している。大形で体部が大きく張り出すものである。

鉄製品 (第81図8) 刀子である。刃部と茎部の先端を欠く。現存長で23.1cmを測る大形のもので、刃部长は16.2cmで、刃部幅2.1cm、背幅0.6cmになる。茎部は刃部に比べてかなり細くなっている、1.1~1.6cmを測る。闊は背面にのみ段を有する。

土鍾 (第81図9) 中央部で脹む管状のものである。長さ6.1cm、最大腹径2.4cmを計り、貫通孔の径は約0.4cmになる。オサエで整形するが、部分的にヘラミガキが施されている。

2 井戸跡とその出土遺物

第1号井戸跡

〔遺構確認面〕 遺構はIIa層の上面より確認されている。当地区ではIb層がほとんど検出されず、耕作土の下に部分的に認められるにすぎない。

〔保存状況〕 遺構は上面の一部が耕作による擾乱をうけているほかはほぼ原形をとどめており、保存状況は良好である。

〔重複関係〕 当井戸跡と重複する遺構は確認されていない。

〔形状〕 当井戸跡は2段掘りである。開口部の平面形はほぼ円形を呈し、深さ中央部の傾斜変換点付近では隅丸方形に近い形となる。底部の形状は開口部と同様に円形である。

断面形は、開口部より約60°の角度で井戸柱上部付近に至り、一端やや外側にくびれて狭い平坦面を作っている。そこからは約50°の角度で底部へと移行する。

〔規模〕 開口部径455×509cm、中端軸長236×261cm、底部径126×137cmの規模をもち、深さ307cmを計る。

〔堆積土〕 遺構内堆積土は以下の10層に大別される。

第1層：黒褐色のシルト層である。3層に細分される。上層は粒～塊状の堆積状況を示し、あまりしまりが良くない。木炭粒・焼土粒をかなり含むほか、多量の小砾を包含する。中層は木炭の集積層で、木炭にはさまれて骨片が出土している。下層は上層とはほぼ共通するが、堆積状態が比較的密で黄褐色土が塊状に含まれる。

第2層：暗褐色のシルト層である。第1層と同様に3層に細分される。上層は焼土粒・木炭粒を多く含む緻密な堆積層で、かなりかたい。中層は木炭片を多量に含む層で、骨片を包含する。下層はにぶい黄褐色土を多量に混合する層である。

第3層：にぶい黄褐色のシルト層である。第1層、第2層に比べてやや粘性が強い。木炭粒・焼土粒を含む。

第4層：褐色の粘土質シルト層である。粘性は下方に向うほど強くなる。土の構造はかなり粗で、黄褐色土を大小の塊状に含む。木炭粒・焼土粒の混入はほとんどみられない。

第5層：褐色の粘土質シルト層である。塊状の堆積状況を示しかなりかたくなっている。

第6層：黄灰色のシルト質粘土層である。細砂を小量含み緻密な堆積状況を示す。上面には炭化物の粒子がシマ状に入り込む。

第7層：暗青灰色の粘土層である。木片・焼土粒・木炭粒・砾を包含する。上部には砂分の強い暗灰黄色土層が入る。

第8層：青灰色の粘土層であるが、第7層より粘性が強い。下方に向うほど粘性が強く、色調も灰色味が強くなる。地下の井戸枠の高さとほぼ一致しており、多量の木片を包含する。そのほかに井戸枠内からは、各種植物遺体・骨・土器片・木炭片・焼土粒などが検出されている。第7層と同様に上部には薄い暗灰黄色土層が入る。

第9層：青黒色の泥の層である。遺物は全く含まない。

第10層：褐色の砂層である。砂はやや粗いもので、緻密な堆積状況を示す。

以上の堆積土を要約すると以下のようになる。まず、第1層より第5層まではレンズ状の規則的な堆積状況を示しており、自然的な營力による堆積層として包括される。第6層より第8層までは上面が凸レンズ状に盛りあがっている。これは、水と土圧による変成作用をうけたものと思われ、基本的には上部の層と同様の堆積をしたものと推定される。第9層は井戸として使用する過程で形成されたもので、第10層は人為的に敷いたものとして認定される。

【井戸枠】 井戸枠は、側板を横にして方形に組みこんでおり、いわゆる井籠組のものである。^{カイロ} 横板は5段に組まれている。上部の4段は横板の端部上下面に深い切り込みを造って組み合せ、最下部は入隅に組まれている。上部の3段は1段目と3段目の板でそれぞれの幅を調節し、3段目で高さがほぼ水平になるようにしてつくられる。4段目の板は井戸の掘り方の傾斜に合わせて下方の角を丸めてある。

井戸の横板の長さは上3枚が約147~156cm、4枚目が125~132cm、5枚目が70~83cmとなり、幅は上3枚が広いもので約25cm、狭いもので15cmとなる。4枚目の幅は約25cm、5枚目が25~30cmを計る。厚さは上4枚が約5cm、5枚目が約2cmである。

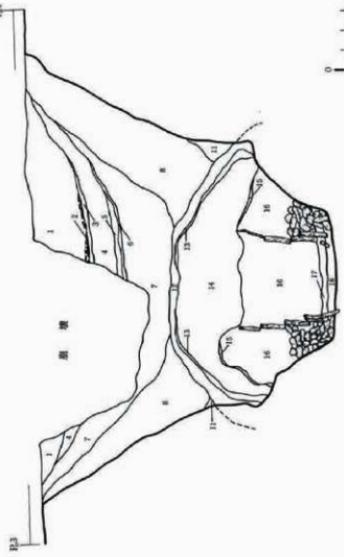
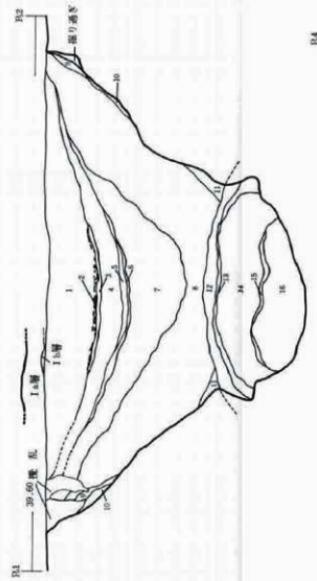
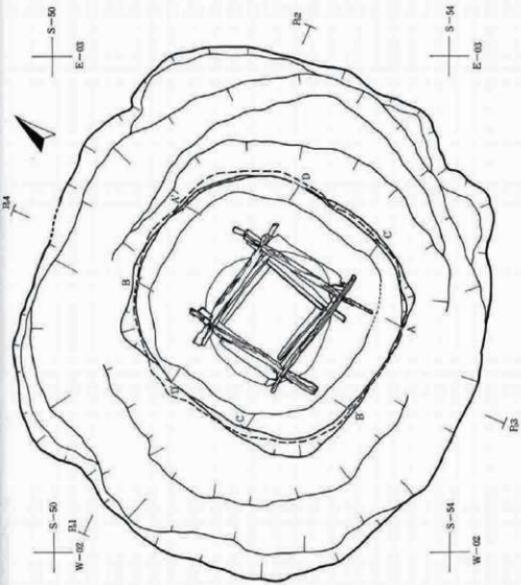
方形に組まれた内側の規模は上部が約90cm、4段目以降が約75cmとなり、井筒全体の高さは約100cmを計る。

最下部の横板は、井戸掘形底部の砂礫層に薄く砂を敷きつめ、その直上、ないしはや下部に埋めて設置されている。さらに、底部より約40cmほど上部までは井戸枠の外側に礫を埋め戻して固定している。

【出土遺物】 当井戸の出土遺物には、土器・鉄製品・勾玉・土錐などのほか各種植物遺体がある。土器は壺・高台付壺・甕・壺・鉢の器種に分けられる。遺物の出土量は少なく、とくに土器はすべて小片であり、原形の半以上残存するものは1点も出土していない。層位的には上層より出土するものが多く、中層は相対的に僅少である。当井戸の廃止時期にかかる最下層の遺物は、図化不能のものが若干出土している。

壺形土器（第93図） 壺には、B I類（ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理）とB II類（ロクロ使用で還元炎焼成）、およびB III類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがある。

〈壺B I類〉（第93図1~10） B I類の壺には回転糸切り無調整のもの（B Ia類）、回転糸

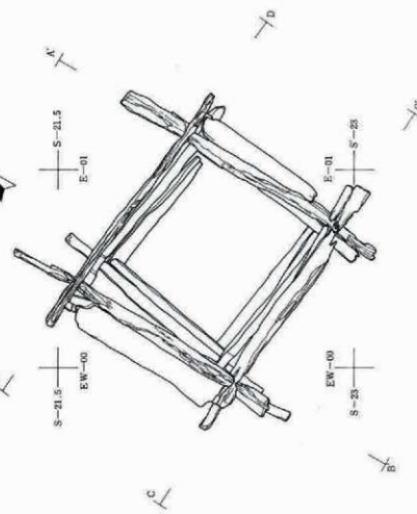
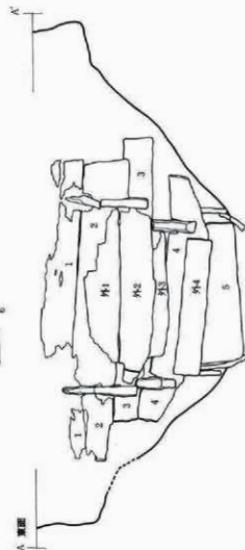
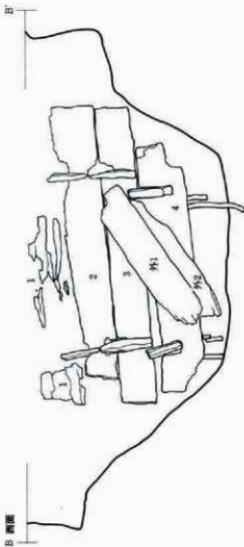
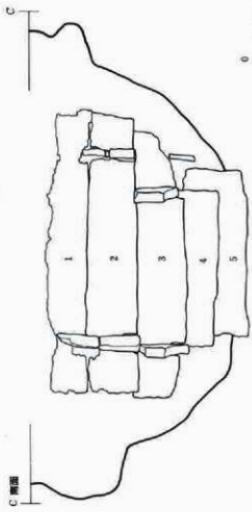


層号	層名	土色	土性	特徴	地質	層号	層名	土性	地質	特徴
第1層	1	灰褐色	砂, 粘土	小塊の木炭・焼け枝を含む	木炭層	5	灰褐色	砂 (D-Y 5/2)	シルト	粘土 (D-Y 4/4)
#	2	灰褐色	砂 (D-Y 5/2)	木炭層	木炭層	6	灰褐色	砂 (D-Y 5/2)	シルト	粘土 (D-Y 4/4)
#	3	灰褐色	砂 (D-Y 5/2)	木炭層	木炭層	7	灰褐色	砂 (D-Y 5/2)	シルト	粘土 (D-Y 4/4)
#	4	灰褐色	砂 (D-Y 5/2)	木炭層	木炭層	8	灰褐色	砂 (D-Y 5/2)	シルト	粘土 (D-Y 4/4)
第2層	5	灰褐色	砂 (D-Y 5/2)	木炭層	木炭層	9	灰褐色	砂 (D-Y 5/2)	シルト	粘土 (D-Y 4/4)
#	6	灰褐色	砂 (D-Y 5/2)	木炭層	木炭層	10	灰褐色	砂 (D-Y 5/2)	シルト	粘土 (D-Y 4/4)
#	7	灰褐色	砂 (D-Y 5/2)	木炭層	木炭層	11	灰褐色	砂 (D-Y 5/2)	シルト	粘土 (D-Y 4/4)
第3層	8	灰褐色	砂 (D-Y 5/2)	木炭層	木炭層	12	灰褐色	砂 (D-Y 5/2)	シルト	粘土 (D-Y 4/4)
#	9	灰褐色	砂 (D-Y 5/2)	木炭層	木炭層	13	灰褐色	砂 (D-Y 5/2)	シルト	粘土 (D-Y 4/4)
						14	灰褐色	砂 (D-Y 5/2)	シルト	粘土 (D-Y 4/4)
						15	灰褐色	砂 (D-Y 5/2)	シルト	粘土 (D-Y 4/4)
						16	灰褐色	砂 (D-Y 5/2)	シルト	粘土 (D-Y 4/4)
						17	灰褐色	砂 (D-Y 5/2)	シルト	粘土 (D-Y 4/4)
						18	灰褐色	砂 (D-Y 5/2)	シルト	粘土 (D-Y 4/4)
						19	灰褐色	砂 (D-Y 5/2)	シルト	粘土 (D-Y 4/4)

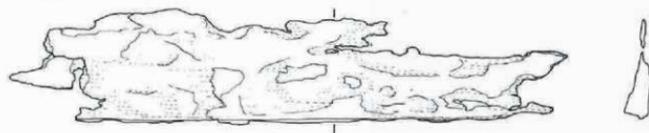
第33回 第1号井戸跡(1)

图 84 第 1 号井声测 (2)

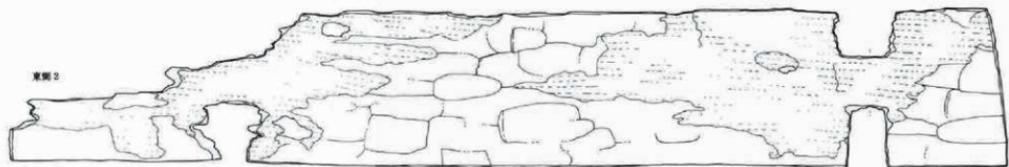
0 100 200 300 400 500



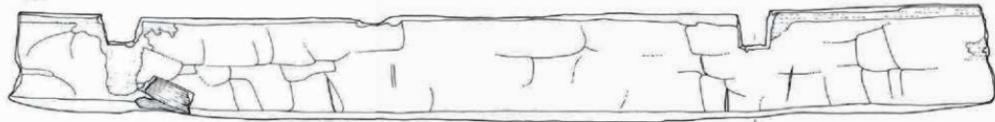
東側1



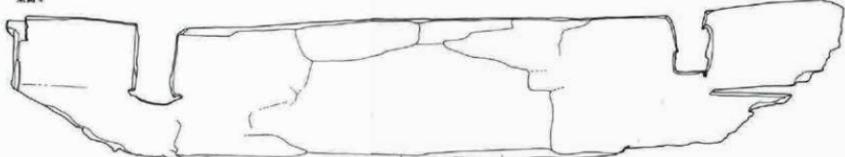
東側2



東側3



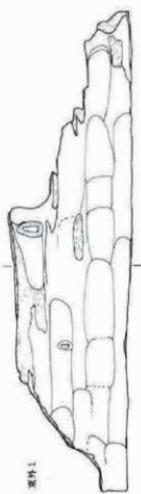
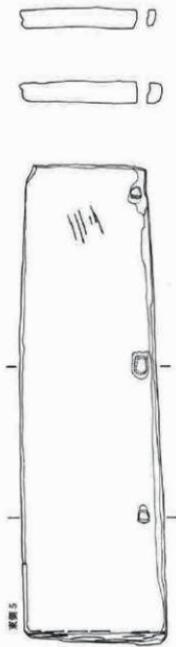
東側4



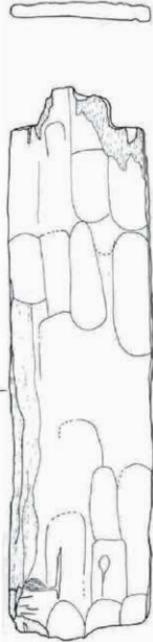
10
1 : 6
20cm

第85図 井戸幹黄測図(1)

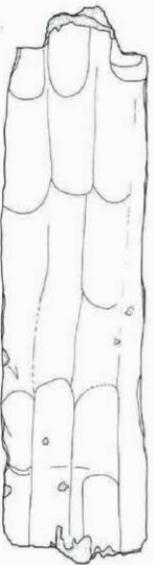
新石器 井口种类图 (2)



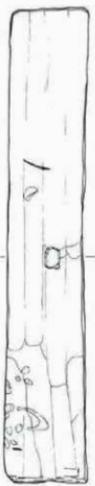
井外 1

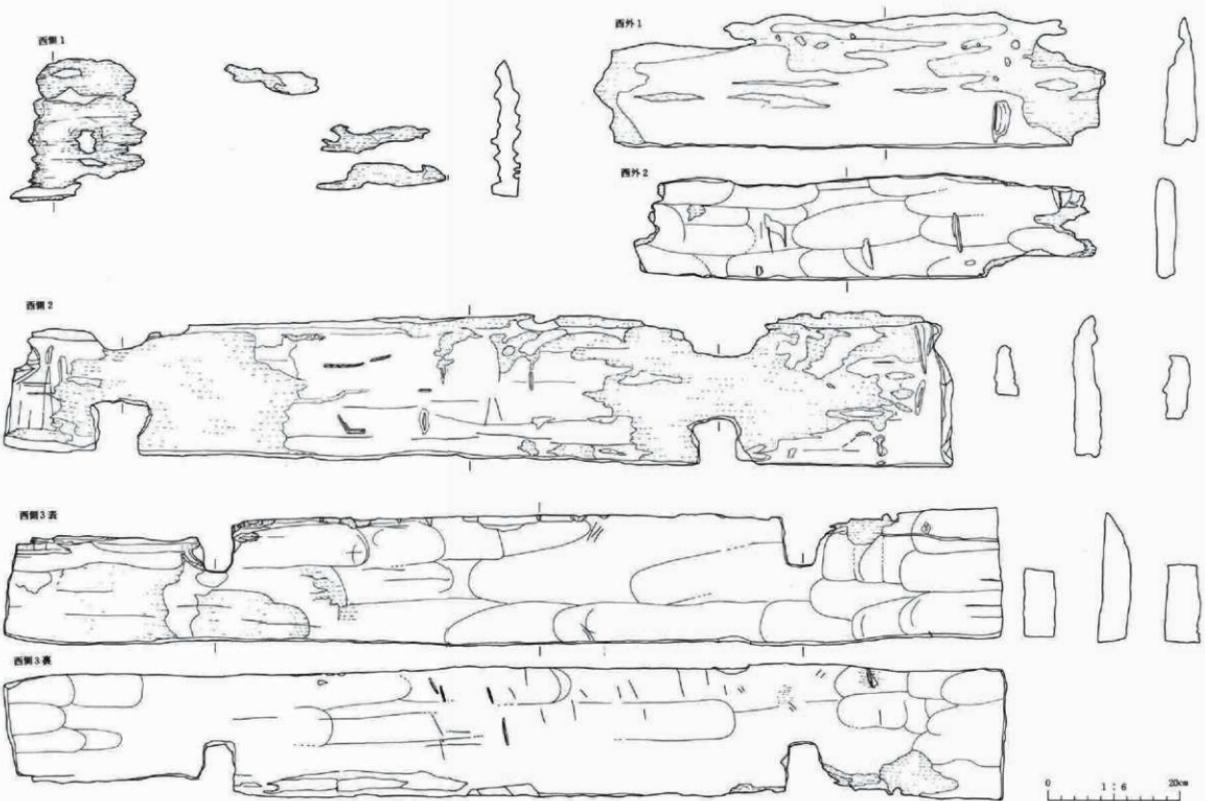


井外 3



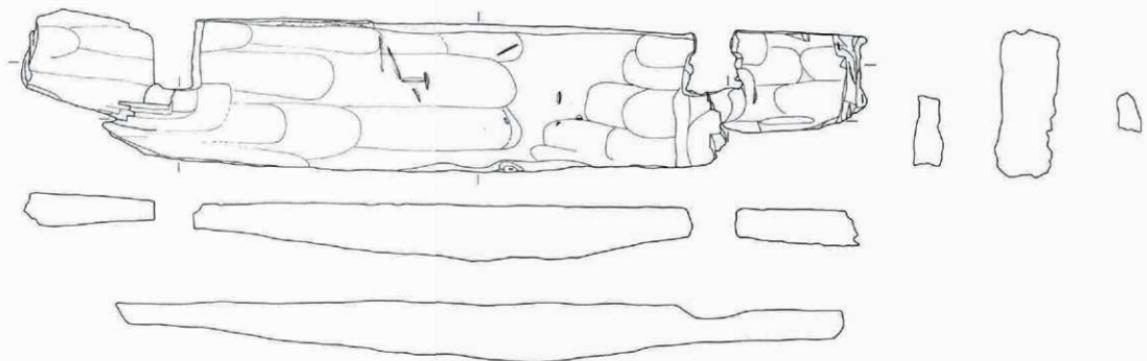
0 1 : 6 20cm



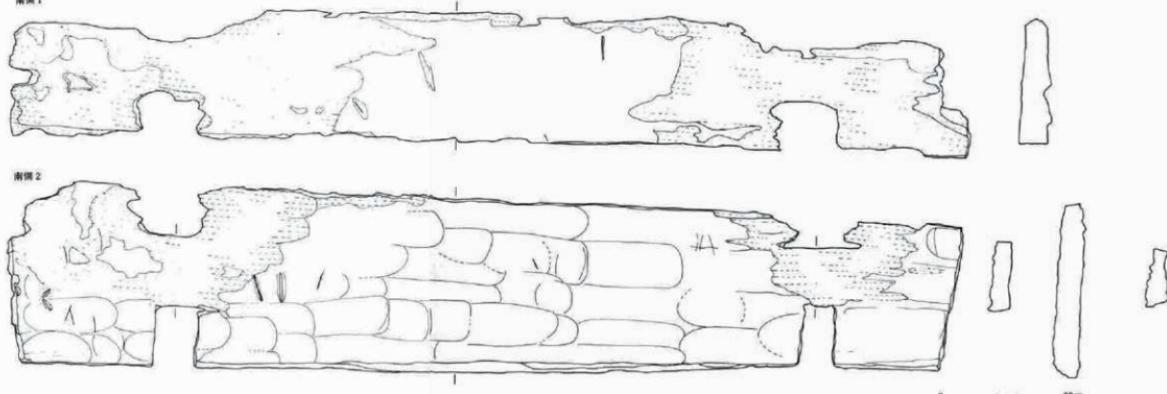


第87図 井戸枠実測図 (3)

西側 4



南側 1

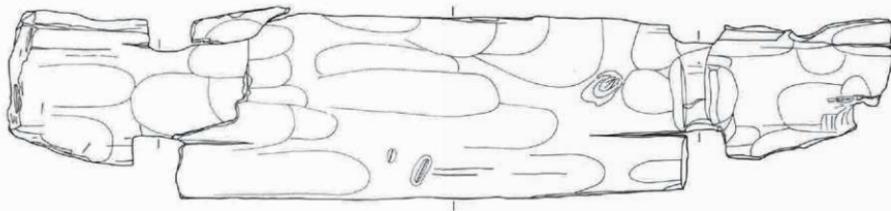


南側 2

0 1 : 6 20m

第88図 井戸枠実測図(4)

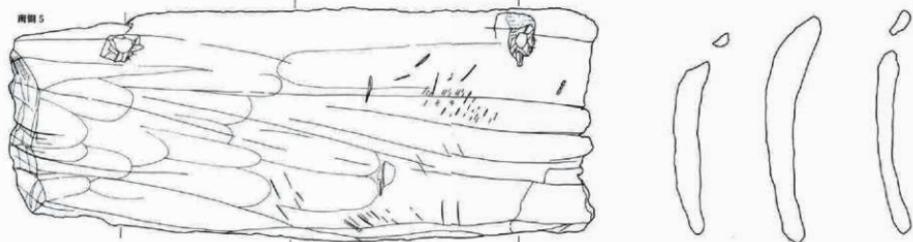
南図3



南図4



南図5



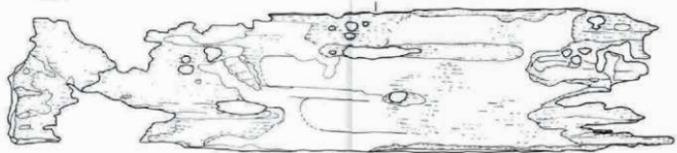
0 1 6 20cm

第89図 井戸狩実測図(5)

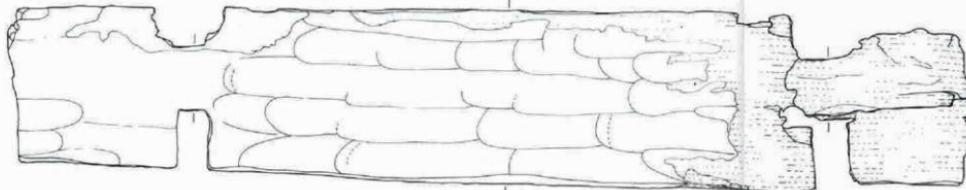
北图1



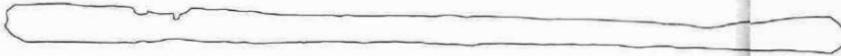
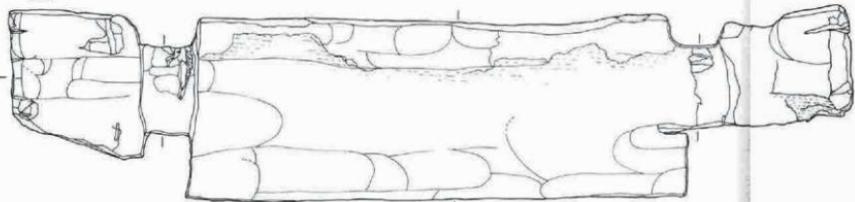
北图2



北图3



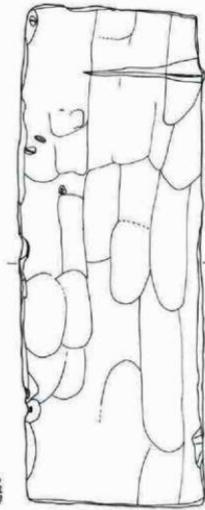
北图4



0 1:6 20cm

第90図 井戸枠実測図(6)

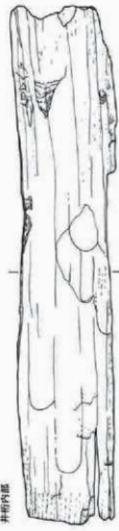
井筒5



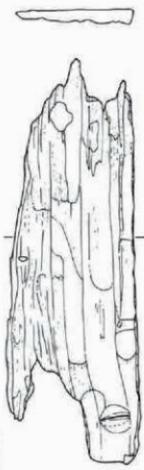
井筒6



井筒内部



井筒内部



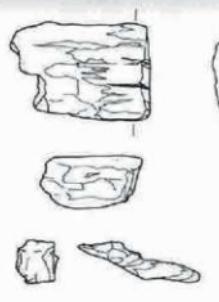
井筒内部



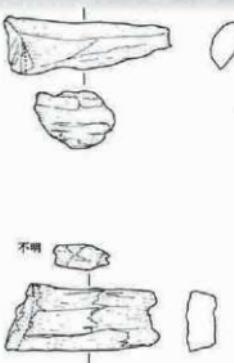
0 1 : 6 20mm

第9图 井筒种类图(7)

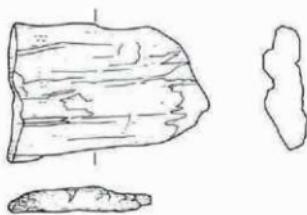
不明



不明



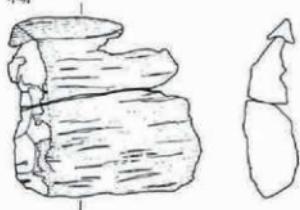
不明



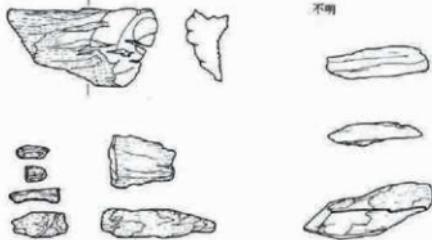
不明



不明

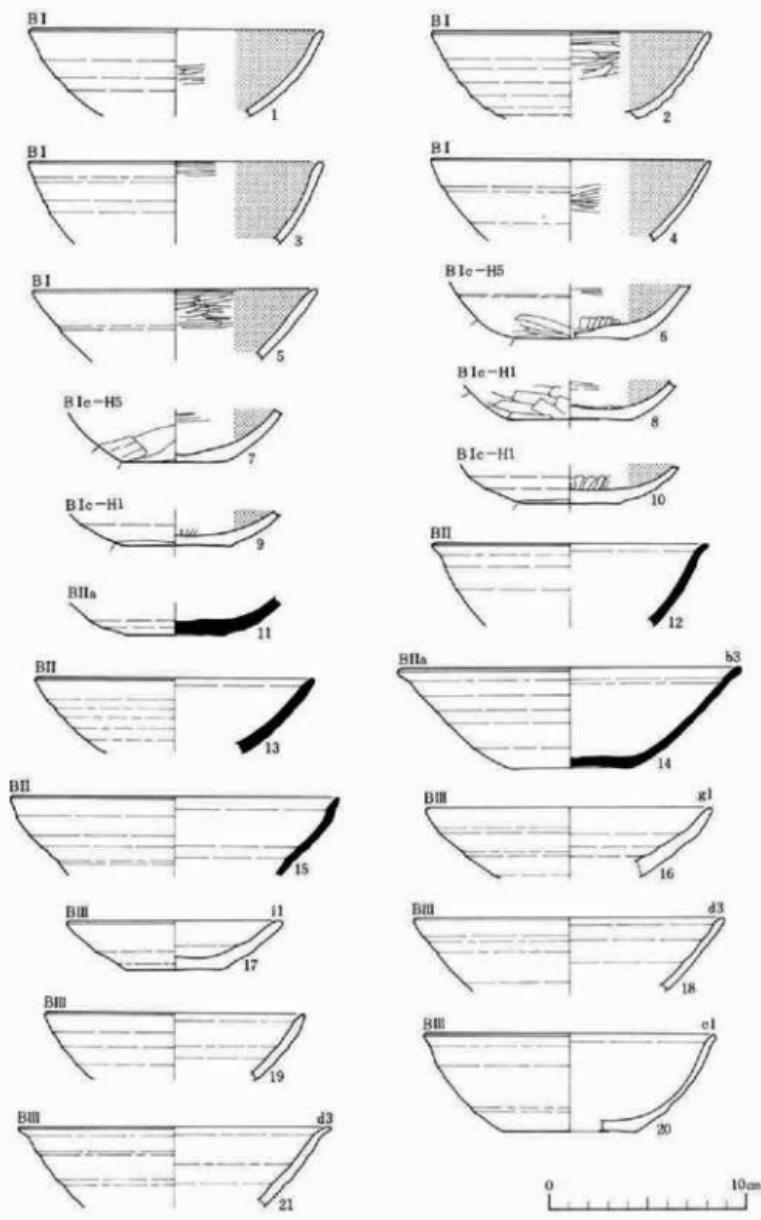


不明

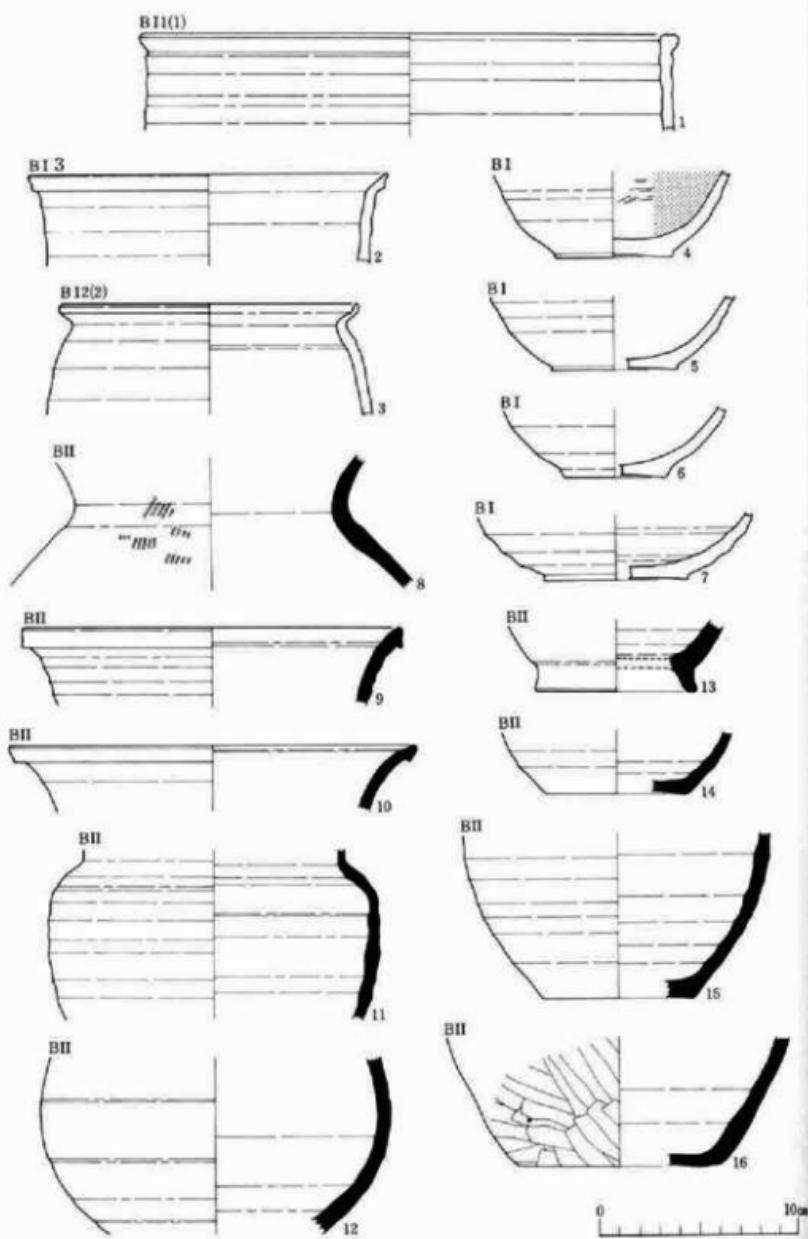


0 1 : 6 20cm

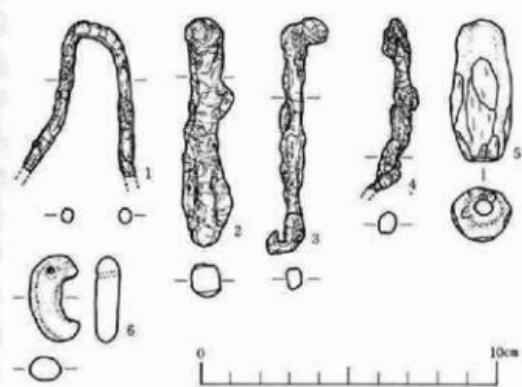
第92図 井戸枠測図(8)



第93図 第1号井戸出土遺物(1)



第94図 第1号井戸出土遺物（2）



第95図 第1号井戸出土遺物（3）

切りで切り離した後、再調整を施すもの（B I c類）、再調整のため底部の切り離し手法が不明のもの（B I e類）などがある。

B I a類の环は中～上層より出土している。細片のため全体の器形は不明である。

B I e類の环（6～9）とB I e類の环（10）は、井枠内、ないしは下層より出土し、中～上層よりは出土しない。すべて手持ちヘラケズリによる再調整で、体部下端にのみ施すもの（He手法）（6・7）と体部下端より底部全面に施すもの（Hh手法）（8～10）とに分けられる。

（**环B II類**）（第93図11～14）回転糸切り無調整のもの（B IIa類）と回転ヘラ切り無調整のもの（B IIb類）とがある。

B IIb類の环は2片あり、いずれも図示不能の細片である。井桁の外周を埋める環の内部より出土している。B IIa類の环（11～14）は、小片のため全体の器形を知りえるものは1点のみ（14）である。器高が普通で底径が小さく、体部は大きく開いて直線的に外傾する。

（**环B III類**）（第93図16～21）器形の特徴によりいくつかに分けられる。器高が極端に低く体部が大きく開いて外傾するもの（17）は最上部より出土する。器高が普通で底径が小さく、体部が直線的に外傾するもの（18・21）は中層より出土し、器高が普通で底径が大きく、体部がややふくらみをもって立ちあがるもの（20）は下層より出土している。

高台付环形土器 高台付环には、B I類（ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理）に属するものとB III類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に属するものとがある。

（**高台付环B I類**） 図示不能の細片で少量出土している。高台部が短く外傾し、底部周縁をロクロ調整するもの（B I 1③類）と高台部が長く外傾し、底部に菊花状のヘラ刻みを施して周縁をロクロ調整するもの（B I 2①類）とがある。どちらも环部の形態は不明である。

（**高台付环B III類**） 高台部が長く外傾し、底部にナデを施して周縁をロクロ調整するもの（B III 2②類）が上層より1点出土している。

變形土器（第94図） 瓢には、B I類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に属すものとB II類（ロクロ使用で還元炎焼成）に属すものがある。いずれも小片であり、図示可能のものは少い。

〈**變B I類**

1は口縁部に最大径をもつ大形のもの（B I 1(1)類）で、頭部のくびれはほとんどみられず、口縁部は極端に短く直立する。最上層より出土している。3は体部に最大径をもつ小形の瓢（B I 2(2)類）で、口縁部は短く強く外反し、口唇部は強く上方へ挽き出している。体部は大きく膨るもので、中央付近に最大径をもつ。全面ロクロナデで整えている。

〈**變B II類**

壺形土器（第94図12・13） B II類（ロクロ使用で還元炎焼成）に属すものに限られる。12は長頸壺の体部片と推定されるもので、かなり湾曲の強い体部をもつ。13は高台の付く底部片で、上部の形態は全く不明である。

鉢形土器（第94図2・4） 鉢はB I類（ロクロ使用で還元炎焼成）に属すものに限られる。2は口縁部が極端に短くゆるやかに外反し、口唇部は上方外側へ挽き出している。体部はほとんど眼まず直線的に底部へと移行する。上端付近に体部最大径をもつ。4は下層より出土したもので、底部の小片である。内面にはヘラミガキを施し、黒色処理を加えている。

そのほか、B I類に属す底部片（5～7）が出土している。器種は不明であるが、5・6は鉢となる可能性が強い。

鉄製品（第95図1～4） 1はU字形を呈する細長い棒状のもので、屈曲部は丸味をもつ。両方の先端を欠くが現存長で10.6cmを計る。幅は下方に向かって広くなる。性格は不明である。2は比較的太い角棒である。正方形に近い断面をもち、先端がややすくなっていることから平のみとも推定される。幅約1.9cm、厚さ約1.7cm、長さ15.4cmを計る。3・4は細長い角棒であり、角釘と思われる。3は先端と頭部がそれぞれ屈曲して変形しているが完形品である。復元推定で長さは約8cmになる。4は両端を欠き、現存長で5.9cmを計る。

土鍾（第95図5） 中央部がやや膨む不整円柱形のもので、長軸方向に沿って径約0.5cmの貫通孔が入る。長さ4.9cm、最大腹径2.1cmを計る。

勾玉（第95図6） 長さが約5.9cmのなだらかなC字形を呈し、頭部に0.2cmの孔が穿たれている。石質はフリントである。

第2号井戸跡

〔遺構確認面〕 耕作土を除去して検出されるIIa層の上面より遺構の存在を確認した。なお、部分的ながらもIb層が薄い層として検出される個所もある。

〔保存状況〕 遺構相互の重複による削損以外に破壊を受けている個所もなく、保存状況は比較的良好である。

〔重複関係〕 第4号溝と重複関係にある。第4号溝は、当井戸跡の西壁、および東壁のやや南寄りを破壊してつくられる。第4号溝の方が新しい。

〔形状〕 当井戸跡は3段掘りである。開口部の平面形は隅丸の方形を呈する。この部分では検出面よりの深さ約25cmの平場（第一テラス）となっている。第1テラスからは直壁に近い形で円形に約60cm掘り下げており、ここでも平坦な面（第二テラス）をつくっている。第二テラスからの掘り込みも平面形は円形を呈し、ほぼ直壁で底部にたっする。底面は円形である。第一テラス・第二テラスとも下部には掘り方が検出されている。第2テラスは全周するが、第1テラスは西壁と東壁では部分的にしか認められない。

〔規模〕 隅丸方形の開口部は486×453cm、第一テラス上の円形掘り込みは359×350cmの規模をもち、第二テラス上の掘り込みは181×186cmを計る。底部径は約105cmである。検出面上よりの深土は約295cmとなる。

〔堆積土〕 井戸内堆積土は以下の8層に大別される。

第1層：黒褐色の粘土質シルト層である。3層に細分される。上層はきわめて緻密な土で、多量の土器を包含する。中層はやや砂分が強く色調が明るくなる。下層は粒状の比較的粗い堆積となり、木炭片・焼土粒・骨片を含む。

第2層：灰褐色の粘土質シルト層である。2層に細分される。上層は白色粘土・黄褐色土を塊状にかなり含む層で、粒～塊状の粗い堆積状況を示す。多量の土器を包含する。下層は上層に比べて色調が明るく、粘性がやや強くなる。遺物もほとんど含まない。

第3層：褐灰色のシルト層である。2層に細分される。上層は粒～塊状の粗い堆積層で、多量の土器を含む。下層は壁際にのみ認められる層で、地山の黄褐色土の塊状堆積土である。

第4層：褐色のシルト質粘土層である。井筒を据える掘り方の側壁に沿って堆積する。塊状の黒色土・黄褐色土を含み、焼土粒・木炭粒・土器片・白色粘土塊が点在する。側壁が崩壊したものと推定される個所では地山の黄褐色土を多量に含む。

第5層：灰褐色の粘土層である。極めて粘性が強い。中央付近に細砂を含む褐色の層が入る。粘性は下方に向かうほど強くなる。井筒内の土と思われ、壁が崩壊した地点では押されて狭くなっている。上部の第3層と接する付近で多量の獸骨が発見されている。種子・木炭・植物遺体等が含まれる。

第6層：にぼい黄褐色の粘土質砂層である。上部には薄い木炭の層が認められる。

第7層：灰褐色の粘土層である。第5層に比べてやや色調が暗くなる。2層に細分され、上層はきめ細かな粘土で混入物はみられない。下層はやや粗い粘土で細砂・褐色土が塊状に混入する。木片・種子・木炭片などがかなり含まれる。

第8層：褐色の砂層である。やや粗い砂で、緻密に堆積している。

なお、2段になる平坦面にはそれぞれ掘り方が検出されており、地山土と黒褐色土との混合土が上面を固化して埋め戻されている。掘り方の底面は凸凹しており、絶対高も一定しない。

以上の堆積土は以下のように類別される。第1層より第3層まではレンズ状に堆積しており、自然的な營力による堆積層としての様相を明確に示している。第4層から第7層までは、水と土圧による変成作用をうけたものと思われ、第4層は井筒を固定するための人为的堆積層、第5～第7層は井筒内の自然堆積層と想定される。第8層は井筒を設置する以前に人为的に敷いたものである。

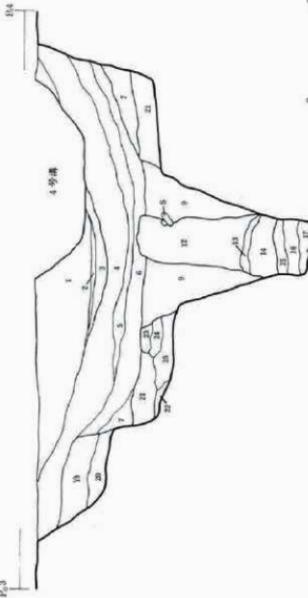
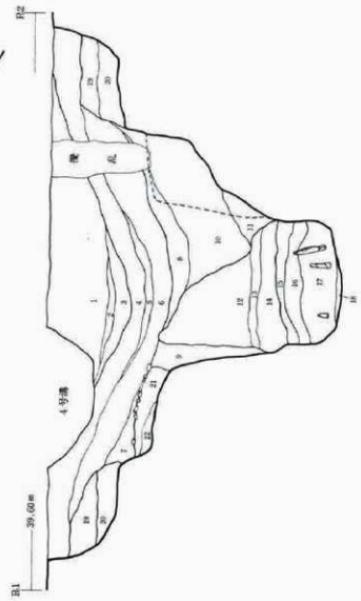
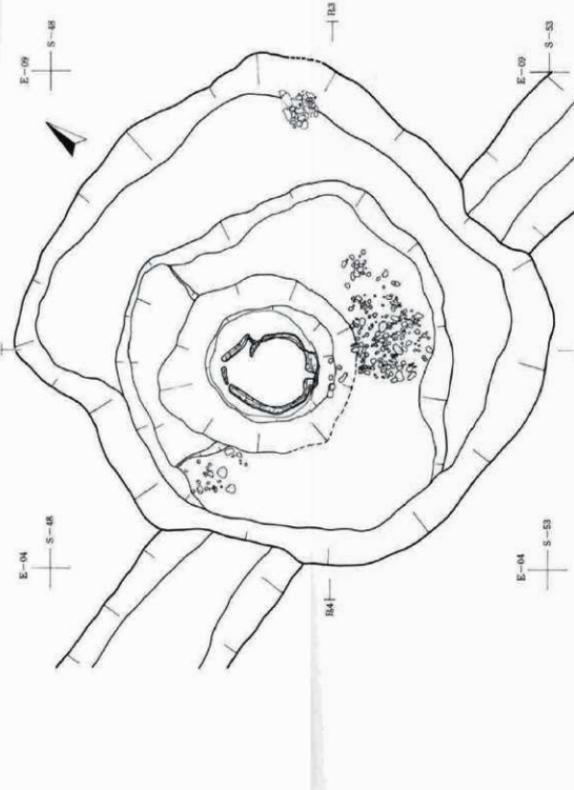
〔井筒〕 井筒は木幹の中心をくりぬいた削抜式のものである。上部は腐食しており、現存するのは最下部の一部分に限られる。現存する部分も原形をとどめてはおらず完全な円形を呈してはいない。内径約79×68cmとなり、最大高で33cmを計る。井筒の外面には所々に手斧の調整痕が認められる。

〔付属施設〕 第二テラス上（一部）には円礎を人为的に敷きつめた個所がある。これの性格は、水を汲み上げるために足場として考えるのが最も蓋然性が高い。

〔出土遺物〕 当井戸跡の出土遺物には、土器・鉄製品・小形手捏土器・動物遺体・植物遺体などがある。土器は环・高台付环・甕・壺・盤の器種で構成される。遺物、なかでも土器は極めて量が多く、とくに上層に集中して出土する。土器の廃棄場所として転用されたものと推定される。最下層にロクロ未使用の土器類が小量出土するほか、中層まではほとんど遺物が出土しない。

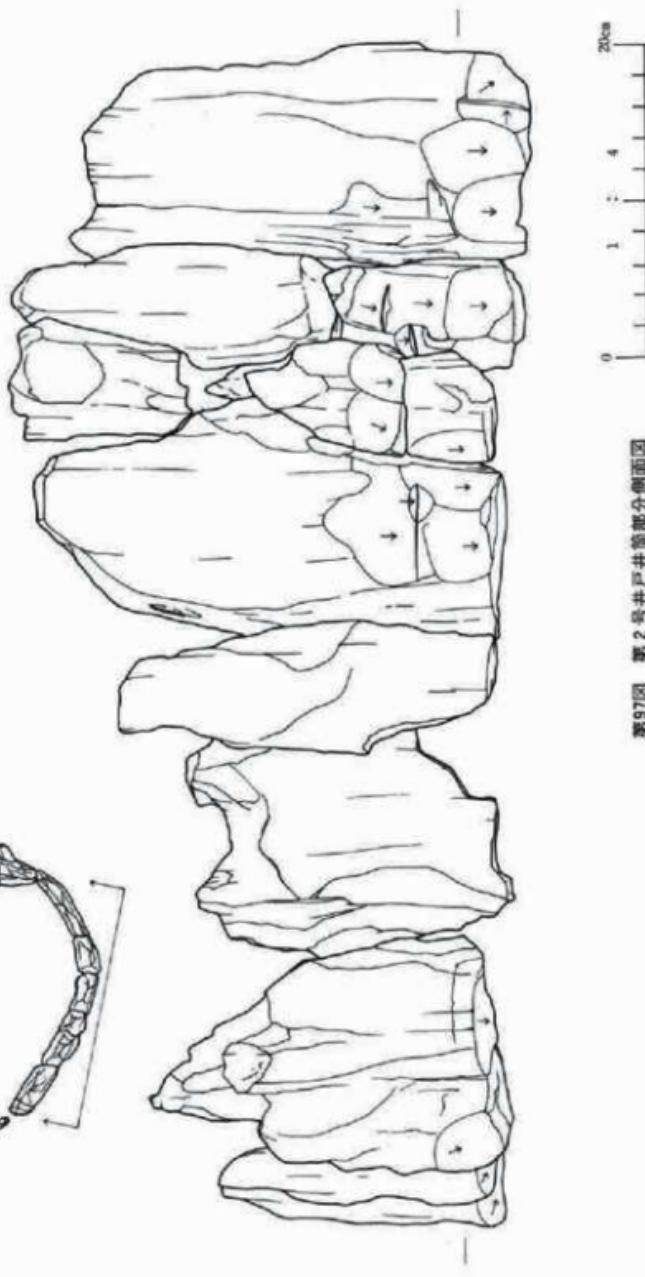
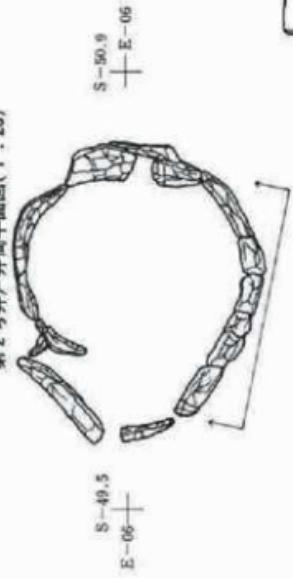
坏形土器（第98図～101図） 环には、A類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）、B I類（ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理）、B II類（ロクロ使用で還元炎焼成）、B III類（ロクロ使用で酸化炎焼成）の4種類がある。B I類が圧倒的に多く、A類・B II類・B III類は僅少である。

〈环A類〉（第98図1～6） A類の环は、遺構構築時の掘り方埋土および堆積土の最下層より出土する。少しが多く図示可能のものは6点にすぎない。すべて平底（A 2類）を呈するが、破片には丸底のものも認められる。器高が低くて底径が小さく、体部がややふくらみをもって外傾するもの（5）、器高が普通で底径が小さく、体部が底部との境にくびれをもちやや丸味をもって立ちあがるもの（3）、器高が高くて底径が大きく、体部が底部との境にくびれをもち直線的に立ちあがるもの（4）などに分けられ、さらに器高が高くて底径が小さなものは、体部が

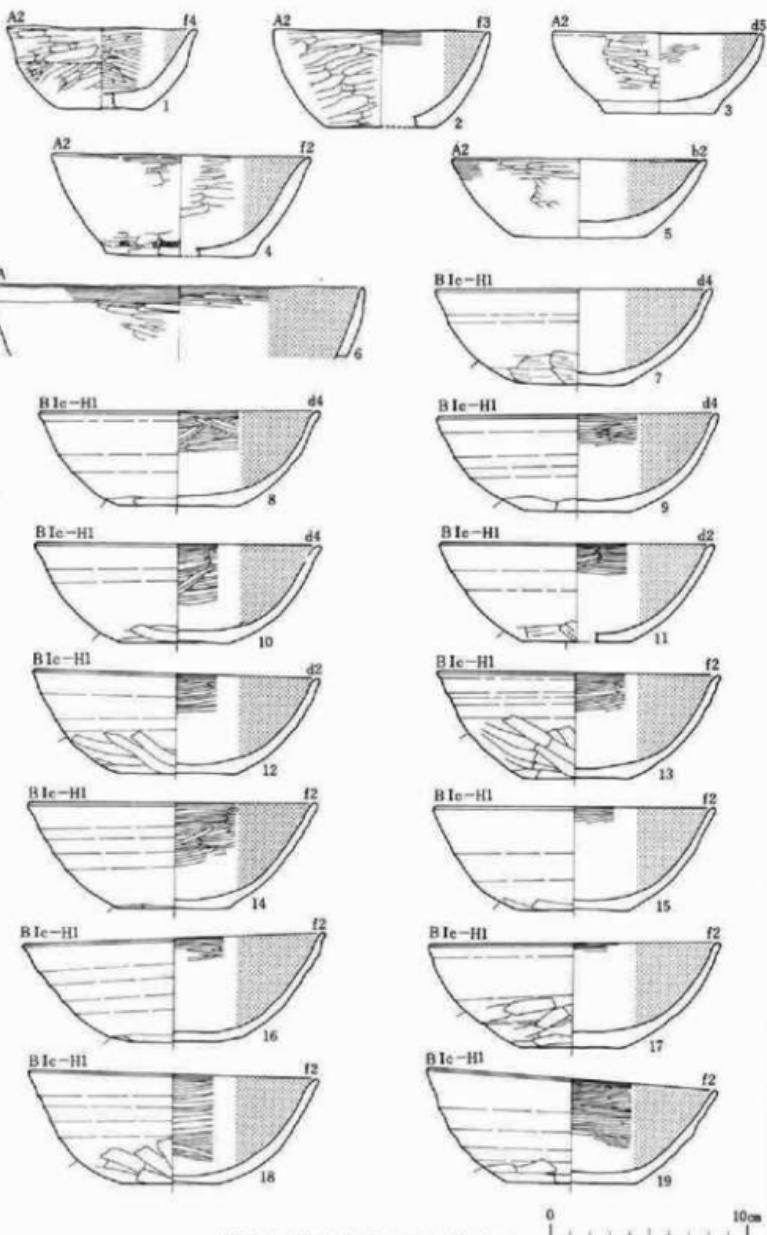


	種	土	性	土	性	土	性	土	性	土	性
第 1 番	1 植 木	耐 水	耐 旱								
	2 土	耐 水	耐 旱								
第 2 番	3 土	耐 水	耐 旱								
	4 土	耐 水	耐 旱								
第 3 番	5 土	耐 水	耐 旱								
	6 土	耐 水	耐 旱								
第 4 番	7 土	耐 水	耐 旱								
	8 土	耐 水	耐 旱								
第 5 番	9 土	耐 水	耐 旱								
	10 土	耐 水	耐 旱								
第 6 番	11 土	耐 水	耐 旱								
	12 土	耐 水	耐 旱								

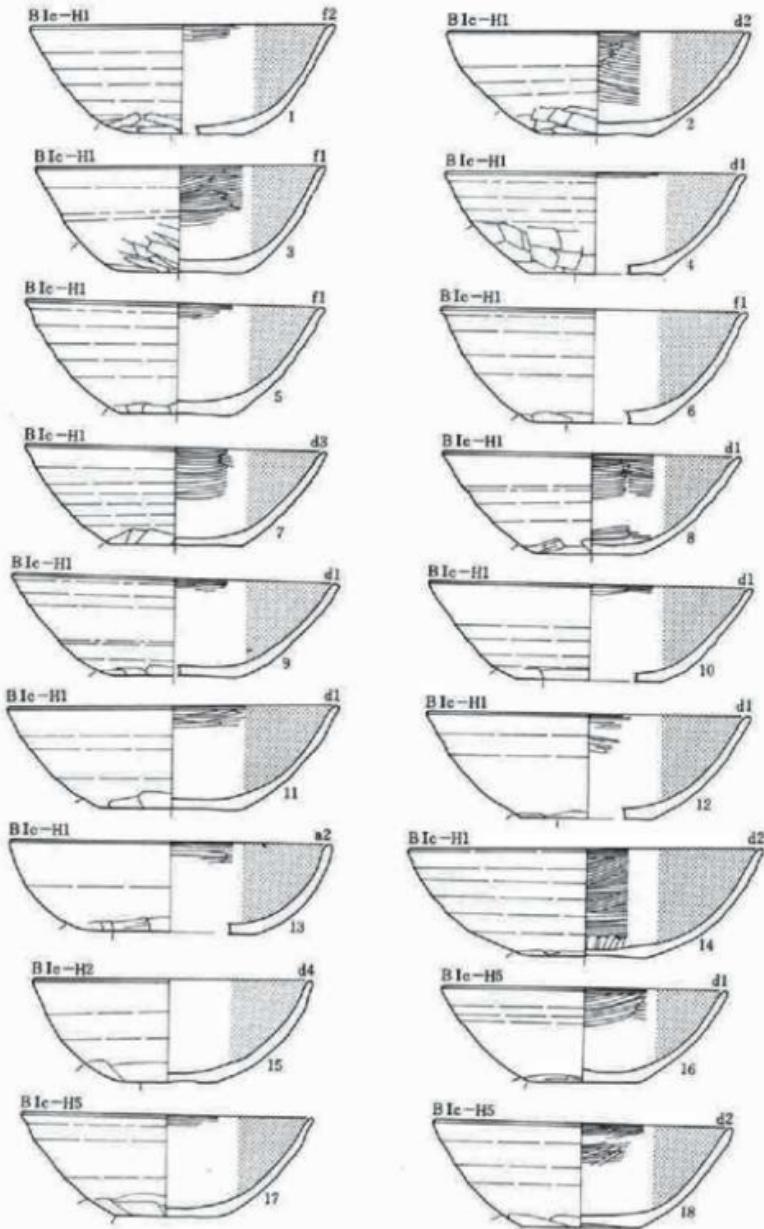
第2号井戸井筒平面図(1:20)



第97図 第2号井戸井筒部分側面図

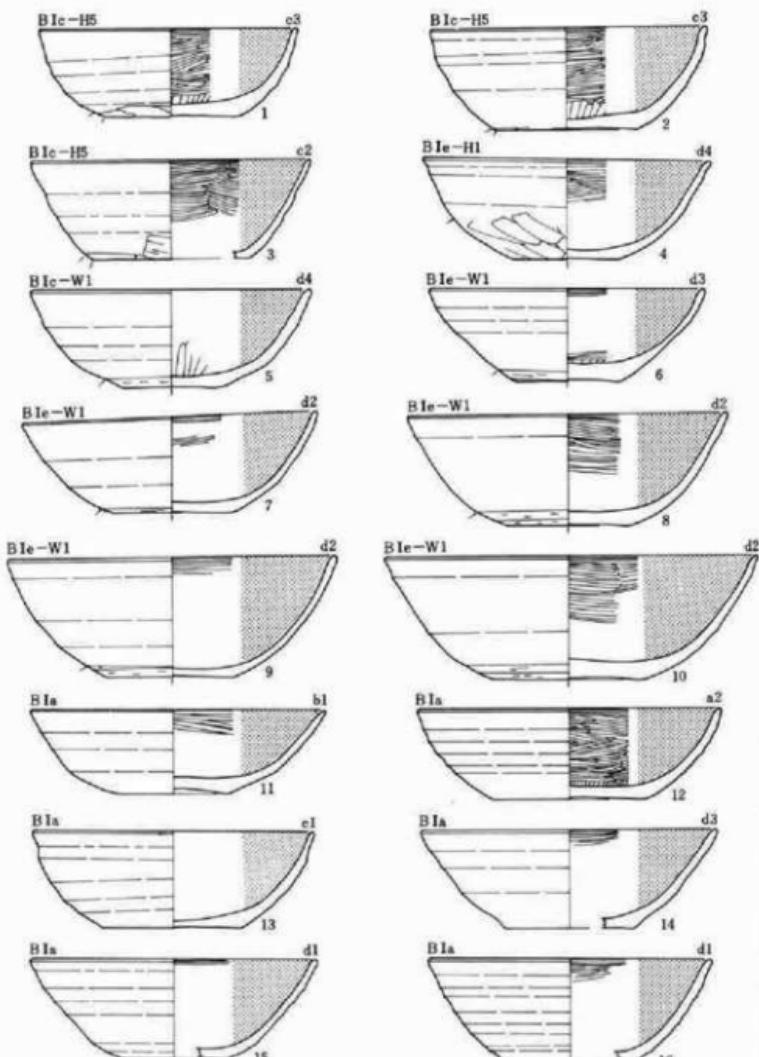


第98図 第2号井戸跡出土遺物（1）

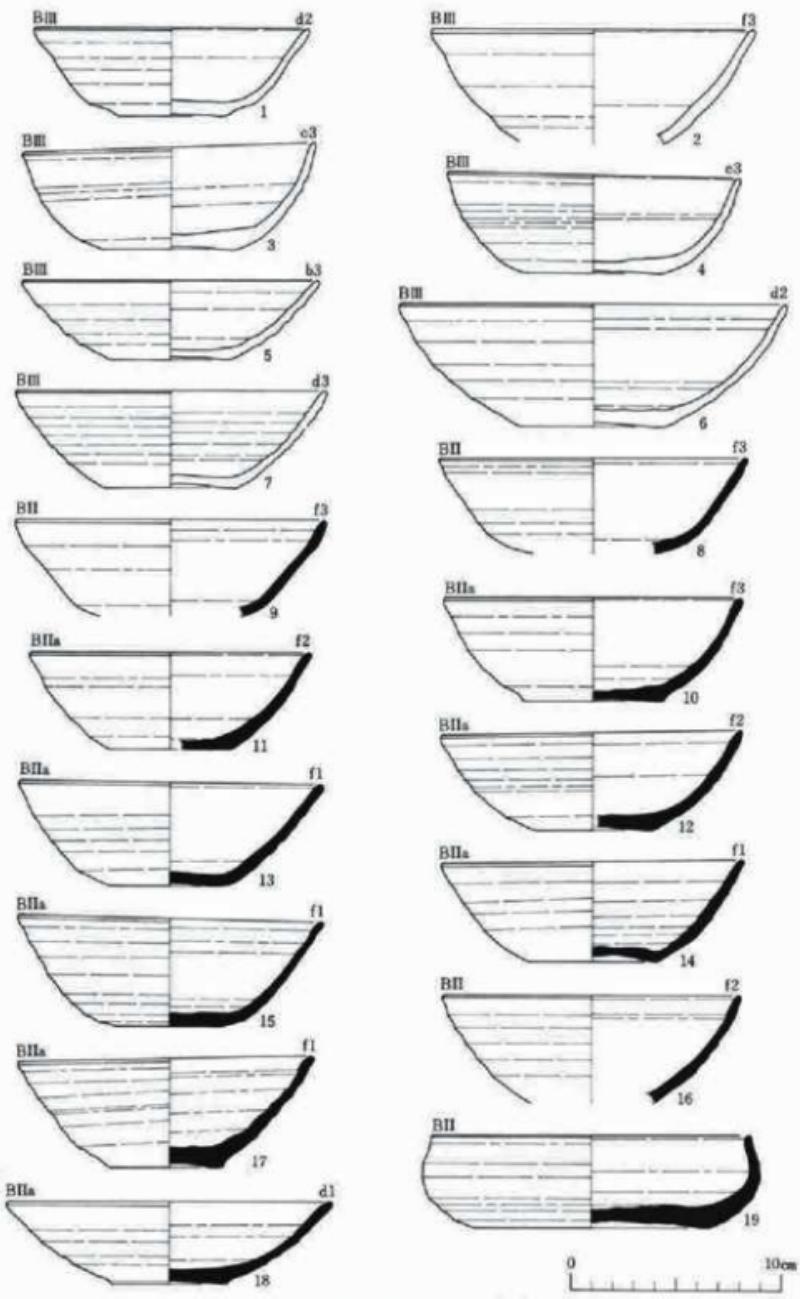


0 10cm

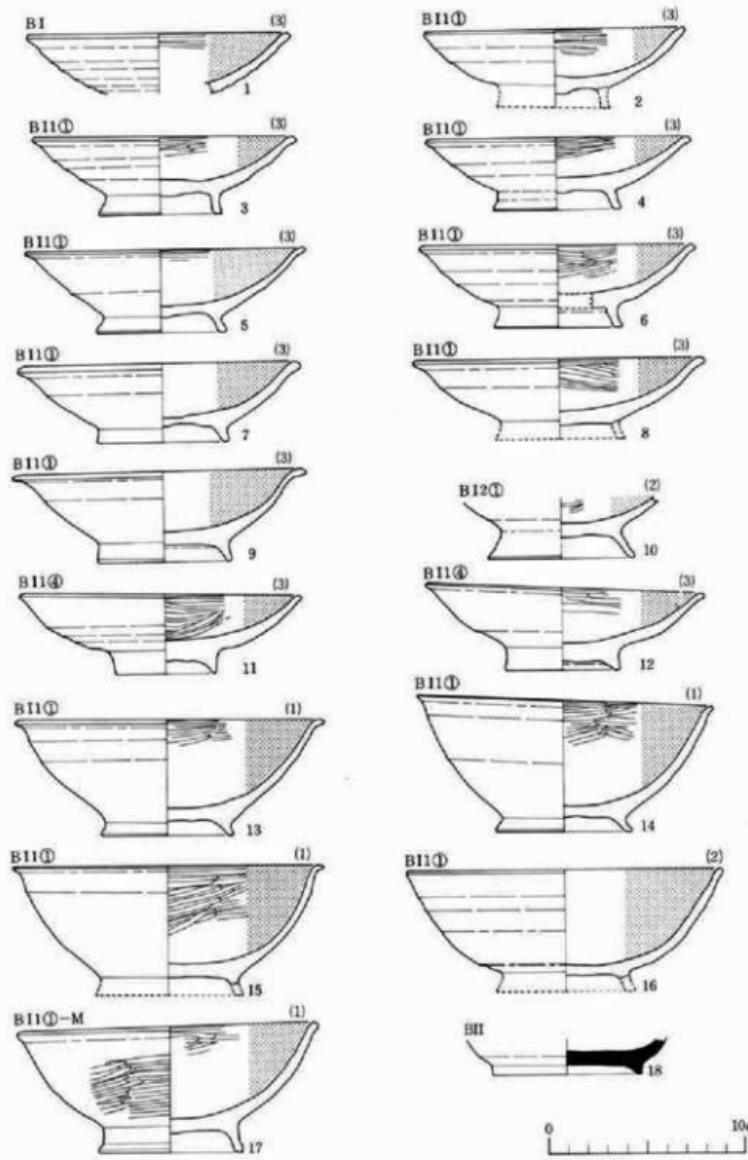
第99図 第2号井戸跡出土遺物 (2)



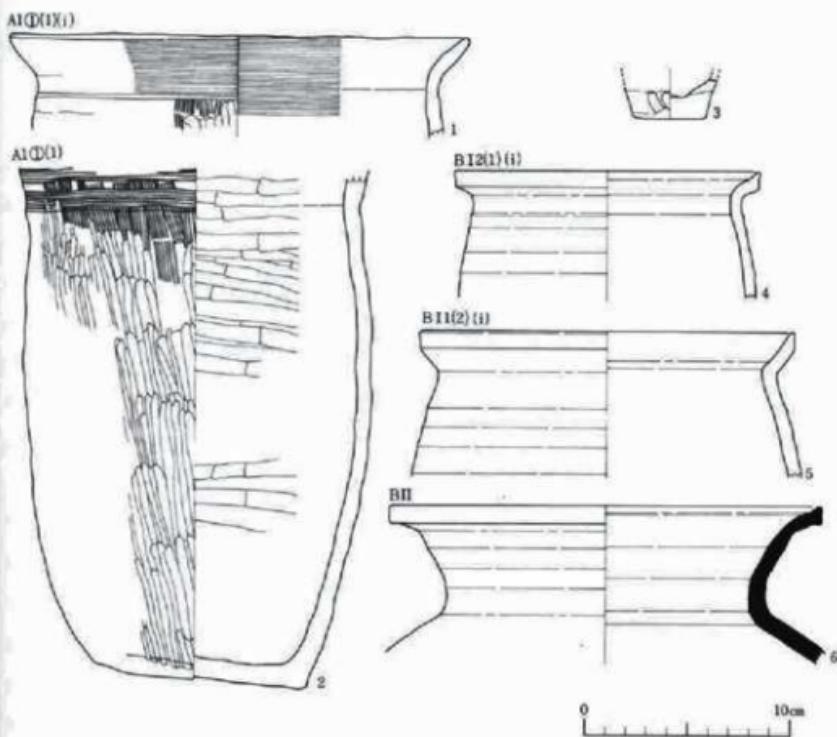
第100図 第2号井戸跡出土遺物（3）



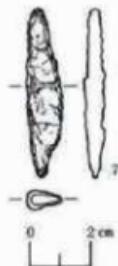
第101図 第2号井戸跡出土遺物(4)



第102図 第2号井戸跡出土遺物 (5)



第103図 第2号井戸跡出土遺物（6）



ややふくらみをもって立ちあがるもの（2）と体部がややふくらみをもって外傾し口縁端で立ちあがるもの（1）とに細分される。6は大形のもので、全体の器形は不明である。器面調整は内外面ともヘラミガキを基本とするが、口縁部には前段階の調整である横ナデが観察されるものもある。4は体部下端外面に刷毛目痕が認められる。

〈坏B I類〉（第98図7～19、第99図、第100図） B I類の环には、底部を回転糸切りで切り離した後、再調整を加えないもの（B Ia類）と再調整を施すもの（B Ic類）、および再調整のため底部の切り離し手法が不明のもの（B Ie類）とに分けられる。

B Ic類の环（第98図7～19、第99図、第100図1～3、5）は、再調整の手法および再調整を施す部位の違いによって細分される。体部下端より底部全面に手持ちヘラケズリを施すもの

(H₁手法)、体部下端より底部周縁に手持ちヘラケズリを施すもの(H₂手法)、体部下端にのみ手持ちヘラケズリを施すもの(H₃手法)、および体部下端より底部周縁に回転ヘラケズリを施すもの(W₁手法)などがある。

B I e-H₁手法の环(第98図7~19、第99図1~14)は出土量が最も多く、形態上の特徴によつていくつかに分けられる。器高が普通で底径の小さなものは、体部がかなり丸味をもつて立ちあがるもの(第98図7~10)、体部がやや丸味をもつて立ちあがるもの(第98図10~11、第99図2)、体部がややふくらみをもつて外傾するもの(第99図4、9~12)、体部がやや丸味をもつて外傾するもの(14)、体部が直線的に外傾するもの(7)などがある。器高が高くて底径が小さなものは、体部がやや丸味をもつて立ちあがるもの(第98図13~19、第99図1)、体部がややふくらみをもつて立ちあがるもの(第99図3・5・6)に分けられ、器高が低くて底径が大きく、体部がやや丸味をもつて外傾するもの(13)もある。B I e-H₂手法の环(第99図15)は、器高が普通で底径が小さく、体部がかなり丸味をもつて外傾するもので、1点だけ出土している。

B I e-H₃手法の环(第99図16~18、第100図1~3)は、形態上の特徴によつて分けられ、器高が普通で底径が小さなものは、体部がややふくらみをもつて外傾するもの(16)、体部がやや丸味をもつて外傾するもの(17~18)とがあり、器高が普通で底径の大きなものは、体部がかなり丸味をもつて立ちあがるもの(第100図1・2)と体部が直線的に外傾するもの(3)とがある。B I e-W₁手法の环(第100図5)は器高が普通で底径が小さく、体部がかなり丸味をもつて立ちあがるものである。

B I e類の环(第100図4、6~10)は、すべて体部下端より底部全面にかけて再調整を施すもので、手持ちヘラケズリによるもの(H₁手法)と回転ヘラケズリによるもの(W₁手法)とに分けられる。

B I e-H₁手法の环(4)は、1点のみで、器高が普通で底径が小さく、体部がかなり丸味をもつて外傾するものである。B I e-W₁手法の环(6~10)は、器高が普通で底径が小さなもので、体部が直線的に外傾するもの(6)と体部がやや丸味をもつて外傾するもの(7~10)に分けられる。10はかなり大形のものである。

B I a類の环(第100図11~16)は、出土量が極端に少なく、出土層も最上層に限られる。器高が低いものには、底径が小さくて体部がややふくらみをもつて外傾するもの(11)と底径が大きく体部がやや丸味をもつて外傾するもの(12)とがあり、器高が普通のものには、底径が大きくややふくらみをもつて立ちあがるもの(13)と底径が小さく体部が直線的に外傾するもの(14~15)、および底径が小さく体部がややふくらみをもつて外傾するもの(16)などに分けられる。

〈环B II類〉(第101図8~19) B II類の环には、底部を回転ヘラ切りで切り離して再調整を施すもの(B IIa類)と回転ヘラ切り無調整のもの(B IIb類)および回転糸切り無調整のもの

(B IIa類)などがある。堆積土下層より出土するものはB IIb類の环に限られ、B IIc類の环は井筒内最下部より破片で1点出土している。いずれも図示不能である。

B IIa類の环(第101図8~18)は、器高が高くて底径が小さなもののがほとんどを占め、体部の形態によって体部がやや丸味をもって外傾するもの(8~10)、体部がややふくらみをもって外傾するもの(11~12・16)、体部が直線的に外傾するもの(13~15、17)などに分けられる。また、器高が低くて底径が小さく、体部が大きく開いて外傾するもの(18)もある。

《环B III類》(第101図1~7) B III類の环はほとんどが最上層より出土している。形態上の特徴によっていくつかに分けられる。器高が低くて底径が小さく、体部が大きく開いて直線的に外傾するもの(5)、器高が普通で底径が大きく、体部がかなり丸味をもって立ちあがるもの(3・4)、器高が高くて底径が小さく、体部が直線的に外傾するもの(2)などがあり、器高が普通で底径の小さなものは、体部がやや丸味をもって外傾するもの(1・6)と体部が直線的に外傾するもの(5)とに分けられる。6はかなり大形のものである。

高台付环形土器(第100図) 高台付环には、B I類(ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理)とB II類(ロクロ使用で還元炎焼成)とがある。B III類(ロクロ使用で酸化炎焼成)は全く出土していない。また、B II類は1点のみで、ほかはすべてB I類に属するものである。

《高台付环B I類》(第102図1~17) B I類の高台付环は、高台部が短く外傾し、底部に菊花状のヘラ刺みを施して周縁をロクロ調整するもの(B I 1①類)と高台部が長く外傾し、底部に菊花状のヘラ刺みを施し周縁をロクロ調整するもの(B I 2①類)、および高台部が短く外傾し全面にロクロ調整するもの(B I 1④類)とがある。

B I 1①類の高台付环(第102図1~9、13~17)は、环部の形態が、器高が極端に底くて体部が大きく開いて外傾する皿状のもの(1~9)と器高が高くて体部が丸味をもって立ちあがる塊形のもの(13~17)とがある。17は外面にもヘラミガキが施されている。

B I 1④類の高台付环(第102図11・12)は、高台部がほぼ直立して先端が丸くなるもので、外底部には粘土を詰め器肉がかなり厚くなっている。环部の形態は皿状を呈する。

B I 2①類の环(10)は、高台部の小片が1点出土したのみで、环部の形態は不明である。

《高台付环B II類》(第102図18) 底部の小片である。高台は極端に低いもので、底部は中央に糸切り痕を残し、周縁をロクロ調整している。环部の形態は不明である。

變形土器(第103図) 瓢には、A類(ロクロ未使用で酸化炎焼成)とB I類(ロクロ使用で酸化炎焼成)、およびB II類(ロクロ使用で還元炎焼成)とがある。瓢の出土量は極端に少ない。

《變A類》(第101図1・2) A類の瓢は瓢のなかで最も多く出土し、そのほとんどが図示不能の少片である。大形の瓢が多数を占め、頭部に段を有するものが大部分を占める。遺構内堆積土の下層より出土する。1は口縁部のみの破片で、大形の長脛形のものである。口縁部は長

く外反し、頭部には段を有する。器面調整は口縁部が横ナデ、体部外面上半が刷毛目+ヘラミガキによっている。2は井筒内最底部より出土したものである。肩部付近に1個の穿孔をもち、汲水に利用された可能性が強い。口縁部は欠損している。頭部には刷毛目状工具でナデを施すことによって形式的な段をつくっている。体部はゆるく脹み中央付近に体部最大径をもつ。器面調整は体部外面が刷毛目+ヘラミガキ、内面はナデに近い軽いミガキによって整え、底部外面上には木葉底をそのまま残している。

〈壺B I類〉(第103図4・5) B I類の壺は上層より破片で少量出土している。4は口縁部に最大径をもつ小形の壺(B I 2(1)類)で、口縁部は短く強く外反し、口唇部は上方へ挽き出している。体部はやや大きく脹み、中央付近に体部最大径をもつ。5は体部に最大径をもつ大形の壺(B I 1(2)類)で、口縁部は短くゆるく外反し、口唇部は上方へ挽き出している。体部は大きく脹み、中央部近に最大径をもつ。

〈壺B II類〉 図示不能の少片でかなりの数が出土している。器形の大小や器肉の厚薄、および調整手法の差異によって数種のバリエティがみられる。

壺形土器 壺にはA類(ロクロ未使用で酸化炎焼成)に属すものとB II類(ロクロ使用で還元炎焼成)に属すものとがある。そのほとんどが図化不能の細片である。A類の壺は、頭部に段を有する大形のもので、体部はほぼ真球を呈し中央付近に最大径をもつ。

〈壺B II類〉(第103図6) 頭部から口縁部まで長く外反し、体部が大きく張り出すものである。同じく広口壺と推定されるものが破片で1点出土している。

盤形土器 (第101図19) B II類(ロクロ使用で還元炎焼成)に属すものである。底部は回転ヘラ切りで切り離し、再調整を施していない。体部より口縁部までは内寄ぎみに立ちあがる。

小形手捏土器 (第103図1) 破片のため全体の器形は不明であるが、彫形を呈するものと推定される。内外面ともオサエによって器面を整えている。

鉄製品 (第103図7) 短い身部をもち、刃先は弧形をなしている。茎は先端に向い除々に細くなる。全長5.6cm、身部長4.2cmを計る。身部の最大幅は1.2cmである。丸のみと推定される。

3 溝

第1号溝

【位置】 調査区西端のC A09グリッドより東端のC D59グリッドにかけて斜めに横断する。

【遺構確認面】 純作土直下のIIa層を若干掘り下げて遺構の存在を確認している。なお、C C 53グリッドにかかる付近でのみIb層が検出されており、遺構はその下より掘り込まれている。

【重複関係】 第1号住居跡・第2号住居跡・第4号住居跡の3遺構と重複関係にあり、そのいずれもが第1号溝によって切られている。

【形状・方向】 溝の断面形は逆台形状を呈している。全体の形状は溝の両端が調査区以外に延びるため不明である。溝の走行軸は東一西の方向であり、周囲より検出された住居跡の東西辺の方向とはほぼ一致する。

【規模】 調査区内に限定された長さは約20.5mとなる。全長は不明である。上幅2.56~2.78m、底幅51~55cm、検出面よりの深さは75~94cmを計る。底面は若干の凸凹はみられるがほぼ平坦になっており、絶対高にもばらつきがみられない。

【堆積土】 溝内堆積土は以下の3層に大別される。

第1層：基本的には褐色のシルト層である。緻密な堆積状況を示し、かなりかたい。焼土粒・木炭粒は相対的に少ない。6層に細分される。

第2層：基本的には暗褐色のシルト層である。やや粗い堆積状況を示し、第1層に比べてやわらかい。焼土粒・木炭粒は少量含まれる。3層に細分される。

第3層：基本的には暗褐色のシルト層である。他の層に比べて砂分が強い。堆積土の密度は粗く、ぼさぼさしている。下層はややグライ化している。焼土粒・木炭粒をかなり含む。4層に細分される。

以上の埋土はすべて自然的な営力による堆積層と思われる。

【出土遺物】 当溝跡の出土遺物には土器と鉄製品とがあり、土器は环・高台付环・甕などの器種に分けられる。全層よりほぼ均等に出土するが、土器の新旧関係と堆積土の層序との関係が一定しない。さらに、調査範囲内で3棟の住居跡を破壊して掘り込まれていることから、当遺構に確実に伴うものと判断できる遺物は抽出できなかった。

环形土器（第107図1~3） 环にはB I類（ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理）とB II類（ロクロ使用で還元炎焼成）、およびB III類（ロクロ使用で酸化炎焼成）がある。B I類の环（1）がそのほとんどを占め、すべて回転糸切り無調整のものである。B II類の环は小片で少量出土しており、底部には糸切り痕を残す。B III類の环（2~3）は、かなりの点数で出土しており、

体部の器形は多様である。

高台付环形土器 B I 類（ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理）に属するものが図示可能の範囲で出土している。底部に菊花状のヘラ刻みを施して周縁をロクロ調整するものである。

甌形土器（第107図4） 裂には、B I 類（ロクロ使用で酸化炎焼成）と B II 類（ロクロ使用で還元炎焼成）とがある。B I 類の裂（4）は、すべて口縁部に最大径をもつもので、器形の大小、口縁部・体部の形態等によって細分される。B II 類の裂は、最大径の位置・口縁部の形態等に違いがみられ、各種に分類可能である。

鉄製品（第108図4・5） 2点出土しており、ともに細長い角棒である。釘と思われる。4は現存長3.2cm、幅0.7cm、5は現存長2.8cm、幅0.6cmを計る。

第2号溝

【位置】 C G53グリッドより G J56グリッドにかけて位置する。

【遺構確認面】 耕作土直下のIIa層中より確認した。

【重複関係】 第7号住居跡および第9号住居跡と重複関係にある。第2号溝は双方の住居跡を切っており、そのいずれよりも新しい。

【形状・方向】 溝の断面形は皿状を呈する。全体の形状は中央部で若干南西方向にふくらむもののは直線である。北西から南東への方向が溝の走行軸となる。

【規模】 溝は、全長約10.4m、上幅31~46cm、底幅18~23cmで、検出面上よりの深さは10~18cmを測る。絶対高では北側がやや低くなっている。

【堆積土】 溝の堆積土は単層である。暗褐色のシルト質土でしまりがなくばさばさしている。少量ではあるが木炭粒を全面に含む。

【出土遺物】 当遺構より出土した遺物は土器2片に限られる。1片はB II 類（ロクロ使用で還元炎焼成）の環の底部片（第107図5）で、回転糸切り無調整のものである。他の1片はB I 類（ロクロ使用で酸化炎焼成）の裂の体部片である。

第3号溝

【位置】 調査区西端のC J 06グリッドより D C 53グリッドまでの間に位置する。

【遺構確認面】 耕作土直下のIIa層を若干掘り下げて遺構の存在を確認している。

【重複関係】 第10号住居跡および第11号住居跡と重複関係にある。この溝はそれら2棟の住居跡を切っている。

【形状・方向】 溝の断面形は皿状を呈する。全体の形状は、西側が発掘区以外に延びるため不明である。溝の走行軸は西一東の方向であり、第1号溝とはほぼ平行する。

【規模】 東側で路線敷外に入るため全長は不明である。長さは現存値で13.2m、上幅44~62cm、底幅26~38cmを測る。検出面よりの深さは11~15cmとなり、底面の絶対高はほぼ均一である。

【堆積土】 溝の堆積土は、暗褐色を呈するシルト質土の単層である。粒状の粗い堆積であり、はさばさしてしまりがない。かなりの木炭粒を混入する。

【出土遺物】 出土遺物は土器だけで、器種には壺と甕がある。壺はB I類（ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理）に属し、回転糸切り無調整のものである。甕はB I類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に類別され、口縁部に最大径をもつ大形のもの（第107図6・7）である。

第4号溝

【位置】 調査区西端のD B06グリッドより東端のD I 59グリッドにかけて位置する。

【遺構確認面】 耕作土を除去して遺構の存在を確認した。当地区ではIb層は部分的にしか検出されておらず、耕作土の下はIIa層になっている。掘込面はIIa層の上面である。

【重複関係】 第2号井戸跡と重複関係にある。この溝は井戸跡の上部を切っており、それよりも新しい。

【形状・方向】 溝の断面形は逆台形状を呈する。全体の形状は、大部分が発掘区以外に伸びているため不明である。溝の走行軸は西北西→東南東方向であるが、調査区の中央でやや南西方向にふくらんでいる。

【規模】 溝の全長は不明である。調査区に限り、長さは約25.2m、上幅101~183cm、底幅36~104cm、検出面よりの深さ52~61cmを測る。なお、溝底面の絶対高はほぼ一定している。

【堆積土】 溝の堆積土は以下の2層に大別される。

第1層：暗褐色のシルト層である。粉~粒状の緻密な堆積をしている。かなりの木炭粒を含むほか、焼土粒が少量含まれる。3層に細分される。

第2層：褐色のシルト層である。緻密でかなりかたい。下部は若干グライ化している。少量の木炭粒が含まれる。

第1層、第2層とも廃絶後に自然的な蓄積によって堆積した層と思われる。

【出土遺物】 当遺構の出土遺物は土器に限られ、器種には壺と甕がある。壺はB I類（ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理）とB II類（ロクロ使用で還元炎焼成）（第107図8）とがありすべて小片である。いずれも、底部を残すものは回転糸切り無調整のものである。甕はB I類（ロクロ使用で酸化炎焼成）の体部片が少量出土している。

第5号溝

【位置】 調査区西端のF E09グリッドより東端のF A56グリッドにかけて位置する。

〔造構確認面〕 造構確認面は IIa 層の上面である。この溝が位置する範囲では I b 層は検出されておらず、耕作土の直下が IIa 層になる。

〔重複関係〕 第 20 号住居跡、および No.4 ピットと重複関係にある。これらの造構は第 5 号溝跡によって切られている。

〔形状・方向〕 溝の断面形は皿状を呈する。全体の形状は両端が発掘区外に延びるため不明である。溝の走行軸は南南西—北北東方向であり、緩やかな蛇行はみられるもののほぼ直線的に伸びている。

〔規模〕 全長は不明であるが現存値で約 19.8m、上幅 22~29cm、底幅 9~13cm、検出面よりの深さ 5~11cm を測る。溝底面はかなりの凸凹があり、絶対高にはばらつきがみられる。

〔堆積土〕 溝の理土は暗褐色を呈するシルト質土の単層である。土のしまりは悪く、はさはさしている。若干の木炭粒を混入する。

〔出土遺物〕 当造構の出土遺物には土器と土鍤がある。土器はすべて図示不能の細片であり、器種には壺と甕がある。壺は B I 類（ロクロ使用で酸化炎焼成 + 黒色処理）と B II 類（ロクロ使用で還元炎焼成）とがあり、甕は B I 類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に属するものである。壺は口縁部片、甕は体部片に限定されるため詳細は不明である。

土鍤（第 108 図 6）は、中央でやや脹む管状のもので、長さ 3.9cm、幅 1.8cm を計る。長軸に沿って径 0.3cm の貫通孔が穿たれている。部分的にヘラミガキが施されている。

第 6 号溝

〔位置〕 調査区西端の G B 06 グリッドより東端の G C 56 グリッドにかけて位置する。

〔造構確認面〕 耕作土直下の IIa 上面より確認した。耕作が IIa 層中にまで及んでおり、掘込面は不明である。

〔重複関係〕 第 11 号溝跡と重複関係にあり、それよりも新しい。

〔形状・方向〕 溝の断面形は逆台形状を呈する。全体の形状は両端が調査区外に延びるため不明である。溝の走行軸は西南西—東北東方向であり、緩やかに蛇行して伸びている。

〔規模〕 全長は不明である。現存値で長さは約 14.8m、上幅 81~114cm、底幅 28~53cm、検出面よりの深さ 39~47cm を測る。なお、溝底面の絶対高はほぼ一定している。

〔堆積土〕 溝の堆積土は 2 層に大別される。

第 1 層：暗褐色のシルト層である。緻密でかなりかたい。粒状の木炭をかなり含むほか、地山塊を広く混入する。

第 2 層：褐色のシルト層である。第 1 層に比べてやや粘性が強い。少量の木炭粒を含む。

第 1 層、第 2 層とも自然的營力による堆積層と思われる。

〔出土遺物〕 出土遺物には土器と鉄製品がある。土器には环と甕があり、ともにB I類に属する図示不能の細片である。

鉄製品(第108図7)は、細長い角棒であり釘と推定される。現存長で3.7cm、幅0.8cmを計る。

第7号溝

〔位置〕 調査区西端のG C 06グリッドより東端のG D 56グリッドにかけて位置する。

〔遺構確認面〕 耕作土を除去して現われるIIa層の上面より遺構の存在を確認した。IIa層の上部は耕作土となっており、掘込面は不明である。

〔重複関係〕 第8号溝跡、第11号溝跡およびG C 62住居跡(未調査)と重複関係にある。この溝は第8号溝跡および第11号溝跡よりは旧く、G C 62住居跡よりは新しい。

〔形状・方向〕 溝の断面形はU字形を呈する。全体の形状は両端が未調査区に延びるため不明である。溝の走行軸は西南西—東北東の方向となり、第6号溝とは平行して直線的に伸びている。

〔規模〕 調査区に限定した溝の長さは約14.7mとなり、上幅31~45cm、底幅12~19cm、検出面よりの深さ16~20cmを測る。溝の底面は東側でやや低くなっている。

〔堆積土〕 溝の埋土は2層に細分されるが基本的には単一層としてまとめることができる。暗褐色を呈する緊密なシルト質土であり、地山塊を混入する。

〔出土遺物〕 当遺構の出土遺物は土器に限られる。器種には环と甕がある。いずれもB I類に属するもので、小片のため細部の観察は不能である。

第8号溝

〔位置〕 発掘区西端のG D 06グリッドより延びて、G C 53グリッド内で第6号溝跡に接続して消滅する。

〔遺構確認面〕 IIa層の上面より遺構の存在を確認している。当地区ではIIa層の上部にまで耕作が及んでいる。

〔重複関係〕 第6号溝、第7号溝、第11号溝、および第1方形溝状遺構と重複関係にある。この溝は第7号溝と第11号溝よりも新しく、第1方形溝状遺構よりも古い。

なお、この溝と第6号溝とは接続していることから、重複関係にあるというより、併用されたものである可能性が強い。

〔形状・方向〕 溝の断面形は逆台形状を呈する。全体の形状は西端が発掘区外に延びるため不明である。溝の走行軸は、一端南東方向を背にして屈曲するため一定しないが、西南西—東北東と南南東—北北西とに分かれ。

【規模】 未調査区を含むため全長は不明であるが、現存値で約12.2mとなる。上幅51~98cm、底幅29~47cm、検出面よりの深さ25~41cmを測る。溝底面の絶対高はほぼ一定しているが、屈曲する付近でやや低くなっている。

【堆積土】 溝の堆積土は2層に大別される。

第1層：暗褐色のシルト層である。緻密でかなりかたい。木炭粒を少量混入する。

第2層：暗褐色のシルト層である。第1層に比べてやや粘性が強く、粒状の粗い堆積となる。木炭粒・焼土粒を少量含む。部分的ではあるが、第2層の上部に明赤褐色の焼土層が認められる。溝底面には直接乗らないものの、壁が若干焼けていることから、流入物とは考えられずある程度埋った段階での火床面と思われる。

第1層、第2層とも自然地盤層として認定される。

【出土遺物】 当遺構より出土した遺物は土器に限られる。器種には環・甕・鉢がある。環はBⅠ類（ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理）とBⅢ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがあり、ともに回転糸切り無調整のものである。甕はBⅠ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に属するもので体部の小片である。鉢（第107図9）はBⅠ類に類別される底部の破片である。内面はヘラミガキ・黒色処理で整えている。底部外面には糸切り痕をそのまま残す。

第9号溝

【位置】 調査区西端のG E06グリッドより、東端のG H56グリッドまでに位置する。

【遺構確認面】 遺構はIIa層の上面より確認した。IIa層の上部はすべて耕作土である。

【重複関係】 第11号溝跡、第23号住居跡、およびNo.8ビットと重複関係にある。当溝跡はこれらすべての遺構よりも新しい。

【形状・方向】 溝の断面形は逆台形状を呈する。全体の形状は両端で調査区外に延びるために不明である。溝の走行軸は西一東の直線方向であり、第1号溝、第3号溝とは平行する。

【規模】 両端に未調査区をもつため全長は不明であるが、現存値で約17.1mとなる。上幅97~116cm、底幅54~67cm、検出面よりの深さ41~45cmを測る。溝底面の絶対高は一定している。

【堆積土】 この溝の堆積土は以下の3層に分けられる。

第1層：暗褐色のシルト層である。粉状の緻密な堆積状況を示す。混入物はほとんどみられない。

第2層：暗褐色のシルト層である。第1層に比べると密度が疎でやや砂分が強くなる。木炭粒・地山塊をかなり混入する。

第3層：褐色の砂質シルト層である。ややねばりのある粘土質シルト・細砂を混入する。

第1層~第3層まですべて廃絶後に自然的な營力によって堆積したものと観察される。

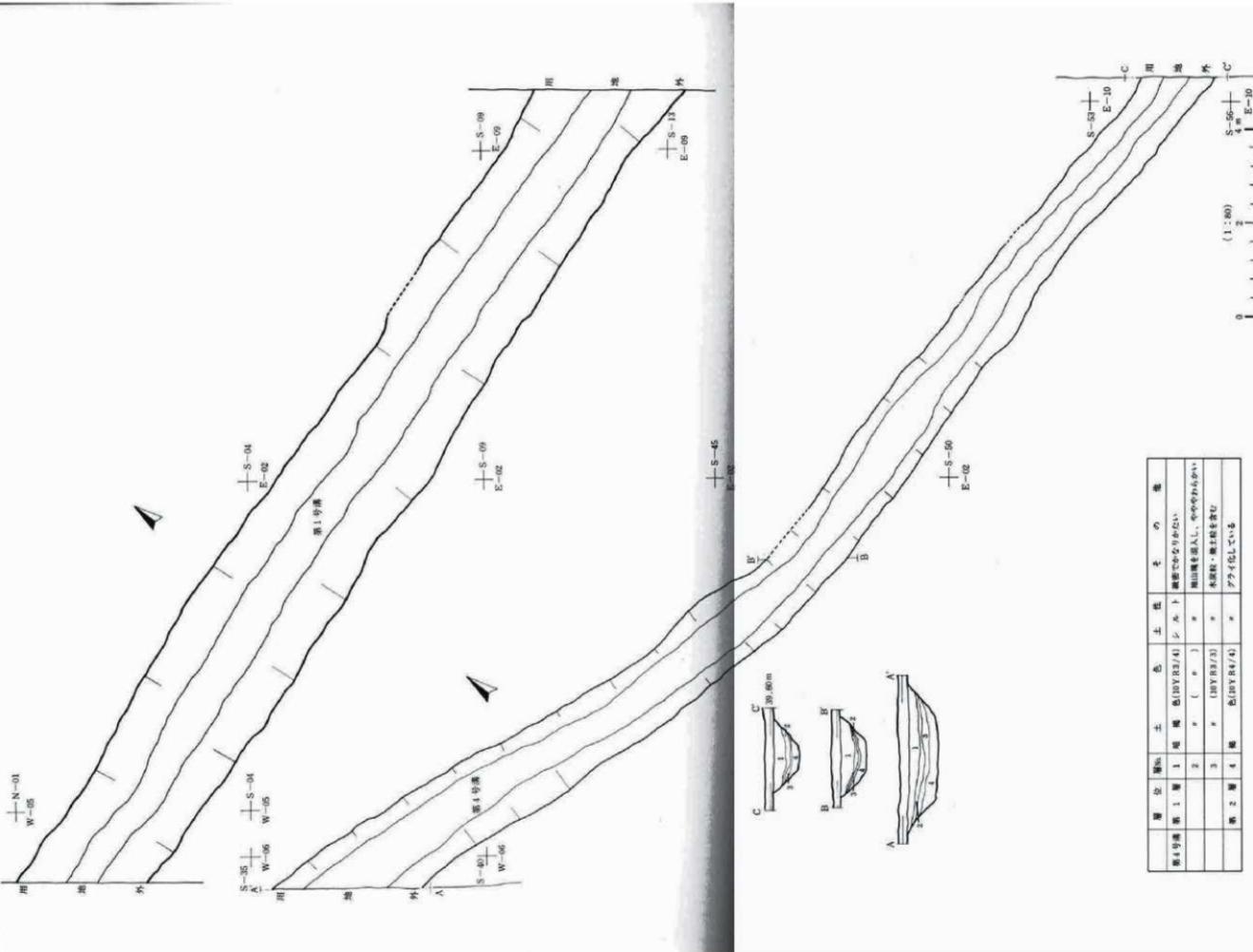


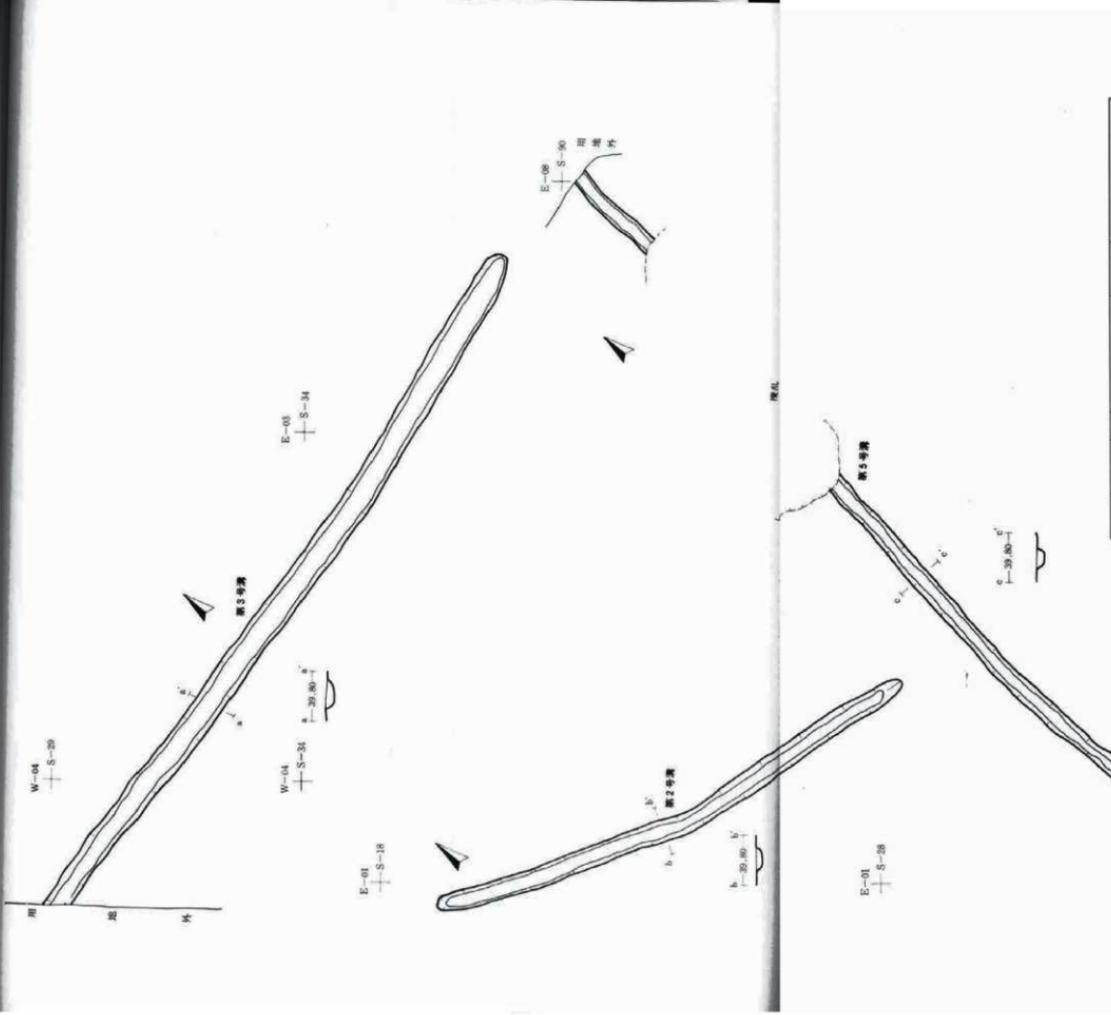
図104 図 溝(1)・第1号・第4号層

層位	層名	土色	土性	その他の
第4号層	第1層	褐色(BY 3.3/4)	シルト	泥炭化がなきたい。
	2	()	x	地山層を形成し、その中に砂が入る。
	3	(BY 3.3/3)	x	本層と地山層を区別する。
	4	(BY 8.4/4)	x	アラカリ化している。

図105 溝(2)・第2号・第3号・第5号溝



溝	位置	地質	土性	その他の特徴
第2号	E-01 W-04 S-29	地盤 色10(BR/4)	シルト	少部分の泥炭を含む
第3号	E-01 W-04 S-34	地盤 色10(BR/4)	シルト	"
第5号	E-01 W-03 S-102	地盤 色10(BR/4)	シルト	"



W=60

E=60

S=123

N=123



第11号溝

第10号溝

第9号溝

第8号溝

第7号溝

第6号溝

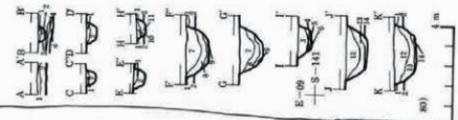
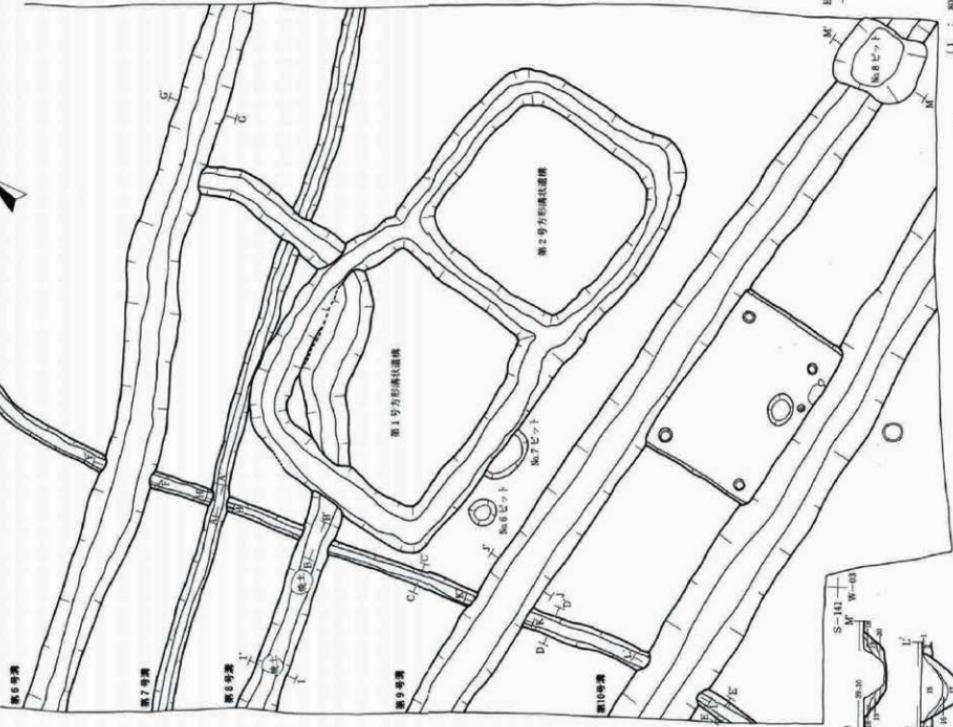
第5号溝

第4号溝

第3号溝

第2号溝

第1号溝



渠 立 構成	渠 立 長	渠 窄	渠 宽	渠 土 色	渠 土 性	渠 土 号	渠 土 高	渠 土 長	渠 土 延	渠 土 高	渠 土 長	渠 土 延
第6号渠 1 線	8	渠	渠	色(10Y 3(4) 3)	少 鹽漬けとなりやすい	13	3.3	1.8	1.5	0.6	0.6	0.5
第6号渠 2 線	9	渠	渠	色(10Y 3(2) 2)	少 鹽漬けとなりやすい	14	3.3	1.8	1.5	0.6	0.6	0.5
第7号渠 1 線	10	渠	渠	色(10Y 3(4) 4)	少 鹽漬けとなりやすい	15	3.3	1.8	1.5	0.6	0.6	0.5
第7号渠 2 線	11	渠	渠	色(10Y 3(4) 4)	少 鹽漬けとなりやすい	16	3.3	1.8	1.5	0.6	0.6	0.5
第8号渠 1 線	11	渠	渠	色(10Y 3(4) 4)	少 鹽漬けとなりやすい	17	3.3	1.8	1.5	0.6	0.6	0.5
第8号渠 2 線	12	渠	渠	色(10Y 3(4) 4)	少 鹽漬けとなりやすい	18	3.3	1.8	1.5	0.6	0.6	0.5
第9号渠 1 線	1	渠	渠	色(10Y 3(4) 4)	少 鹽漬けとなりやすい	19	3.3	1.8	1.5	0.6	0.6	0.5
第9号渠 2 線	2	渠	渠	色(10Y 3(2) 2)	少 鹽漬けとなりやすい	20	3.3	1.8	1.5	0.6	0.6	0.5
第9号渠 3 線	12	渠	渠	色(10Y 3(2) 2)	少 鹽漬けとなりやすい	21	3.3	1.8	1.5	0.6	0.6	0.5

第106図 第(3) 第6号~第11号渠

〔出土遺物〕 出土遺物には土器と鉄製品がある。土器は环と甕とに分けられ、それぞれにB I類とB II類がある。环はいずれも回転糸切り無調整のものである。B I類の甕(第107図10)は、口縁部に最大径をもつ大形のものである。B II類の甕はすべて体部の細片であり、器肉の厚薄・調整技法の違いによっていくつかに細分される。

鉄製品(第108図11・12)は2点出土している。11は幅2.5cmの坂状のもので、一端を欠いている。長軸の一辺に刃がつけられており、鎌となる可能性が強い。現存長で7.7cmを計る。12はやや弯曲しているが刀子の刃部と思われる。現存長で5.7cm、最大幅が1.3cmになる。

第10号溝

〔位置〕 調査区西端のG F06グリッドより南端のG H53グリッドにかけて位置する。

〔遺構確認面〕 遺構はIIa層中より確認している。IIa層の上部まで耕作土となっており、掘込面は不明である。

〔重複関係〕 第11号溝、および第23号住居跡と重複関係にある。当溝跡はこれらの遺構を切って開削している。

〔形状・方向〕 溝の断面形は逆台形状を呈する。全体の形状は両端とも調査区外に延びるために不明である。溝の走行軸は西→東の方向で直線的に延びる。第1号溝、第3号溝、および第9号溝と平行する。

〔規模〕 全長は不明であるが調査区内に限定して約11.1mとなる。上幅112~152cm、底幅35~59cm、検出面よりの深さ73~78cmを測る。溝底部の絶対高はほぼ一定している。

〔堆積土〕 溝内堆積土は以下の3層に分けられる。

第1層：暗褐色のシルト層である。緻密でかなりかたい。少量ではあるが、焼土粒・木炭粒が広く分布する。

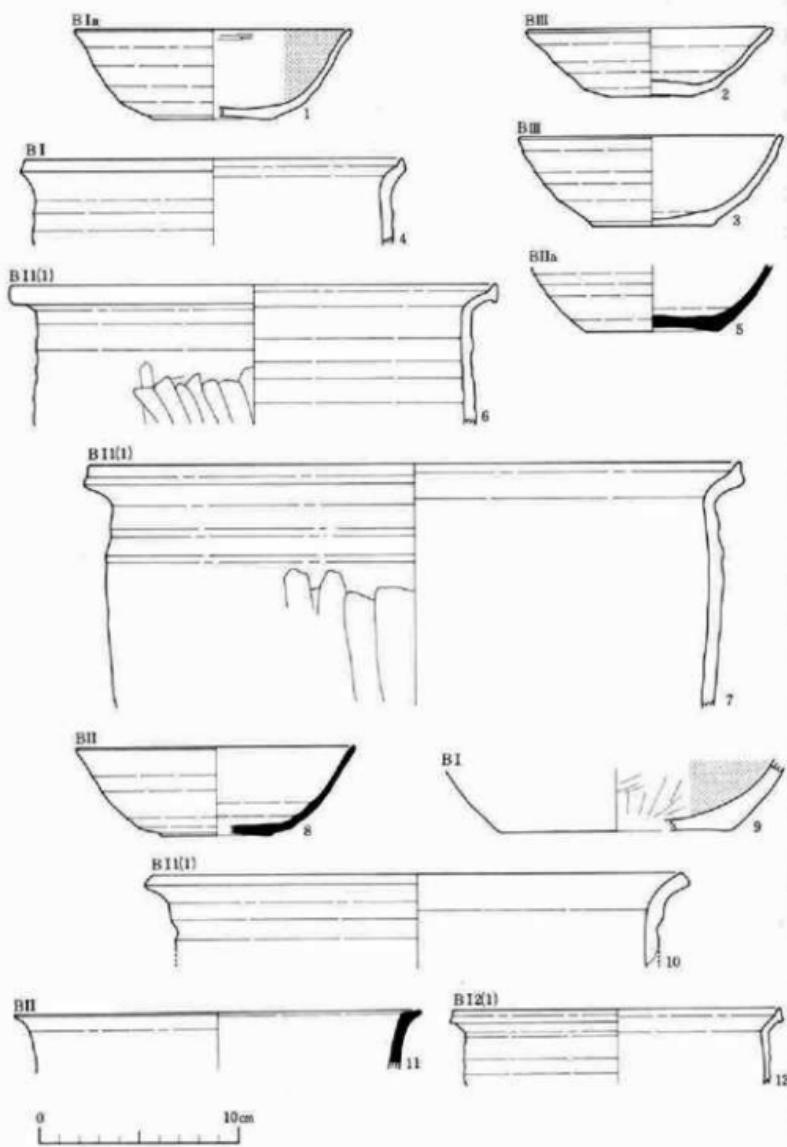
第2層：暗褐色のシルト層である。第1層に比べて密度が疎で、ややねばりがある。少量の木炭粒以外は含まない。遺物はほとんどこの層に集中する。

第3層：にぶい黄褐色のシルト層である。地山塊と細砂土を多量に混入する。

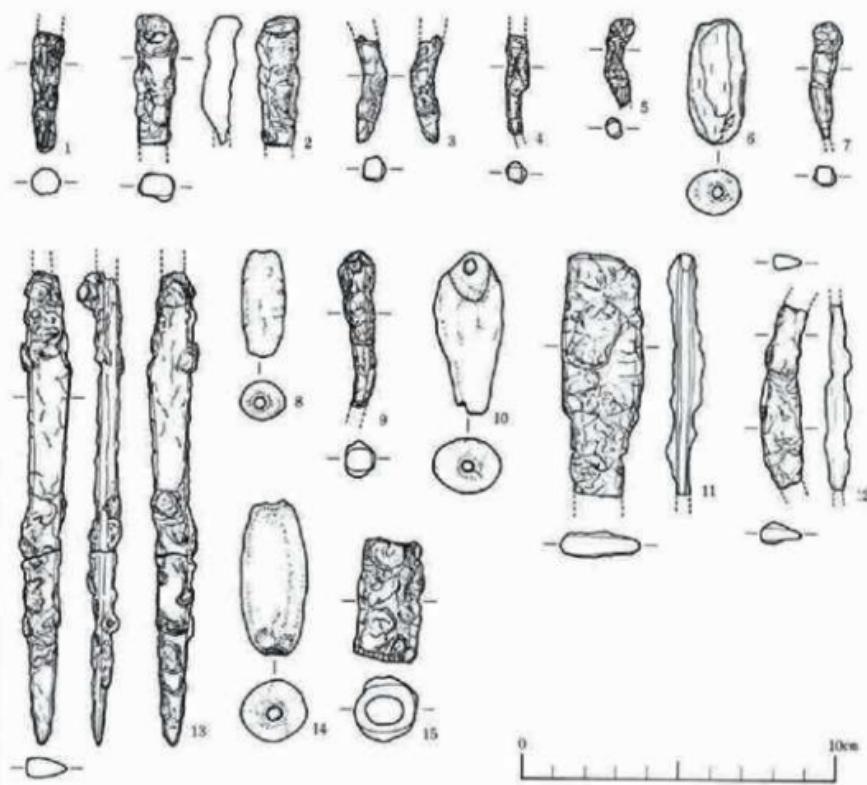
以上の3層はすべて自然堆積の様相を呈している。

〔出土遺物〕 出土遺物には土器・鉄製品・土鍊がある。土器は环と甕があり、环はB I類(ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理)とB III類(ロクロ使用で酸化炎焼成)、甕はB I類(ロクロ使用で酸化炎焼成)とB II類(ロクロ使用で還元炎焼成)とに類別される。环はすべて細片のため復元できない。B I類の甕は体部片に限られる。B II類の甕は口縁部に最大径をもつもの(第107図11)と体部に最大径をもつものとがあり、器形の大小によっても分けられる。

鉄製品(第108図9・15)は2点出土している。9は細長い棒状を呈し、角釘と推定される。



第107図 溝出土遺物



第108図 溝・方形溝状遺構・ピット出土遺物

現存長で5.0cmを計る。15は円筒形のもので、長さ3.9cm、最大復径1.9cmを計る。内側は楕円形に近い形を呈し、内径が0.9~1.2cmになる。刀子の把元と考えられるが明らかではない。

土鍬（第108図 8・10）も2個出土しており、いずれも中央部でやや脹む管状を呈するものである。8は長さ3.4cm、最大復径1.4cmを計り、長軸に沿って径約0.3cmの貫通孔がある。10は両端を欠いており、現存長で5.2cm、最大復径2.1cmになる。径約0.4cmの貫通孔が穿たれている。

第11号溝

【位置】 GB50グリッドより調査区西端のG G06グリッドにかけて位置する。

【遺構確認面】 遺構は耕作土直下のIIa層の上面より確認している。掘込面は不明である。

【重複関係】 第6号溝、第7号溝、第8号溝、第9号溝、および第10号溝と重複関係にある。第6号溝、第8号溝、第9号溝、第10号溝より旧く、第7号溝より新しい。

【形状・方向】 溝の断面形はU字形を呈する。全体の形状は両端で未調査区に入るため不明である。溝の走行軸は南南東—北北西の方向であり、若干の蛇行はみられるもののほぼ直線的に伸びている。第6号溝、第7号溝、および第8号溝の一部とほとんど直角に交わる。

なお、この溝の北端部には浅い小ビットが掘り込まれている。溝の始点、ないし結点をあらわすものであろう。

【規模】 調査区内に限定された長さは約18.1mとなる。上幅28~39cm、底幅12~25cm、検出面よりの深さ11~22cmを測る。溝底面は所々に凸凹がみられ、絶対高では北側に高く、南側に低い傾向がみられる。

【堆積土】 堆積土は2層に細分されるが基本的には單一層としてまとめることができる。暗褐色を呈するシルト質土で、粉状の緻密な堆積状況を示す。木炭粒を少量混入する。

【出土遺物】 遺物は土器が少量出土している。器種には环と甕があり、环はA類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）、甕はB I類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に属するものである。A類の环は平底のもので、内外面ともヘラミガキで整えている。B I類の甕（第107図12）は口縁部に最大径をもつ小形のもので、全面ロクロ調整されている。

4 方形構造遺構

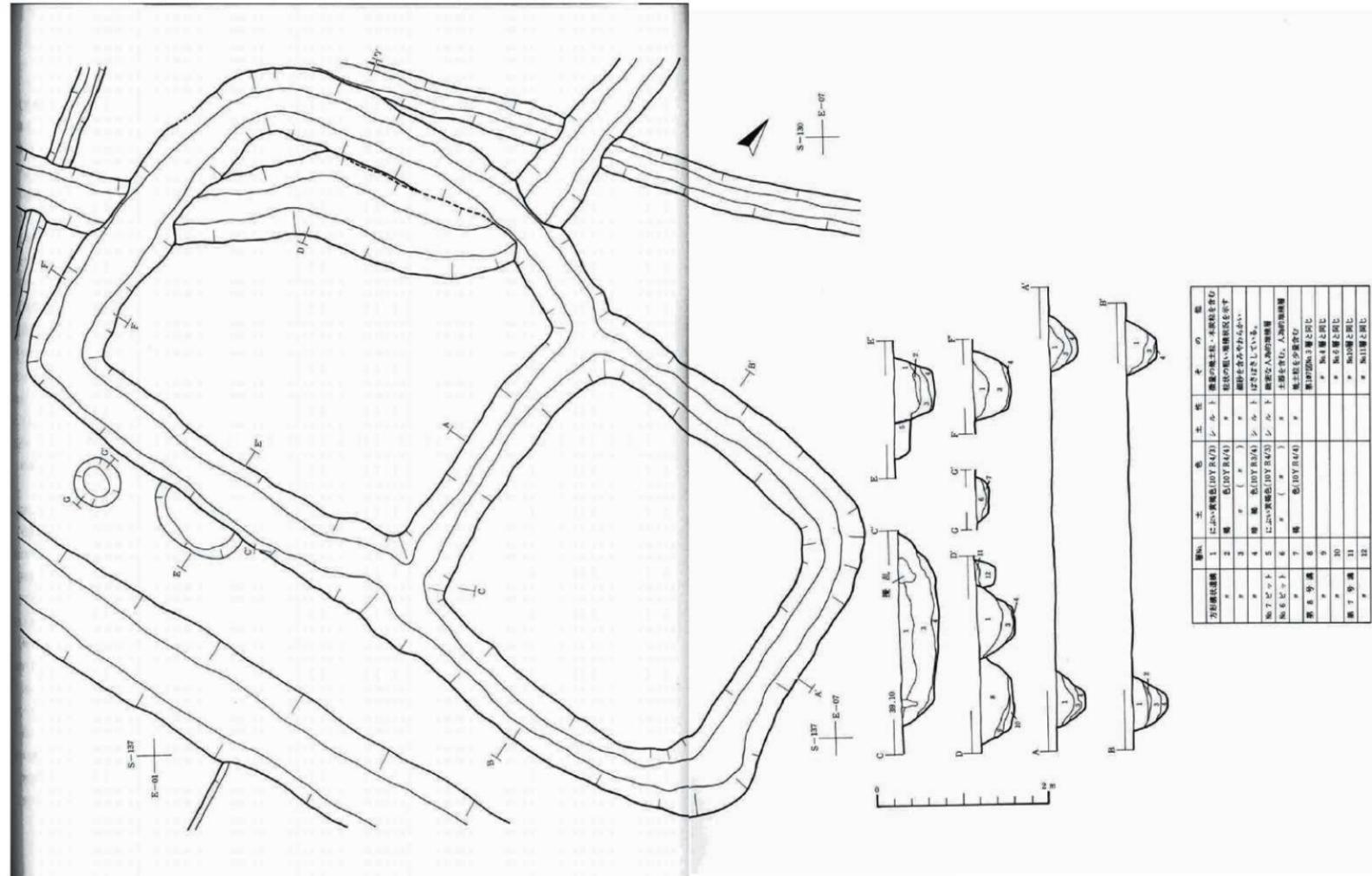
二基検出されているが独立したものではなく、一边を共有して接続している。説明の都合上、西側のものを第1号、東側のものを第2号として、それぞれ独立させて表記する。

第1号方形溝状遺構

【位置】 北西隅をGD50グリッドに、北東隅をGE53グリッドに、南東隅をGF50グリッドに、南西隅をGE03グリッドにもつ。

【確認面】 遺構はIIa層中より確認している。耕作はIIa層上部にまで及んでおり、それを除去した面が確認面である。掘込面は不明である。

【平面形・長軸方向】 平面形は東西にやや長いが正方形を基調するものと思われる。長軸方向は東西にとってN-89°50'-Wである。溝の断面形は逆台形状を呈する。



〔規模〕 東西の軸長は溝外縁で559cm、溝内縁で417cmとなり、南北の軸長は溝外縁で518cm、溝内縁で381cmとなる。全体の面積は約28.85m²、平場の面積は約15.89m²である。溝の上幅は東溝で53~69cm、西溝が70~84cm、南溝64~75cm、北溝67~81cm、底幅は東溝で13~28cm、西溝が27~52cm、南溝33~47cm、北溝21~36cmを計る。

溝の深さは東溝で36~40cm、西溝が35~40cm、南溝39~43cm、北溝33~38cmとなり、底面の絶対高では、北東隅のやや高くなる部分を除いてほぼ一定している。

〔堆積土〕 3層に分けられる。上層はにじみ黄褐色のシルト層で、微量の焼土粒・木炭粒を含む。中層は褐色のシルト層で、上層に比べてやや粒子が粗い。混入物はみられない。下層は褐色のシルト層で、やや砂分が強い。細砂・地山粒を含む。

〔併存施設〕 平場内よりは何らの遺構も検出されていない。

〔出土遺物〕 出土遺物には土器と鉄製品がある。土器は环と甕で構成され、环はB I類（ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理）とB III類（ロクロ使用で酸化炎焼成）、甕はB I類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とB II類（ロクロ使用で還元炎焼成）とに類別される。环はほとんどが口縁部の細片であり、全体の器形は不明である。ただB I類の底部片が1片出土しており、外面に手持ちヘラケズリを施している。B I類の甕は口縁部に最大径をもつ小形のものであり、B II類の甕は外面に平行叩き目文をもつ体部片で、肩の張り出す大形のものである。

鉄製品（第108図1） 細長い棒状を呈するもので、角釘と思われる。現存長で3.8cmを計る。

第2号方形溝状遺構

〔位置〕 北西隅をC E53グリッド、北東隅をG E56グリッド、南東隅をG F53グリッド、南西隅をG F50グリッドにもつ。

〔確認面〕 第1号方形溝状遺構と同様である。

〔平面形・方向〕 平面形は隅丸の正方形を呈する。方向は、東西にとれば第1号方形溝状遺構と同様である。溝の断面形はU字形に近い形となる。

〔規模〕 東西の軸長は溝外縁で478cm、溝内縁で351cmとなり、南北の軸長は溝外縁で478cm、溝内縁で348cmとなる。全体の面積は約22.85m²、平場の面積は約12.21m²である。

溝の上幅は東溝で64~79cm、西溝が53~69cm、南溝56~66cm、北溝56~69cm、底幅は東溝で21~34cm、西溝が13~28cm、南溝15~26cm、北溝14~29cmを計る。

溝の深さは東溝で30~34cm、西溝が36~40cm、南溝30~32cm、北溝30~34cmとなり、底面の絶対高では、西溝（第1号方形溝の東壁）を除いてほぼ一定している。

〔堆積土〕 堆積土は第1号方形溝のそれと共通する。

〔併存施設〕 平場内において併存する遺構はまったく検出されていない。

〔出土遺物〕 出土遺物には土器と鉄製品とがあり、土器の器種は壺と甕がある。壺はB I類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とB II類（ロクロ使用で還元炎焼成）、甕はB I類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に類別される。壺はいずれも体部の細片で分類不能である。B I類の甕は小形のものの底部片で、糸切り痕をそのまま残している。

鉄製品（第108図2・3）は2点出土している。2は断面形が長方形を呈する細長い棒状のものである。現存長で4.2cm、幅1.2cm、厚さ0.8cmを計る。性格は不明。3は角釘である。やや弯曲しているが現存長で3.5cmになる。

5 ピット類

ピットは合計9個検出されている。これらは規模・形態にかなりのばらつきがみられる。ただ、位置・形態・堆積土の状況などからは、No.4ピットとNo.5ピット、およびNo.6ピットとNo.7ピットとは共通点がみられ、直接的な根拠には欠けるものの墓壙としての機能が推定される。また、No.2ピットとNo.3ピットは焼土遺構に近接して位置し、堆積土に多量の焼土を含むことからみて、それぞれに有能的な関連を有するものと思われる。以下、個別ごとに記述する。

No.1ピット（CH50ピット）

〔位置〕 CH50グリッドとCI50グリッドにかけて位置する。

〔確認面〕 IIa層を若干掘り下げて遺構の存在を確認している。掘込面はIIa層の上面である。

〔形状・大きさ〕 平面形はほぼ円形で、203×192cmの大きさと41cmの深さを測る。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ちあがる。

〔使用痕跡〕 埋土上部に2層に分けられる焼土面をもつ。壁の上部も部分的に焼けている。壁の下部・底面は焼けていない。

〔堆積土〕 3層に分けられ、第1層の褐色シルト層より焼土・木炭・土器を多量に出土する。第2～第3層はよい黄褐色のシルト層で、混入物はほとんどみられない。

〔出土遺物〕 遺物は土器に限られ、B I類の壺（ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理）の体部片が2片出土している。図化不能である。

No.2ピット（FA56-1ピット）

〔位置〕 FA56グリッド内に位置し、No.3ピット、FA56焼土遺構と近接している。

〔確認面〕 IIa層を若干掘り下げて遺構の存在を確認している。

〔形状・大きさ〕 一部破壊されているが、残存状況より平面形は円形を呈するものと考えら

れる。現存値で大きさは42×39cmで深さ32cmである。断面形はU字形となる。

〔堆積土〕 3層に分けられ、第2層のにぶい黄褐色シルト層に焼土・土器がかなり含まれる。

第1層、第3層には含有物が認められない。すべて自然堆積層である。

〔出土遺物〕 B I類の环(ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理)の底部片が出土している。

体部下端より底部全面に手持ちヘラケズリが施されている。固化不能である。

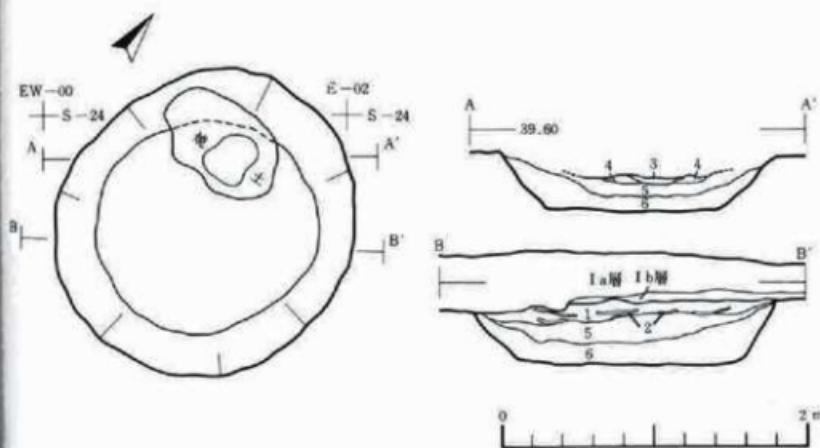
No.3 ピット (FA56-2 ピット)

〔位置〕 FA56グリッド内に位置し、No.2 ピット・FA56焼土遺構と近接している。

〔確認面〕 IIa層を若干掘り下げて確認しているが掘り込み面はIIa層の上面である。

〔形状・大きさ〕 平面形は橢円形となる。大きさは111×81cmで、深さは36cmある。底面は平坦で、壁はゆるやかではあるが、直線的に立ちあがる。断面形は逆台形状を呈する。

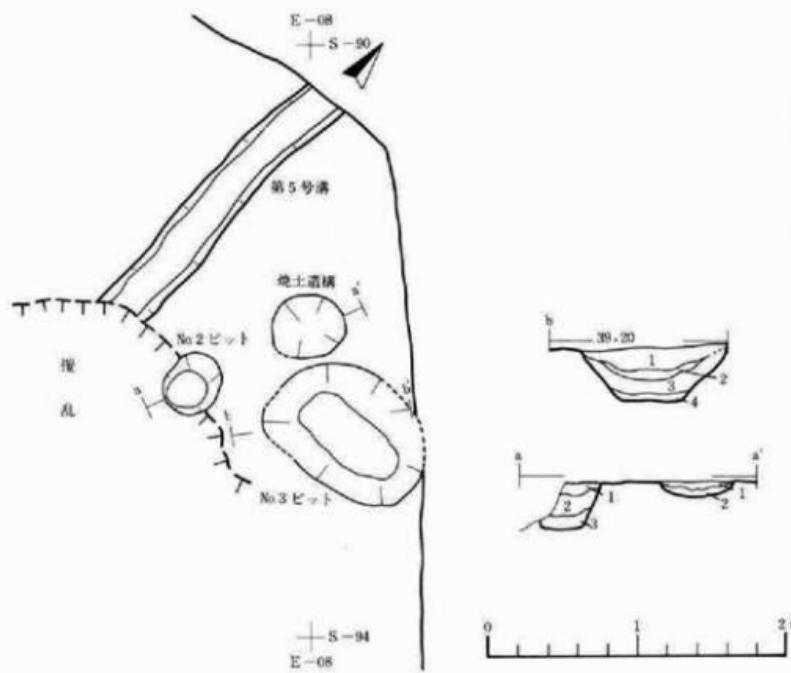
〔堆積土〕 堆積土は4層に細分されるが、すべての層に多量の焼土粒・木炭片を含む。



層No.	土 色	土 性	そ の 他
1	褐 色(10Y R4/4)	シルト	多量の木炭と焼土粒を含む
2			木炭の集積層
3	暗赤褐色(2.5Y R3/6)	シルト	かたい焼土
4	褐 色(10Y R4/4)	シルト	焼土粒をかなり含む、かたい
5	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	シルト	
6	# (10Y R5/3)	シルト	細砂を含む

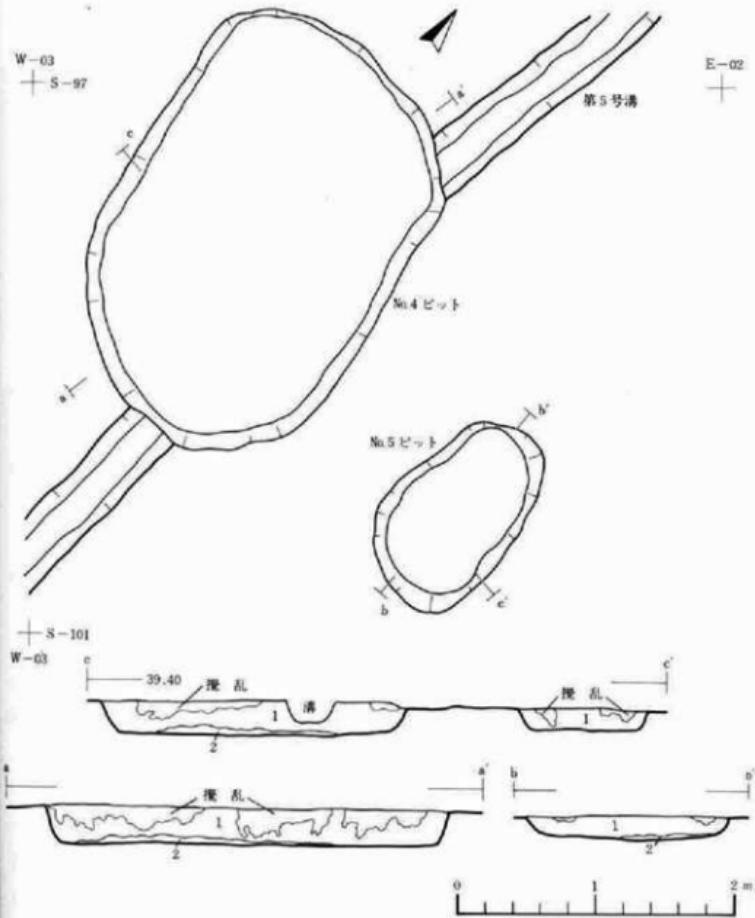
第110図 No.1 ピット

(出土遺物) 当ピットの出土遺物には土器と鉄製品がある。土器は环・甕・鉢などの器種に分けられる。环にはB I類(ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理)(第113図1)とB II類(ロクロ使用で還元炎焼成)(第113図2)とがあり、底部片はいずれも回転糸切り無調整のものである。甕はB I類(ロクロ使用で酸化炎焼成)に属し、口縁部に最大径をもつ大形のもの(第



層No.	土 色	土 性	そ の 他
No. 2 ピット	1 馬 色(10Y R4/4)	シルト	
	2 にじい黄褐色(10Y R4/3)	#	焼土粒・木炭粒をかなり含む
	3 # 色(10Y R5/3)	#	
No. 3 ピット	1 馬 色(10Y R4/4)	シルト	焼土粒・木炭粒を多く含む
	2 砂 黄 褐 色(10Y R4/2)	粘土質シルト	灰・木炭片を含む
	3 # (10Y R5/2)	#	#
	4 にじい黄褐色(10Y R4/3)	砂質シルト	細砂・焼土粒を含む
焼土遺構	1 明赤褐色(2.5Y R5/6)	シルト	焼土(かたい)
	2 赤 馬 色(2.5Y R4/6)	#	焼土

第113図 No. 2・No. 3 ピット、焼土遺構



	層No.	土 色	土 性	そ の 他
No. 4 ピット	1	にふい黄褐色(10Y R5/3)	シルト	地山土と褐色土の塊状混合土
	2	暗褐色(10Y R3/4)	η	
No. 5 ピット	1	にふい黄褐色(10Y R5/3)	シルト	地山土と褐色土の塊状混合土
	2	暗褐色(10Y R3/4)	η	

第112図 No. 4・No. 5 ピット

113図4)である。鉢もB I類のもので、内面にはヘラミガキを施して黒色処理を加えている(第113図3)。

鉄製品(第108図13)は、刀子である。刃部端を欠くが、現存長で15.2cmを測る大形のものである。茎は先端に向かって徐々に細くなるもので、断面形は方形を呈する。刃部は最大幅が1.3cmとなり、背は0.5cmの幅で平坦になっている。

No.4 ピット (FC03ピット)

(位置) FC03グリッド内に位置する。

(確認面) 耕作土直下のIIa層中より確認している。IIa層の上部にまで耕作が及んでおり、掘込面は不明である。

(重複) 第5号溝と重複関係にあり、上部を溝によって切られている。第5号溝より旧い。

(形状・大きさ) 平面形は橢円形となる。大きさは約311×211cmで、深さは27cmである。底面は平坦で、壁の立ち上がり角度はきつい。

(堆積土) 底面上に薄く堆積する暗褐色のシルト層を除き上部はすべて地山土と褐色シルト質土の塊状混合土である。人為的に埋め戻したものと思われる。

(出土遺物) 遺物はまったく出土していない。

No.5 ピット (FD03ピット)

(位置) FD03グリッドとFD50グリッドにまたがって位置する。

(確認面) 耕作土直下のIIa層中より確認している。IIa層の上面は耕作土になっている。

(形状・大きさ) 平面形は橢円形を呈する。大きさは146×91cmで、深さは15cmである。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。

(堆積土) No.4 ピットと同様に人為的堆積層である。地山土と褐色シルト質土の塊状混合土が充填する。

(出土遺物) A類(ロクロ未使用で酸化炎焼成)に属する甕の破片(第113図6)が1点出土している。口縁部のみで、全体の器形は不明である。

土鍬(第108図14)も1個出土しており、長さ5.9cm、最大復径2.1cmを計る。長軸に沿って中央部には径約0.3cmの貫通孔が穿たれている。

No.6 ピット (GE03—1ピット)

(位置) GE03グリッド内に位置する。

(確認面) 遺構はIIa層中より確認している。耕作はIIa層の上部にまで及んでおり、それを

除去した面が確認面である。

〔形状・大きさ〕 平面形は円形である。大きさは56×54cmで、深さは15cmである。底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。

〔堆積土〕 2層に分けられ、上層のにふい黄褐色シルト層は地山土と褐色土の塊状混合土である。下層の褐色シルト層は地山土と細砂を塊状に混入し、少量の焼土粒を含む。

〔出土遺物〕 B I類（ロクロ使用で酸化炎焼成）の甕（第113図8）が倒位の状態でおしつぶされて出土している。口縁部は短く外反し、口唇部は上方へ弱く挽き出している。体部はほとんど段まず直線的に底部へと移行する。器面調整は体部下半外面にヘラケズリ、体部内面にヘラナデを施している。

No.7 ピット（G E03—2 ピット）

〔位置〕 G E03グリッドとG E50グリッドにまたがって位置する。

〔確認面〕 造構はIIa層中より確認している。耕作はIIa層の上部にまで及んでおり、これを除去した面が造構の確認面である。

〔重複〕 第1方形溝状造構と重複関係にある。このピットは方形溝状造構よりも旧い。

〔形状・大きさ〕 平面形はほぼ円形である。大きさは116×107cmで、深さは20cmとなる。底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。

〔堆積土〕 堆積土は暗褐色シルト質土と地山土が塊状に混入した人為的堆積層である。

〔出土遺物〕 B I類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に属す壺の破片（第113図7）が1点出土している。口縁部は短く外反し、口唇部は上方へ挽き出している。体部はほぼ球形を呈し、中央付近に最大径をもつ。体部下半外面にヘラケズリが施されている。

No.8 ピット（G G56ピット）

〔位置〕 G G56グリッドとG H56グリッドにまたがって位置する。

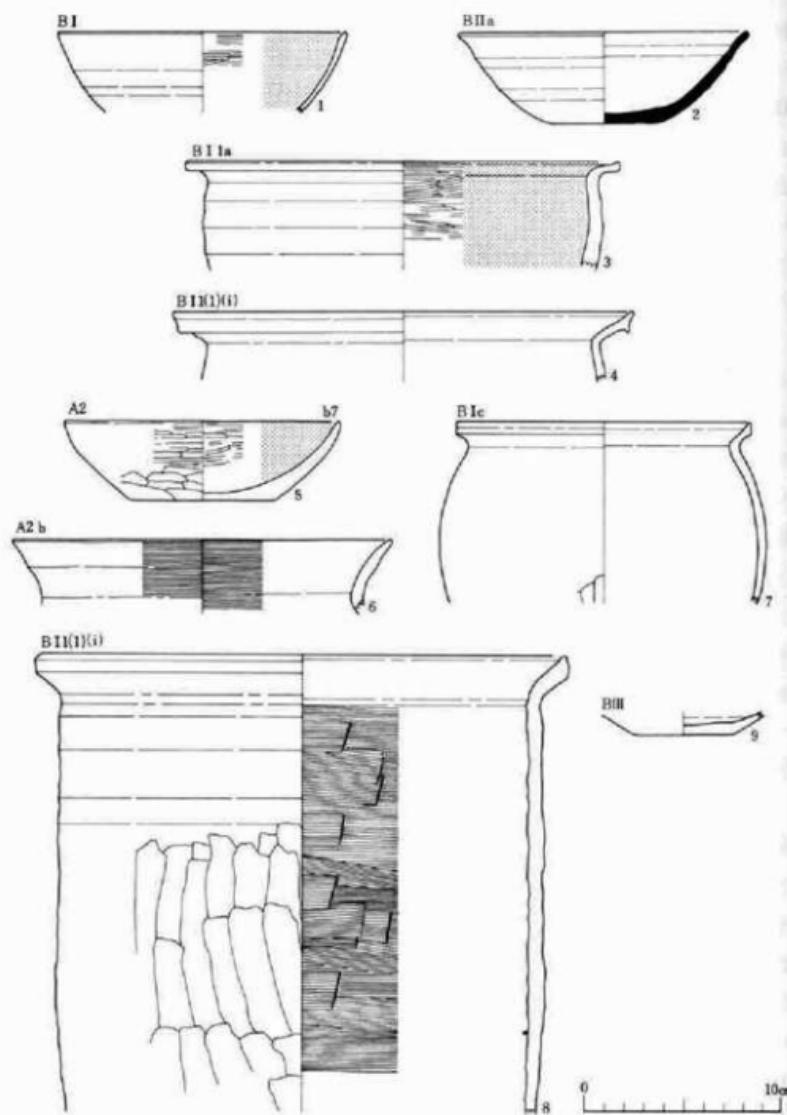
〔確認面〕 耕作土を除去した面であるIIa層中より確認している。

〔重複〕 第10号溝と重複関係にある。このピットは第10号溝に切られている。

〔形状・大きさ〕 平面形は円形となる。大きさは171×180cmで、深さは46cmである。底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。断面形は逆台形状を呈する。

〔堆積土〕 堆積土は3層に分けられる。上層は暗褐色のシルト層、中層が褐色のシルト層となり、混入物はみられない。下層はにふい黄褐色の粘土質シルト層で焼土粒・木炭粒をかなり含む。

〔出土遺物〕 土器が少量出土している。器種には壺と甕があり、甕はB III類（ロクロ使用で



第113図 ピット出土遺物

酸化炎焼成) (第113図9), 膜はB II類 (ロクロ使用で還元炎焼成) に類別される。すべて細片のため詳細は不明である。

焼土遺構

FA50焼土遺構

〔位置〕 FA50グリッドに位置し、No.2ピット・No.3ピットと近接している。

〔確認面〕 IIa層の上面より確認している。

〔形状・大きさ〕 平面形は円形となる。大きさは48×43cmで、厚さは7cmある。断面は浅い皿状を呈する。

〔出土遺物〕 遺物はまったく出土していない。

第16号住居跡ピット10

〔出土遺物〕 出土遺物は土器に限られる。器種には环と甕とがあり、ともにA類 (ロクロ未使用で酸化炎焼成) とB II類 (ロクロ使用で還元炎焼成) とに類別される。A類の环(第113図5)は平底のもので、器高が低くて底径が小さく、体部がやや丸味をもって外傾するものである。器面は内外ともヘラミガキで整えており、体部下半から底部にかけては外面にヘラケズリが認められる。B II類の环はヘラ切り無調整のものである。A類の甕は肩部に段を有する大形のもので、B II類の甕は体部の少しだけのため全体の器形は不明である。

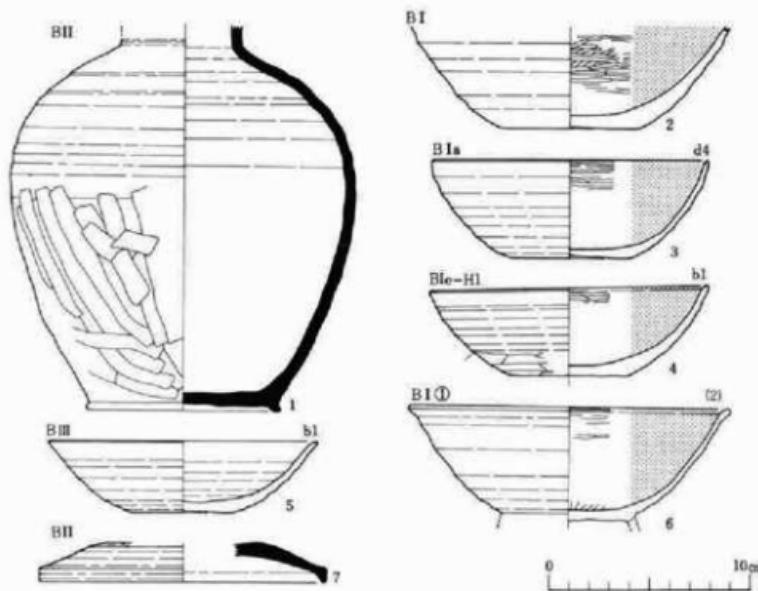
6 遺構に伴わない出土遺物 (第114・115図)

遺構に伴わない出土遺物には土器と鉄製品があり、土器には环・高台付环・壺・鉢・蓋などの器種がある。いずれも粗掘中に発見されたものである。

环形土器 (第114図3～5) 环には、B I類 (ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理) に属するものとB III類 (ロクロ使用で酸化炎焼成) に属するものがある。

〈环B I類〉 (3・4) 回転糸切り無調整のもの (B Ia類)(3)と再調整のため底部の切り離し手法が不明のもの (B Ie類)(4)がある。3はFA59グリッドより出土したもので、底径が小さく、体部がかなり丸味をもって立ちあがるものである。4は体部下端より底部全面に手持ちヘラケズリを施すもの (H₁手法) である。器高が低くて底径が小さく、体部はややふくらみをもって外傾する。FD56グリッドより出土している。

〈环B III類〉 (5) GE50グリッドより出土したもので、器高が低くて底径が小さく、体部



第114図 遺構に伴わない出土遺物（1）

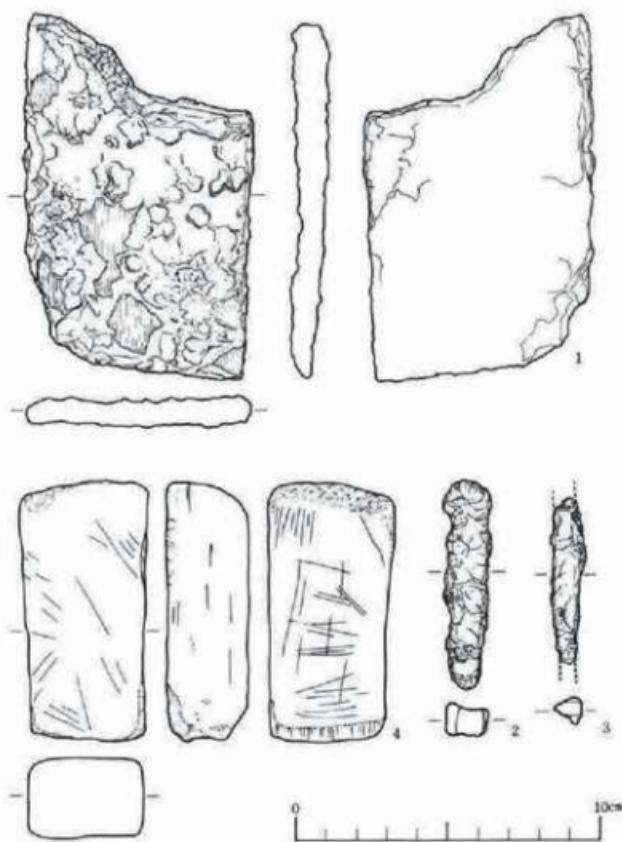
がややふくらみをもって外傾する。

高台付環形土器（第114図6） BI類（ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理）に類別される。高台部の形状は不明であるが、底部に菊花状のヘラ刻みを施し、周縁をロクロ調整するもの（B I①類）である。環部は器高がやや高く底径が小さく、体部はややふくらみをもって外傾するFD56グリッドより出土している。

壺形土器（第114図1） B II類（ロクロ使用で還元炎焼成）に属すもので、BH03グリッドより出土している。出土地点の周囲には土器が点在し、若干の焼土が発見されている。そのため、何らかの遺構の存在を予想して精査したが明確な遺構を検出できなかった。器種は長頸の壺で、頸部から口縁部は欠損している。体部下半から底部にかけては外面にヘラケズリが施され、底部には小さな台を付けて周縁をロクロ調整している。

鉢形土器（第114図2） BI類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に属すもので、CE03グリッドより出土している。体部下半から底部にかけての破片である。内面にはヘラミガキを施し、黒色処理を加えている。底部外面には右回転糸切り痕をそのまま残す。

壺形土器（第114図7） B II類（ロクロ使用で還元炎焼成）に属すもので、GE53グリッドより出土している。天井部からほぼ直線的に口縁部へ至り、口縁部は直角に折り曲げている。



第115図 遺構に伴わない出土遺物（2）

つまみの部分は欠損しており、不明である。天井部の上端は回転ヘラケズリで調整されている。

鉄製品（第115図1～3） 1は方形に近い大形の板状のものである。長さ・幅・厚さはそれぞれ、約10.5cm・7.4cm・1.0cmを測る。4面とも加工痕はみられず、鉄錠とも考えられるが明らかではない。出土地は不明である。2は角釘の完形品である。長さは6.9cmで、厚さはかなり太く、1cm内外を計る。3は小形の刀子の刃部片である。現存長で5.5cm、刃部幅0.9cmとなり、背は平坦になっており幅0.4cmを計る。

磁石（第115図4） 平面形、断面形とも長方形を呈する整ったもので、4面に使用痕がみられる。石質は細粒磁灰岩である。

図示遺物觀察表 第3表 土 器 觀 察 表
第4表 鉄製品・土製品・石製品觀察表

第4表 錆製品・土製品・石製品觀察表

鉄 製 品

実測品番号	出土遺跡名	器種 (機械的のちり)	長さcm	幅さcm	厚さcm	容積	横断面形	備考
第13図 12 第2号 住居跡	鍤	鍤	9.5	2.5	0.8	二等辺三角形	一方の先端を欠く	
第21図 9 第5号 住居跡	鍤	鍤	5.7	1.7	0.3	長方形		
〃 10 〃 第7号 住居跡	刀 子	子	25.2	0.5	0.5	二等辺三角形	刃部端をほんの少しきがほば尖形	
第26図 11 第7号 住居跡 不	釘	明	9.7	1.9	0.4	円形	細長い棒状(二字形)	
〃 12 〃	釘	釘	2.7	0.5	0.5	正方形		
〃 13 〃	刀	子	2.8	1.0	0.4	二等辺三角形	両端を欠く	
第32図 1 第9号 住居跡	刀	子	17.6	0.9	0.6	二等辺三角形	茎と身の一部を欠く	
〃 2 〃	鍤	鍤	14.9	0.6	0.6	正方形	一方の先端を欠く	
〃 3 〃	不	明	5.5	0.8	0.6	長方形	細長い板状一方の先端欠く	
第35図 11 第10号 住居跡	刀	子	4.4	身1.0	0.8	二等辺三角形	茎と身の一部を欠く	
〃 12 〃	釘	釘	3.8	1.0	1.1	正方形	破片	
〃 13 〃	釘	釘	2.9	0.6	0.4	正方形	破片	
第40図 1 第11号 住居跡	刀	子	9.2	1.5	0.4	二等辺三角形	茎と身の一部を欠く	
〃 2 〃	刀	子	9.6	身中央	0.8	0.4	二等辺三角形	両端を欠く
〃 3 〃	釘	釘	5.1	0.7	0.6	正方形	一方の先端を欠く	
〃 4 〃	釘	釘	3.6	0.6	0.6	正方形	一方形の立方体	
〃 5 〃	施 金 具	施 金 具	2.5	2.4	1.3	長方形	一方の先端を欠く	
〃 6 〃	釘	釘	3.3	0.6	0.4	正方形	一方の先端を欠く	
〃 7 〃	不	明	1.3	1.1	0.7	楕円形	一方の先端を欠く	
第45図 1 第12号 住居跡	刀	子	9.2	1.5	0.6	二等辺三角形	茎部、刃部の一部を欠く	
第53図 4 第13号 住居跡	刀	子	9.3	1.7	0.9	二等辺三角形	両端を欠く	
〃 5 〃	刀	子	9.9	1.2	0.7	二等辺三角形	茎、刃部端の両端を欠く	
〃 6 〃	釘	釘	3.6	0.8	0.6	正方形	両端を欠く	
〃 7 〃	鍤	鍤	鍤3.2 鋸歓1.6	峰2.7	鋸歓0.4	身+菱形 鋸歓→正方形	身の先端、両端共に先端の大部分を欠く	
第55図 10 第14号 住居跡 不	明	明	8.6	上幅2.1 下幅1.0	上幅0.5半幅1.0	上幅長方形 中央凹形		
第58図 8 第15号 住居跡	刀 子	子	2.4	1.0	0.4	二等辺三角形	刀部端を欠く	
〃 9 〃	刀	子	20.9	0.6	0.4	二等辺三角形	刀子の身の一部、両端を欠く	
第62図 第17号 住居跡	筋縫車の内盤部		直径5.6	0.4	長楕円形			
第68図 1 第18号 住居跡	鍤 の 刀 先	子	13.1	3.1	1.1	二等辺三角形		
〃 2 〃	刀	子	15.0	0.5	0.6	二等辺三角形	刃部の一部を欠く	

遺物名	分類	組番	出土状況	種	色	調	種	土	地質	測量				測量 位置	測量 位置
										外	内	外	内	外	内
44. 220	B II	鉢直上	1 内-褐色 外-褐色	骨質下胚人	小骨頭	骨質下胚人	小骨頭	砂質土	砂質土	口 線	唇	外 頭	内 頭	外 頭	内 頭
44. 220	B II	セマド直上	1 内-褐色 外-褐色	骨質下胚人	小骨頭	骨質下胚人	小骨頭	砂質土	砂質土	口 線	唇	外 頭	内 頭	外 頭	内 頭
44. 221	Pit		1 内-褐色 外-褐色	骨質下胚人	小骨頭	骨質下胚人	小骨頭	砂質土	砂質土	口 線	唇	外 頭	内 頭	外 頭	内 頭
44. 220	B I 1	P II 10	1 内-褐色 外-褐色	骨質下胚人	小骨頭	骨質下胚人	小骨頭	砂質土	砂質土	口 線	唇	外 頭	内 頭	外 頭	内 頭
44. 222	(2)II		6 内-褐色、淡褐色	骨質下胚人	小骨頭	骨質下胚人	小骨頭	砂質土	砂質土	口 線	唇	外 頭	内 頭	外 頭	内 頭
44. 220	B II	セマド内	1 内-褐色、褐色 外-褐色	骨質下胚人	小骨頭	骨質下胚人	小骨頭	砂質土	砂質土	口 線	唇	外 頭	内 頭	外 頭	内 頭
44. 223	(2)II		4 内-褐色	骨質下胚人	小骨頭	骨質下胚人	小骨頭	砂質土	砂質土	口 線	唇	外 頭	内 頭	外 頭	内 頭
44. 224	B II	壁土中	1 内-褐色	骨質下胚人	小骨頭	骨質下胚人	小骨頭	砂質土	砂質土	口 線	唇	外 頭	内 頭	外 頭	内 頭
44. 220	B II	壁直上	1 内-褐色	骨質下胚人	小骨頭	骨質下胚人	小骨頭	砂質土	砂質土	口 線	唇	外 頭	内 頭	外 頭	内 頭
44. 225	B II	壁直上	1 内-褐色	骨質下胚人	小骨頭	骨質下胚人	小骨頭	砂質土	砂質土	口 線	唇	外 頭	内 頭	外 頭	内 頭
44. 226	B II	壁直上	1 内-褐色	骨質下胚人	小骨頭	骨質下胚人	小骨頭	砂質土	砂質土	口 線	唇	外 頭	内 頭	外 頭	内 頭
44. 227	B I C	壁土中	1 内-褐色 外-褐色	骨質下胚人	小骨頭	骨質下胚人	小骨頭	砂質土	砂質土	口 線	唇	外 頭	内 頭	外 頭	内 頭
44. 228	B I C	壁直上	1 内-褐色 外-褐色	骨質下胚人	小骨頭	骨質下胚人	小骨頭	砂質土	砂質土	口 線	唇	外 頭	内 頭	外 頭	内 頭
44. 229	- H 1		内-褐色	骨質下胚人	小骨頭	骨質下胚人	小骨頭	砂質土	砂質土	口 線	唇	外 頭	内 頭	外 頭	内 頭
44. 230	B I C	壁土中	5 内-褐色	骨質下胚人	小骨頭	骨質下胚人	小骨頭	砂質土	砂質土	口 線	唇	外 頭	内 頭	外 頭	内 頭
44. 231	B I A	壁土内	6 内-褐色	骨質下胚人	小骨頭	骨質下胚人	小骨頭	砂質土	砂質土	口 線	唇	外 頭	内 頭	外 頭	内 頭
44. 232	B I A	壁直上	3 内-褐色	骨質下胚人	小骨頭	骨質下胚人	小骨頭	砂質土	砂質土	口 線	唇	外 頭	内 頭	外 頭	内 頭
44. 233	B I A	壁直上	5 内-褐色	骨質下胚人	小骨頭	骨質下胚人	小骨頭	砂質土	砂質土	口 線	唇	外 頭	内 頭	外 頭	内 頭
44. 234	B I A	壁直上	1 内-褐色	骨質下胚人	小骨頭	骨質下胚人	小骨頭	砂質土	砂質土	口 線	唇	外 頭	内 頭	外 頭	内 頭
44. 235	- M	平面直上	6 内-褐色	骨質下胚人	小骨頭	骨質下胚人	小骨頭	砂質土	砂質土	口 線	唇	外 頭	内 頭	外 頭	内 頭
44. 236	B I 2	平面直上	1 内-褐色	骨質下胚人	小骨頭	骨質下胚人	小骨頭	砂質土	砂質土	口 線	唇	外 頭	内 頭	外 頭	内 頭
44. 237	B I 2	平面直上	4 内-褐色	骨質下胚人	小骨頭	骨質下胚人	小骨頭	砂質土	砂質土	口 線	唇	外 頭	内 頭	外 頭	内 頭
44. 238	B I 2	平面直上	1 内-褐色	骨質下胚人	小骨頭	骨質下胚人	小骨頭	砂質土	砂質土	口 線	唇	外 頭	内 頭	外 頭	内 頭
44. 239	B I 2	平面直上	3 内-褐色	骨質下胚人	小骨頭	骨質下胚人	小骨頭	砂質土	砂質土	口 線	唇	外 頭	内 頭	外 頭	内 頭
44. 240	B I 2	平面直上	1 内-褐色、褐色	骨質下胚人	小骨頭	骨質下胚人	小骨頭	砂質土	砂質土	口 線	唇	外 頭	内 頭	外 頭	内 頭
44. 241	B I 1	ピット	6 内-褐色	骨質下胚人	小骨頭	骨質下胚人	小骨頭	砂質土	砂質土	口 線	唇	外 頭	内 頭	外 頭	内 頭
44. 242	B I C	セマド内	3 内-褐色	骨質下胚人	小骨頭	骨質下胚人	小骨頭	砂質土	砂質土	口 線	唇	外 頭	内 頭	外 頭	内 頭
44. 243	B I C	- M	5 内-褐色	骨質下胚人	小骨頭	骨質下胚人	小骨頭	砂質土	砂質土	口 線	唇	外 頭	内 頭	外 頭	内 頭

通 用 器 械 種 名	固 定 分 類	土 壌 性 状 況	植 被 色 調	植 被 土 壌 性 状	口 縫 部	體 部	上 平 面	外 界	内 界	浸 漬 部		（　）深元極	可 能 侵 染 病 害
										深 度 （ cm ）	測定數 （ n ）		
井 28 B 1 C ピッタ 7	1 8	内+赤色 外+褐色	1 5	内+赤色 外+白色	小中葉 小中葉	ロコロナナ ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラケダリ	4.4 (14.8)	褐斑 網狀
井 29 B 1 C ケツアツ内	2 5	内+赤色 外+黑色	4 5	内+白色..光澤色	小中葉 小中葉 小中葉	ロコロナナ ロコロナナ ロコロナナ	ロコロナナ ロコロナナ	ロコロナナ	ロコロナナ	ロコロナナ	ロコロナナ	3.6 (4.75)	褐斑 網狀
井 30 B 6 ピッタ 7	4 5	内+白色..光澤色 外+白色..無色	4 5	内+白色..光澤色 外+白色..無色	小中葉 小中葉 小中葉 小中葉	ロコロナナ ロコロナナ ロコロナナ ロコロナナ	ロコロナナ ロコロナナ ロコロナナ ロコロナナ	ロコロナナ	ロコロナナ	ロコロナナ	ロコロナナ	3.6 (4.75)	褐斑 網狀
井 31 B 6 ピッタ 7	4 5	内+白色..光澤色 外+白色..無色	4 5	内+白色..光澤色 外+白色..無色	小中葉 小中葉 小中葉 小中葉	ロコロナナ ロコロナナ ロコロナナ ロコロナナ	ロコロナナ ロコロナナ ロコロナナ ロコロナナ	ロコロナナ	ロコロナナ	ロコロナナ	ロコロナナ	3.6 (4.75)	褐斑 網狀
井 32 B 1 C ピッタ内	1 2	内+白色..光澤色 外+白色..無色	1 8	内+白色..光澤色 外+白色..無色	小中葉 小中葉 小中葉 小中葉	ヘラケダリ ヘラケダリ ヘラケダリ ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラケダリ	3.6 (5.3)	褐斑 網狀
林 7 a	1 8	内+白色..光澤色 外+白色..無色	1 8	内+白色..光澤色 外+白色..無色	小中葉 小中葉 小中葉 小中葉	ヘラケダリ ヘラケダリ ヘラケダリ ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラケダリ	3.6 (5.3)	褐斑 網狀
井 33 A 1 C 褐2等下部	1 3	内+白色..光澤色	1 9	内+白色..光澤色	小中葉 小中葉 少少葉 少少葉	ヘラケダリ ヘラケダリ ヘラナナ ヘラナナ	ヘラケダリ ヘラケダリ	ヘラナナ	ヘラナナ	ヘラナナ	ヘラナナ	3.6 (5.3)	褐斑 網狀
井 34 A 2 田植	10	内+白色..白色	9 10	内+白色..白色	少少葉 少少葉	ヘラナナ ヘラナナ	ヘラナナ	ヘラナナ	ヘラナナ	ヘラナナ	ヘラナナ	3.6 (5.3)	褐斑 網狀
井 35 A 2 褐2等下部	1 4	内+白色..光澤色..無色	1 4	内+白色..光澤色..無色	小中葉 小中葉	ヘラケダリ ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラケダリ	3.6 (5.3)	褐斑 網狀
井 36 A 2 田植	1 2	内+白色..無色	1 2	内+白色..無色	少少葉 少少葉	ヘラケダリ ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラナナ	ヘラナナ	ヘラナナ	ヘラナナ	3.6 (5.3)	褐斑 網狀
井 37 A 2 ピッタ 6	9 10	内+白色..光澤色..無色	9 10	内+白色..光澤色..無色	小中葉 小中葉	ヘラケダリ ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラケダリ	3.6 (5.3)	褐斑 網狀
井 38 A 1 e 田植	1 2	内+白色..光澤色..無色	1 2	内+白色..光澤色..無色	少少葉 少少葉	ロコロナナ ロコロナナ	ロコロナナ	ロコロナナ	ロコロナナ	ロコロナナ	ロコロナナ	3.6 (5.3)	褐斑 網狀
井 39 A 1 a ピッタ 7 (ii)	1 20	内+白色..無色	1 20	内+白色..無色	少少葉 少少葉	ヘラケダリ ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラケダリ	3.6 (5.3)	褐斑 網狀
井 40 A 1 a 田植	1 10	内+白色..光澤色..無色	1 10	内+白色..光澤色..無色	少少葉 少少葉	ヘラケダリ ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラナナ	ヘラナナ	ヘラナナ	ヘラナナ	3.6 (5.3)	褐斑 網狀
井 41 A 1 a 田植	1 20	内+白色..無色	1 20	内+白色..無色	少少葉 少少葉	ヘラケダリ ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラナナ	ヘラナナ	ヘラナナ	ヘラナナ	3.6 (5.3)	褐斑 網狀
井 42 A 1 a 田植	1 30	内+白色..無色	1 30	内+白色..無色	少少葉 少少葉	ヘラケダリ ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラナナ	ヘラナナ	ヘラナナ	ヘラナナ	3.6 (5.3)	褐斑 網狀
井 43 A 1 a 田植	1 30	内+白色..無色	1 30	内+白色..無色	少少葉 少少葉	ヘラケダリ ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラナナ	ヘラナナ	ヘラナナ	ヘラナナ	3.6 (5.3)	褐斑 網狀
井 44 A 1 a 田植	1 30	内+白色..無色	1 30	内+白色..無色	少少葉 少少葉	ヘラケダリ ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラナナ	ヘラナナ	ヘラナナ	ヘラナナ	3.6 (5.3)	褐斑 網狀
井 45 A 1 a 田植	1 30	内+白色..無色	1 30	内+白色..無色	少少葉 少少葉	ヘラケダリ ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラナナ	ヘラナナ	ヘラナナ	ヘラナナ	3.6 (5.3)	褐斑 網狀
井 46 A 1 a 田植	1 30	内+白色..無色	1 30	内+白色..無色	少少葉 少少葉	ヘラケダリ ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラナナ	ヘラナナ	ヘラナナ	ヘラナナ	3.6 (5.3)	褐斑 網狀
井 47 A 1 a 田植	1 30	内+白色..無色	1 30	内+白色..無色	少少葉 少少葉	ヘラケダリ ヘラケダリ	ヘラケダリ	ヘラナナ	ヘラナナ	ヘラナナ	ヘラナナ	3.6 (5.3)	褐斑 網狀

標	名	部	品	分類	出	土壤性	種	色	質	形	土	地	被	口	株	葉	體	根	莖	葉	莖	葉	莖	葉	莖	葉	法				
																											() 植物	() 用途			
第 49 表 11 例 11 の	第 34 B 1 ③	葉	葉	1	内-青色	小-黑	柿子千葉人	青-紫	硬-角	大-角	叶-粗-毛	毛-粗	被-黑	口-粗	株-粗	葉-粗	體-粗	根-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	11度(14.5) 順序	3.5 鋸齒	鋸齒
	46	54	-1.1	1	内-青色	5	青-白	少-5% 花	小-黑	柿子千葉人	青-紫	硬-角	大-角	叶-粗-毛	毛-粗	被-黑	口-粗	株-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	14.5 5.6	3.6	鋸齒	
	45	53	-3.1	1	内-青色	5	外-青-紅色	無	小-黑	柿子千葉人	青-紫	硬-角	大-角	叶-粗-毛	毛-粗	被-黑	口-粗	株-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	14.5 5.6	3.6	鋸齒	
	46	54	B 1 ④	根-土中	1	内-青色	5	外-青-紅色	無	小-黑	柿子千葉人	青-紫	硬-角	大-角	叶-粗-毛	毛-粗	被-黑	口-粗	株-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	14.5 5.6	3.6	鋸齒		
	46	54	B 1 ⑤	葉	2	内-青色	5	外-青-紅色	無	小-黑	柿子千葉人	青-紫	硬-角	大-角	叶-粗-毛	毛-粗	被-黑	口-粗	株-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	14.5 5.6	3.6	鋸齒		
	46	54	B 1 ⑥	葉	3	内-青色	5	外-青-紅色	無	小-黑	柿子千葉人	青-紫	硬-角	大-角	叶-粗-毛	毛-粗	被-黑	口-粗	株-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	14.5 5.6	3.6	鋸齒		
	46	54	B 1 ⑦	葉	4	外-青-紅色	無	小-黑	柿子千葉人	青-紫	硬-角	大-角	叶-粗-毛	毛-粗	被-黑	口-粗	株-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	14.5 5.6	3.6	鋸齒		
	53	54	B 1 ⑧	葉	5	外-青-紅色	無	小-黑	柿子千葉人	青-紫	硬-角	大-角	叶-粗-毛	毛-粗	被-黑	口-粗	株-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	14.5 5.6	3.6	鋸齒		
	53	54	B 1 ⑨	葉	1	内-青色	5	外-青-紅色	無	小-黑	柿子千葉人	青-紫	硬-角	大-角	叶-粗-毛	毛-粗	被-黑	口-粗	株-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	14.5 5.6	3.6	鋸齒		
	54	55	B 1 ⑩	葉	10	外-青-紅色	無	小-黑	柿子千葉人	青-紫	硬-角	大-角	叶-粗-毛	毛-粗	被-黑	口-粗	株-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	14.5 5.6	3.6	鋸齒		
第 50 例 12 の	第 34 B 1 ⑪	葉	葉	1	内-青色	無	柿子千葉人	青-紫	硬-角	大-角	叶-粗-毛	毛-粗	被-黑	口-粗	株-粗	葉-粗	體-粗	根-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	14.5 5.6	3.6	鋸齒		
	55	56	B 1 ⑫	葉	8	外-青-紅色	無	小-黑	柿子千葉人	青-紫	硬-角	大-角	叶-粗-毛	毛-粗	被-黑	口-粗	株-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	14.5 5.6	3.6	鋸齒		
	55	56	B 1 ⑬	葉	9	外-青-紅色	無	小-黑	柿子千葉人	青-紫	硬-角	大-角	叶-粗-毛	毛-粗	被-黑	口-粗	株-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	14.5 5.6	3.6	鋸齒		
	55	56	B 1 ⑭	葉	10	外-青-紅色	無	小-黑	柿子千葉人	青-紫	硬-角	大-角	叶-粗-毛	毛-粗	被-黑	口-粗	株-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	14.5 5.6	3.6	鋸齒		
	55	56	B 1 ⑮	葉	11	外-青-紅色	無	小-黑	柿子千葉人	青-紫	硬-角	大-角	叶-粗-毛	毛-粗	被-黑	口-粗	株-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	14.5 5.6	3.6	鋸齒		
	55	56	B 1 ⑯	葉	12	外-青-紅色	無	小-黑	柿子千葉人	青-紫	硬-角	大-角	叶-粗-毛	毛-粗	被-黑	口-粗	株-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	14.5 5.6	3.6	鋸齒		
第 51 例 13 の	第 35 B 1 ⑰	葉	葉	1	内-青色	無	柿子千葉人	青-紫	硬-角	大-角	叶-粗-毛	毛-粗	被-黑	口-粗	株-粗	葉-粗	體-粗	根-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	14.5 5.6	3.6	鋸齒		
	57	58	B 1 ⑱	葉	10	外-青-紅色	無	小-黑	柿子千葉人	青-紫	硬-角	大-角	叶-粗-毛	毛-粗	被-黑	口-粗	株-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	14.5 5.6	3.6	鋸齒		
	57	58	B 1 ⑲	葉	11	外-青-紅色	無	小-黑	柿子千葉人	青-紫	硬-角	大-角	叶-粗-毛	毛-粗	被-黑	口-粗	株-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	14.5 5.6	3.6	鋸齒		
	57	58	B 1 ⑳	葉	12	外-青-紅色	無	小-黑	柿子千葉人	青-紫	硬-角	大-角	叶-粗-毛	毛-粗	被-黑	口-粗	株-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	14.5 5.6	3.6	鋸齒		
	57	58	B 1 ㉑	葉	13	外-青-紅色	無	小-黑	柿子千葉人	青-紫	硬-角	大-角	叶-粗-毛	毛-粗	被-黑	口-粗	株-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	14.5 5.6	3.6	鋸齒		
	57	58	B 1 ㉒	葉	14	外-青-紅色	無	小-黑	柿子千葉人	青-紫	硬-角	大-角	叶-粗-毛	毛-粗	被-黑	口-粗	株-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	14.5 5.6	3.6	鋸齒		
	57	58	B 1 ㉓	葉	15	外-青-紅色	無	小-黑	柿子千葉人	青-紫	硬-角	大-角	叶-粗-毛	毛-粗	被-黑	口-粗	株-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	14.5 5.6	3.6	鋸齒		
	57	58	B 1 ㉔	葉	16	外-青-紅色	無	小-黑	柿子千葉人	青-紫	硬-角	大-角	叶-粗-毛	毛-粗	被-黑	口-粗	株-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	莖-粗	葉-粗	14.5 5.6	3.6	鋸齒		

標	種	固相 組成 百分比	出土狀況	遺 物 形 狀	色 調	胎 土	地 質	口 緣	底	體 形	上 半	底 部	下 半	底 部	外 部	內 部	外 部	內 部	測 量		() 在天然 狀 態 下 測 量		
																			測定 (mm)	測定 (mm)	測定 (mm)	測定 (mm)	
11	切	56.5 ± 4	灰陶	10	内-褐黃色、淡褐色 外-深紅褐色、黃褐色	小板	鐵+千葉土+テ	ヘラガハ	鐵	70	圓	上半	底	下半	底	外	內	外	內	口徑(17.7)	高さ	測定(14.6)	測定(13.4)
12	切	56.5 ± 4	灰陶	10	内-褐黃色、淡褐色 外-深紅褐色、黃褐色	小板	鐵+千葉土+テ	ヘラガハ	鐵	70	圓	上半	底	下半	底	外	內	外	內	口徑(15.0)	厚度	測定(13.6)	測定(13.6)
13	塊	39.4 ± 4	鐵土中	3	内-淡紅褐色、黃褐色 外-深紅褐色、淡褐色	小板	鐵+千葉土+テ	ヘラガハ	鐵	70	圓	上半	底	下半	底	外	內	外	innen	口徑(14.0)	厚度	測定(13.0)	測定(12.9)
14	塊	42.7 ± 5	鐵土中	2	内-深紅褐色、淡褐色 外-深紅褐色、淡褐色	小板	鐵+千葉土+テ	ヘラガハ	鐵	70	圓	上半	底	下半	底	外	innen	外	innen	口徑(15.0)	厚度	測定(14.6)	測定(13.6)
15	塊	56.0 ± 4	鐵土中	10	内-深紅褐色、淡褐色 外-深紅褐色、黃褐色	小板	鐵+千葉土+テ	ヘラガハ	鐵	70	圓	上半	底	下半	底	外	innen	外	innen	口徑(14.0)	厚度	測定(14.0)	測定(13.5)
16	塊	56.0 ± 4	鐵土中	10	内-深紅褐色、淡褐色 外-深紅褐色、黃褐色	小板	鐵+千葉土+テ	ヘラガハ	鐵	70	圓	上半	底	下半	底	外	innen	外	innen	口徑(14.0)	厚度	測定(14.5)	測定(13.4)
17	塊	56.0 ± 4	鐵土中	3	内-深紅褐色、淡褐色 外-深紅褐色、黃褐色	小板	鐵+千葉土+テ	ヘラガハ	鐵	70	圓	上半	底	下半	底	外	innen	外	innen	口徑(14.0)	厚度	測定(14.5)	測定(13.4)
18	塊	56.0 ± 4	鐵土中	10	内-深紅褐色、黃褐色 外-深紅褐色、黃褐色	小板	鐵+千葉土+テ	ヘラガハ	鐵	70	圓	上半	底	下半	底	外	innen	外	innen	口徑(14.0)	厚度	測定(14.5)	測定(13.4)
19	塊	56.0 ± 4	鐵土中	10	内-深紅褐色、黃褐色 外-深紅褐色、黃褐色	小板	鐵+千葉土+テ	ヘラガハ	鐵	70	圓	上半	底	下半	底	外	innen	外	innen	口徑(14.0)	厚度	測定(14.5)	測定(13.4)
20	塊	56.0 ± 4	鐵土中	3	内-深紅褐色、黃褐色 外-深紅褐色、黃褐色	小板	鐵+千葉土+テ	ヘラガハ	鐵	70	圓	上半	底	下半	底	外	innen	外	innen	口徑(14.0)	厚度	測定(14.5)	測定(13.4)
21	塊	56.0 ± 4	鐵土中	3	内-深紅褐色、黃褐色 外-深紅褐色、黃褐色	小板	鐵+千葉土+テ	ヘラガハ	鐵	70	圓	上半	底	下半	底	外	innen	外	innen	口徑(14.0)	厚度	測定(14.5)	測定(13.4)
22	塊	56.0 ± 4	鐵土中	3	内-深紅褐色、黃褐色 外-深紅褐色、黃褐色	小板	鐵+千葉土+テ	ヘラガハ	鐵	70	圓	上半	底	下半	底	外	innen	外	innen	口徑(14.0)	厚度	測定(14.5)	測定(13.4)
23	塊	56.0 ± 4	鐵土中	3	内-深紅褐色、黃褐色 外-深紅褐色、黃褐色	小板	鐵+千葉土+テ	ヘラガハ	鐵	70	圓	上半	底	下半	底	外	innen	外	innen	口徑(14.0)	厚度	測定(14.5)	測定(13.4)
24	塊	56.0 ± 4	鐵土中	3	内-深紅褐色、黃褐色 外-深紅褐色、黃褐色	小板	鐵+千葉土+テ	ヘラガハ	鐵	70	圓	上半	底	下半	底	外	innen	外	innen	口徑(14.0)	厚度	測定(14.5)	測定(13.4)
25	塊	56.0 ± 4	鐵土中	3	内-深紅褐色、黃褐色 外-深紅褐色、黃褐色	小板	鐵+千葉土+テ	ヘラガハ	鐵	70	圓	上半	底	下半	底	外	innen	外	innen	口徑(14.0)	厚度	測定(14.5)	測定(13.4)
26	塊	56.0 ± 4	鐵土中	3	内-深紅褐色、黃褐色 外-深紅褐色、黃褐色	小板	鐵+千葉土+テ	ヘラガハ	鐵	70	圓	上半	底	下半	底	外	innen	外	innen	口徑(14.0)	厚度	測定(14.5)	測定(13.4)
27	塊	56.0 ± 4	鐵土中	3	内-深紅褐色、黃褐色 外-深紅褐色、黃褐色	小板	鐵+千葉土+テ	ヘラガハ	鐵	70	圓	上半	底	下半	底	外	innen	外	innen	口徑(14.0)	厚度	測定(14.5)	測定(13.4)
28	塊	56.0 ± 4	鐵土中	3	内-深紅褐色、黃褐色 外-深紅褐色、黃褐色	小板	鐵+千葉土+テ	ヘラガハ	鐵	70	圓	上半	底	下半	底	外	innen	外	innen	口徑(14.0)	厚度	測定(14.5)	測定(13.4)
29	塊	56.0 ± 4	鐵土中	3	内-深紅褐色、黃褐色 外-深紅褐色、黃褐色	小板	鐵+千葉土+テ	ヘラガハ	鐵	70	圓	上半	底	下半	底	外	innen	外	innen	口徑(14.0)	厚度	測定(14.5)	測定(13.4)
30	塊	56.0 ± 4	鐵土中	3	内-深紅褐色、黃褐色 外-深紅褐色、黃褐色	小板	鐵+千葉土+テ	ヘラガハ	鐵	70	圓	上半	底	下半	底	外	innen	外	innen	口徑(14.0)	厚度	測定(14.5)	測定(13.4)
31	塊	56.0 ± 4	鐵土中	3	内-深紅褐色、黃褐色 外-深紅褐色、黃褐色	小板	鐵+千葉土+テ	ヘラガハ	鐵	70	圓	上半	底	下半	底	外	innen	外	innen	口徑(14.0)	厚度	測定(14.5)	測定(13.4)

遺物名	層位	目録番号	出土状況	通	色	調	粘	土	地成	口縁		底		調		粘		（）厚さ	写真番号
										外	内	外	内	底面下平	底	内	外		
15. 磁器 目録番号 B1.3	層土中	1 4	内-黑色 外-白色	内-黑色	少々黒	柱子插入 部分が插入	少々黒	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	内	外	内	外	底面下平	底	内	外	5.7 [5.7]	写真 番号
16. 磁器 目録番号 B1.4	ビ-ト7	1 4	外-黑色 内-黑色	外-黑色	少々黒	柱子插入 部分が插入	少々黒	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	内	外	内	外	底面下平	底	内	外	4.1 [4.1]	写真 番号
17. 磁器 目録番号 B1.5	ビ-ト1層1層	1 2	内-黑色 外-暗褐色	内-黑色	少々黒	柱子插入 部分が插入	少々黒	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	内	外	内	外	底面下平	底	内	外	4.4 [4.4]	写真 番号
18. 磁器 目録番号 B1.6	ビ-ト11	1 2	内-黑色 外-白色	内-黑色	少々黒	柱子插入 部分が插入	少々黒	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	内	外	内	外	底面下平	底	内	外	3.0 [3.0]	写真 番号
19. 磁器 目録番号 B1.7	層土下部	1 2	内-黑色 外-暗褐色、黑色	内-黑色	少々黒	柱子插入 部分が插入	少々黒	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	内	外	内	外	底面下平	底	内	外	4.8 [4.8]	写真 番号
20. 磁器 目録番号 B1.8	ビ-ト2	1 3	内-黑色 外-白色、黑色	内-黑色	少々黒	柱子插入 部分が插入	少々黒	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	内	外	内	外	底面下平	底	内	外	5.5 [5.5]	写真 番号
21. 磁器 目録番号 B1.9	ビ-ト8	1 2	内-黑色 外-白色、浅褐色	内-黑色	少々黒	柱子插入 部分が插入	少々黒	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	内	外	内	外	底面下平	底	内	外	4.7 [4.7]	写真 番号
22. 磁器 目録番号 B1.10	ビ-ト1-16	1 3	内-黑色 外-淡褐色、黑色	内-黑色	少々黒	柱子插入 部分が插入	少々黒	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	内	外	内	外	底面下平	底	内	外	4.4 [4.4]	写真 番号
23. 磁器 目録番号 B1.11	東側外壁上部	2 3	内-淡褐色	内-黑色	少々黒	柱子插入 部分が插入	少々黒	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	内	外	内	外	底面下平	底	内	外	5.9 [5.9]	写真 番号
24. 磁器 目録番号 B1.12	ビ-ト4-5	1 4	内-淡褐色、浅褐色 外-黃白色	内-淡褐色	少々黒	柱子插入 部分が插入	少々黒	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	内	外	内	外	底面下平	底	内	外	4.6 [4.6]	写真 番号
25. 磁器 目録番号 B1.13	ビ-ト8-15	1 2	内-黑色 外-淡褐色	内-黑色	少々黒	柱子插入 部分が插入	少々黒	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	内	外	内	外	底面下平	底	内	外	4.4 [4.4]	写真 番号
26. 磁器 目録番号 B1.14	ビ-ト17	1 5	内-黑色 外-淡褐色	内-黑色	少々黒	柱子插入 部分が插入	少々黒	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	内	外	内	外	底面下平	底	内	外	4.3 [4.3]	写真 番号
27. 磁器 目録番号 B1.15	地上内	1 6	内-黑色	内-黑色	少々黒	柱子插入 部分が插入	少々黒	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	内	外	内	外	底面下平	底	内	外	5.3 [5.3]	写真 番号
28. 磁器 目録番号 B1.16	ビ-ト14	1 5	内-黑色 外-淡褐色	内-黑色	少々黒	柱子插入 部分が插入	少々黒	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	内	外	内	外	底面下平	底	内	外	5.3 [5.3]	写真 番号
29. 磁器 目録番号 B1.17	[1]-[2]	1 5	内-黑色 外-淡褐色	内-黑色	少々黒	柱子插入 部分が插入	少々黒	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	内	外	内	外	底面下平	底	内	外	5.3 [5.3]	写真 番号
30. 磁器 目録番号 B1.18	ビ-ト5	1 5	内-黑色 外-淡褐色	内-黑色	少々黒	柱子插入 部分が插入	少々黒	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	内	外	内	外	底面下平	底	内	外	6.5 [6.5]	写真 番号
31. 磁器 目録番号 B1.19	ビ-ト10	1 2	内-黑色 外-淡褐色	内-黑色	少々黒	柱子插入 部分が插入	少々黒	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	内	外	内	外	底面下平	底	内	外	6.9 [6.9]	写真 番号
32. 磁器 目録番号 B1.20	ビ-ト11	1 2	内-黑色 外-淡褐色	内-黑色	少々黒	柱子插入 部分が插入	少々黒	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	内	外	内	外	底面下平	底	内	外	5.5 [5.5]	写真 番号
33. 磁器 目録番号 B1.21	ビ-ト12	1 2	内-黑色 外-淡褐色	内-黑色	少々黒	柱子插入 部分が插入	少々黒	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	ロクロナフヘラリガキ ロクロナフヘラリガキ	内	外	内	外	底面下平	底	内	外	5.5 [5.5]	写真 番号

